

西原大塚遺跡第179地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

埼玉県志木市教育委員会

西原大塚遺跡第179地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

この度、『西原大塚遺跡第 179 地点』の発掘調査報告書が刊行されたことを喜ばしく思います。

西原大塚遺跡では、平成 5 年度以降、西原特定土地区画整理事業に伴う大規模な発掘調査が実施され、平成 18 年度に終了しています。その成果としては、すでに『西原大塚遺跡 I～Ⅲ』（3 分冊）の発掘調査報告書が刊行されています。

しかし、この区画整理事業に伴う発掘調査が終了したとしてもまだまだ西原大塚遺跡という市内最大規模の遺跡では、未調査区域が多く残されています。今後は、区画整理事業により新設された道路が完備したことにより、周辺での開発事業はますます増加するものと予想され、それに伴う発掘調査も増加の傾向を示すものと思われま

さて、今回報告する西原大塚遺跡第 179 地点は、集合住宅建設に伴い発掘調査が実施されました。幸い駐車場部分は、掘削が深くまで及ばないという理由で、工事による破壊は避けられ、盛土保存で対応することになりました。そのため、建物建設部分に係る箇所を中心に発掘調査を実施し、これにより、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 13 軒・土坑 2 基、奈良・平安時代の溝跡 1 条、中世以降の溝跡 4 条・土坑 1 基などの遺構そして多くの貴重な遺物が発見されました。

中でも特筆すべき事項として、弥生時代後期の 582 号住居跡からは、市内初の青銅の腕輪である銅釧（どうくしろ）が 1 点出土しています。あいにく遺存状態は良くありませんでしたが、当時の西原大塚遺跡一帯を治めるような身分の高い人が身に付けていたものかもしれません。

また、中世以降の遺構では、大規模な方形^{いじょう}圍繞と想定できる形で溝跡が発見されています。これについても当時の館跡につながる新発見と言えるものでしょう。

以上、今回の発見により、志木市の歴史にまた新たなる 1 ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されるよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市幸町三丁目 7415 ～ 7417 番地所在の西原大塚遺跡第 179 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人による集合住宅建設に伴う緊急調査として、志木市教育委員会が行った。また、埋蔵文化財保存事業の実施にあたり、発掘作業・整理作業・報告書刊行作業を、共和開発株式会社に支援業務として委託したものである。
3. 発掘作業は、平成 24 年 6 月 18 日より開始し、平成 24 年 10 月 5 日に終了した。整理作業は、平成 25 年 5 月 13 日より共和開発株式会社聖蹟桜ヶ丘研修センターにて行い、平成 26 年 3 月 15 日、本書の刊行をもって終了した。
4. 本書は、尾形則敏・大久保聡が監修し、本山直子（共和開発株式会社）が編集した。執筆は第 1 章を尾形、第 2 章第 1 節を大久保、第 2 章第 2 節を二瓶秀幸（共和開発株式会社）・本山、その他を本山が行った。
5. 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、青銅製品の保存処理は石川隆司氏（埋蔵文化財の保存処理いしかわ）に委託した。
6. 本調査において出土した遺物および写真等の記録類は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

7. 調査体制

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	白 砂 正 明（平成 20 年 4 月～平成 24 年 6 月）
〃	尾 崎 健 市（平成 24 年 7 月～）
教 育 政 策 部 長	丸 山 秀 幸（平成 24 年 4 月～平成 24 年 6 月）
〃	菊 原 龍 治（平成 25 年 4 月～）
教 育 政 策 部 次 長	菊 原 龍 治（平成 24 年 6 月～平成 25 年 3 月）
担 当 課	生涯学習課生涯学習・文化財グループ
生 涯 学 習 課 長	谷 口 敬（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）
〃	松 井 俊 之（平成 25 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 副 課 長	松 井 俊 之（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）
生 涯 学 習 課 主 査	尾 形 則 敏（平成 21 年 4 月～）
〃	武 井 香 代 子（平成 24 年 4 月～）
〃	浅 見 千 穂（平成 21 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 任	松 永 真 知 子（平成 18 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 事	徳 留 彰 紀（平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月）
〃	矢 田 佳 生（平成 22 年 4 月～）
〃	大 久 保 聡（平成 25 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 事 補	大 久 保 聡（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）

志木市文化財保護審議会 井上 國夫（会長）（平成 24 年 4 月～）
" 高橋 長次（委員）（昭和 63 年 4 月～）
" 高橋 豊（委員）（平成 8 年 4 月～）
" 深瀬 克（委員）（平成 24 年 4 月～）
" 上野 守嘉（委員）（平成 24 年 4 月～）

8. 発掘調査及び整理作業参加者

調査担当者 尾形 則敏・徳留 彰紀・大久保 聡

調査員 二瓶 秀幸・本山 直子

発掘・整理作業参加者（共和開発株式会社）

愛川 弘樹・石村 崇・磯崎 茂佳・板倉 勸之・伊庭 彰一・岩下 啓亮・上田 徳彦・
大澤 奈々・大津 美衣里・柏原 康晴・合田 芳正・小坂 邦夫・小堀 千恵子・五味 正道・
斎藤 京子・斎藤 雅毅・佐藤 徹・澤 由紀子・篠原 真理子・清水 広幸・白谷 珠美・
高田 彩子・高橋 広行・高林 均・田澤 真・富沢 由・中島 良太・中野 高久・
中山 弘人・早坂 雅義・福井 康弘・松本 雄三・宮本 和野・森 和彦・矢野 聖次・
結城 真

9. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。
記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立
埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・
富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

五十嵐 睦・池田 治・江原 順・加藤 秀之・川田 壽文・川畑 隼人・隈本 健介・
小出 輝雄・斉藤 純・齋藤 欣延・斯波 治・渋谷 寛子・鈴木 一郎・照林 敏郎・
野沢 均・早坂 廣人・堀 善之・前田 秀則・松本 富雄・柳井 章宏・山本 典幸・
山本 龍・和田 晋治・渡辺 邦仁

10. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種通知については下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）／平成 24 年 7 月 5 日付け 教生
文第 5－310 号

○埋蔵物の文化財認定について／平成 25 年 1 月 29 日付け 教生文第 7－174 号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は、以下の通りである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、各図中に明記した。

3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

7. 遺物一覧中の計測値の単位は、長さがcm、重さはgである。また、()は推定値、[]は現存値を示している。

8. 本文および遺物一覧中の土器の器種については、「形土器」を省略している。

9. 遺構等の略記号は、以下の通りである。

Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 D = 土坑 M = 溝跡 P = ピット

U = 石器集中地点 T r = トレンチ

目次

はじめに

例言／凡例／目次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	12
第1節 調査に至る経緯	12
第2節 調査の方法と経過	13
第3節 基本層序	14
第3章 検出された遺構と遺物	16
第1節 旧石器時代	16
第2節 縄文時代	19
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期	25
第4節 古墳時代後期～奈良・平安時代	62
第5節 中世以降	65
第6節 時期不明の遺構	70
第7節 遺構外出土遺物	71
第4章 調査のまとめ	78
第1節 旧石器時代	78
第2節 縄文時代	78
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期	79
第4節 古墳時代後期～奈良・平安時代	83
第5節 中世以降	83
付編 西原大塚遺跡第179地点出土遺物の自然科学分析	87
第1節 炭化材の樹種同定	87
第2節 青銅製品の蛍光X線分析	88

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第 2 図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)	8
第 3 図	確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況 (1/600・1/2,000)	13
第 4 図	基本層序 (1/800・1/60)	15
第 5 図	遺構分布図 (1/500)	16
第 6 図	15 号石器集中地点 (1/60)	17
第 7 図	15 号石器集中地点出土遺物 (2/3)	18
第 8 図	縄文時代遺構分布図 (1/400)	19
第 9 図	縄文時代土坑 (1/60)	21
第 10 図	8 号ピット (1/60)	24
第 11 図	8 号ピット出土遺物 (1/3)	24
第 12 図	弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (1/400)	25
第 13 図	80 号住居跡 (1/60・1/200)	26
第 14 図	80 号住居跡区画整理事業時出土遺物 (1/3・1/4)	27
第 15 図	80 号住居跡出土遺物 (1/3)	27
第 16 図	83 号住居跡 (1/60・1/200)	28
第 17 図	83 号住居跡区画整理事業時出土遺物 (1/4)	28
第 18 図	83 号住居跡出土遺物 (1/3)	29
第 19 図	579 号住居跡 (1/60・1/30)	29
第 20 図	580 号住居跡 (1/60)	30
第 21 図	581 号住居跡 (1/60)	31
第 22 図	581 号住居跡掘り方・貯蔵穴 (1/60・1/30)	32
第 23 図	581 号住居跡遺物分布図 (1/60)	32
第 24 図	581 号住居跡出土遺物 (1/3)	33
第 25 図	582 号住居跡 (1/60)	34
第 26 図	582 号住居跡掘り方 (1/60)	35
第 27 図	582 号住居跡炉・貯蔵穴 (1/30)	36
第 28 図	582 号住居跡遺物分布図 (1/60)	37
第 29 図	582 号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	38
第 30 図	583 号住居跡 (1/60)	39
第 31 図	583 号住居跡炉 (1/30)	40
第 32 図	583 号住居跡出土遺物 (1/3)	40
第 33 図	584 号住居跡 (1/60)	41
第 34 図	584 号住居跡遺物分布図 (1/60)	42
第 35 図	584 号住居跡出土遺物 (1/3)	42
第 36 図	585 号住居跡 (1/60)	44

第 37 図	586 号住居跡 (1/60)	45
第 38 図	586 号住居跡遺物分布図 (1/60)	45
第 39 図	586 号住居跡出土遺物 (1/3)	46
第 40 図	587 号住居跡 (1/60・1/30)	46
第 41 図	588 号住居跡 (1/60)	48
第 42 図	588 号住居跡掘り方 (1/60)	49
第 43 図	588 号住居跡炉・貯蔵穴 (1/30)	49
第 44 図	588 号住居跡遺物分布図 (1/60)	50
第 45 図	588 号住居跡出土遺物 1 (1/3)	50
第 46 図	588 号住居跡出土遺物 2 (1/3)	51
第 47 図	589 号住居跡 (1/60)	53
第 48 図	589 号住居跡掘り方 (1/60)	54
第 49 図	589 号住居跡炉・貯蔵穴 (1/30)	55
第 50 図	589 号住居跡遺物分布図 (1/30)	56
第 51 図	589 号住居跡出土遺物 1 (1/3)	57
第 52 図	589 号住居跡出土遺物 2 (1/3・1/1)	58
第 53 図	704 号土坑 (1/60)	59
第 54 図	704 号土坑出土遺物 (1/3)	59
第 55 図	713 号土坑 (1/60)	60
第 56 図	86 号ピット出土遺物 (1/3)	60
第 57 図	54～56・86 号ピット (1/60)	61
第 58 図	古墳時代後期～奈良・平安時代遺構分布図 (1/400)	62
第 59 図	6 号溝跡 (1/60・1/200)	63
第 60 図	11 号ピット (1/60)	64
第 61 図	中世以降・時期不明遺構分布図 (1/400)	65
第 62 図	50～53 号溝跡 (1/300・1/100)	67
第 63 図	51 号溝跡出土遺物 (1/1)	68
第 64 図	705 号土坑 (1/60)	69
第 65 図	703 号土坑 (1/60)	71
第 66 図	遺構外出土遺物 旧石器時代 (2/3)	72
第 67 図	遺構外出土遺物 縄文時代 (1/1・1/3)	73
第 68 図	遺構外出土遺物 弥生時代後期～古墳時代前期 (1/3・1/4)	75
第 69 図	遺構外出土遺物 中世以降 (1/1)	77
第 70 図	遺構外出土遺物 時期不明 (1/3)	77
第 71 図	西原大塚遺跡第 179 地点検出住居跡 (1/200)	80
第 72 図	銅釧 (完形品) 出土遺跡分布図	81
第 73 図	粘土床炉分布図	82
第 74 図	青銅片の蛍光 X 線分析結果	89

表目次

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第 2 表	西原大塚遺跡発掘調査一覧	9
第 3 表	西原大塚遺跡発掘調査報告書一覧	10
第 4 表	西原大塚遺跡第 179 地点の発掘調査工程表	14
第 5 表	15 号石器集中地点出土遺物一覧	18
第 6 表	8 号ピット出土遺物一覧	24
第 7 表	縄文時代ピット一覧	24
第 8 表	80 号住居跡出土遺物一覧	27
第 9 表	83 号住居跡出土遺物一覧	29
第 10 表	581 号住居跡出土遺物一覧	33
第 11 表	582 号住居跡出土遺物一覧	37
第 12 表	583 号住居跡出土遺物一覧	40
第 13 表	584 号住居跡出土遺物一覧	43
第 14 表	586 号住居跡出土遺物一覧	46
第 15 表	588 号住居跡出土遺物一覧	52
第 16 表	589 号住居跡出土遺物一覧 1	58
第 17 表	589 号住居跡出土遺物一覧 2	59
第 18 表	704 号土坑出土遺物一覧	59
第 19 表	86 号ピット出土遺物一覧	61
第 20 表	弥生時代後期～古墳時代前期ピット一覧	61
第 21 表	6 号溝跡出土遺物一覧	64
第 22 表	11 号ピット出土遺物一覧	64
第 23 表	古墳時代後期～奈良・平安時代ピット一覧	64
第 24 表	50 号溝跡出土遺物一覧	66
第 25 表	51 号溝跡出土遺物一覧	68
第 26 表	52 号溝跡出土遺物一覧	68
第 27 表	24 号ピット出土遺物一覧	69
第 28 表	中世以降ピット一覧	70
第 29 表	遺構外出土遺物一覧（旧石器時代）	72
第 30 表	遺構外出土遺物一覧（縄文時代）	74
第 31 表	遺構外出土遺物一覧（弥生時代後期～古墳時代前期）	76
第 32 表	遺構外出土遺物一覧（古墳時代後期～奈良・平安時代）	77
第 33 表	遺構外出土遺物一覧（中世以降）	77
第 34 表	遺構外出土遺物一覧（時期不明）	77
第 35 表	西原大塚遺跡第 179 地点住居跡一覧	80
第 36 表	樹種同定結果	87

図版目次

- 図版 1 1. 1区全景 2. 2区全景
- 図版 2 1. 3区全景 2. 15号石器集中地点 3. 15号石器集中地点遺物出土状態
4. 702号土坑 5. 706号土坑
- 図版 3 1. 707号土坑 2. 708号土坑 3. 709号土坑 4. 710号土坑
5. 711号土坑 6. 712号土坑 7. 714号土坑 8. 715号土坑
- 図版 4 1. 8号ピット 2. 80号住居跡 3. 83号住居跡 4. 579号住居跡 炉
5. 580号住居跡 6. 581号住居跡 7. 581号住居跡 遺物出土状態
8. 582号住居跡
- 図版 5 1. 582号住居跡 炉1 2. 582号住居跡 炉2
3. 582号住居跡 貯蔵穴・赤砂 4. 582号住居跡 遺物出土状態
5. 583号住居跡 6. 583号住居跡 炉 7. 584号住居跡
8. 584号住居跡 遺物出土状態
- 図版 6 1. 585号住居跡 2. 586号住居跡 3. 587号住居跡 4. 587号住居跡 炉
5. 588号住居跡 6. 588号住居跡 炉 7. 588号住居跡 貯蔵穴
8. 588号住居跡 赤砂と遺物出土状態
- 図版 7 1. 588号住居跡 焼土と遺物出土状態 2. 588号住居跡 炭化材出土状態
3. 589号住居跡 4. 589号住居跡 炉 5. 589号住居跡 貯蔵穴
6. 589号住居跡 赤砂(南側) 7. 589号住居跡 赤砂(北側)
8. 589号住居跡 遺物出土状態
- 図版 8 1. 704号土坑 2. 713号土坑 3. 54～56・86号ピット 4. 6号溝跡(1区)
5. 6号溝跡(3区) 6. 11号ピット 7. 50・51号溝跡(2区)
8. 51号溝跡北端屈曲部(2区)
- 図版 9 1. 50・51号溝跡(4区) 2. 50号溝跡南端屈曲部(4区)
3. 51号溝跡 工具痕(2区) 4. 51号溝跡 工具痕(4区) 5. 52号溝跡
6. 53号溝跡 7. 705号土坑 8. 24号ピット
- 図版 10 1. 焼土跡 2. 703号土坑 3. 基本層序 4. 作業風景
5. 15号石器集中地点出土遺物 6. 8号ピット出土遺物 7. 80号住居跡出土遺物
8. 83号住居跡出土遺物
- 図版 11 1. 581号住居跡出土遺物 2. 582号住居跡出土遺物 3. 583号住居跡出土遺物
- 図版 12 1. 584号住居跡出土遺物 2. 586号住居跡出土遺物 3. 588号住居跡出土遺物(1)
- 図版 13 1. 588号住居跡出土遺物(2) 2. 589号住居跡出土遺物(1)
- 図版 14 1. 589号住居跡出土遺物(2) 2. 704号土坑出土遺物
3. 86号ピット出土遺物 4. 6号溝跡出土遺物 5. 11号ピット出土遺物
6. 50号溝跡出土遺物
- 図版 15 1. 51号溝跡出土遺物 2. 52号溝跡出土遺物 3. 24号ピット出土遺物
4. 遺構外出土遺物(旧石器時代) 5. 遺構外出土遺物(縄文時代1)

- 図版 16 1. 遺構外出土遺物（縄文時代2） 2. 遺構外出土遺物（弥生時代後期～古墳時代前期）
- 図版 17 1. 遺構外出土遺物（古墳時代後期～奈良・平安時代） 2. 遺構外出土遺物（中世以降）
3. 遺構外出土遺物（時期不明）
- 図版 18 588号住居跡出土炭化材

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北 4.71km、東西 4.73km の広がりを持ち、面積は 9.06km²、人口約 7 万 3 千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の 3 本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した 12 遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた 14 遺跡である（第 1 図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,370 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,280 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	51,540 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163,930 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ビット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000 m ²	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	10,300 m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		486,100 m ²					

平成 25 年 9 月 20 日 現在

第 1 表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7年(1995)度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。

また、城山遺跡では、平成13(2001)年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21年に発掘調査が実施された第62地点(道路・駐車場部分)でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。最新では、平成23(2011)年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認

定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。最新資料では、今年度（平成25年度）に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が590軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品1点と西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土の鳥形土製品1点・壺形土器4点については、考古資料として、平成24年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶^{ふじゆしんぼう}が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が発見されており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地

の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡 128 号住居跡出土の銅印ほか 9 点と城山遺跡第 241 号住居跡出土の富壽神寶ほか 2 点については、考古資料として、平成 24 年 3 月 1 日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』(註 1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻かい国こく雑ざつ記』(註 2)に登場する「大石信濃守館おおいしなののかみのやかた」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊おおつかじゅうぎよくぼう」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成 7 (1995) 年に発掘調査が実施された第 29 地点の 127 号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成 8 (1996) 年度に発掘調査が実施された第 35 地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130 号土坑については鑄造遺構、134 号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成 13 (2001) 年度の第 42 地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234 号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成 6 (1994) 年度に発掘調査が実施された第 21 地点から、当市では初めて、鎧よろいの札さねである鉄製品 1 点と鉄鏃 1 点が出土している。出土した遺構は、19 世紀前半の 86 号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成 11～14 (1999～2002) 年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第 49 地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した 67 号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和 62 (1987) 年の第 2 地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成 7 (1995) 年の中道遺跡第 37 地点からは、人骨と古銭 5 枚を出土した土坑墓 1 基と 13 世紀に比定される青磁盤 1 点を出土した道路状遺構 1 条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和 60 (1985) 年の第 1 地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成 15 (2003) 年の新邸遺跡第 8 地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓 2 基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院しょうりんざんかんのんじだいでいじゆいん」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成 5 (1993) 年に発掘調査が実施された田子山遺跡第 31 地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治 2～5 年)に関連するローム採掘遺構が検出されている。こ

の遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する西原大塚遺跡について概観することにする。

西原大塚遺跡は、志木市幸町2～4丁目に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。本遺跡は、北東－南西方向に約700m、北西－南東方向に約150mの広がりをもち、面積163,630㎡を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡を地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は遺跡南端で約19m、北端で約14mを測り、大略南から北にかけて序々に標高が低くなっている。崖線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。この遺跡の北西方向には柳瀬川が北東流し、さらに崖下にはいくつもの湧水地があったという記録もあることから、古より生活するためには欠かすことのできない飲料水が豊富にあったものと想像される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成5年度以降、この地域内で西原特定土地区画整理事業が本格的に開始されており、これに伴う道路部分の発掘調査が急ピッチに遂行されてきた。そして、この事業に伴う発掘調査は、平成18年度に完了したと言えるが、今後、道路の完成に付随して個人住宅・共同住宅建設などの小・中規模開発が増加することが予想される。そのため、この遺跡での埋蔵文化財の保存事業については、これからが、本当の意味で開始と言えるであろう。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。ここでは、本遺跡の概要を時代別にまとめるとこととする。

まず、旧石器時代では、石器集中地点が14カ所確認されている。西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査では、石器集中地点12カ所が検出されている。特に、5号石器集中地点からは安山岩製のナイフ形石器が立川ロームⅧ層上部から出土しており、市内最古の石器として位置付けられている。

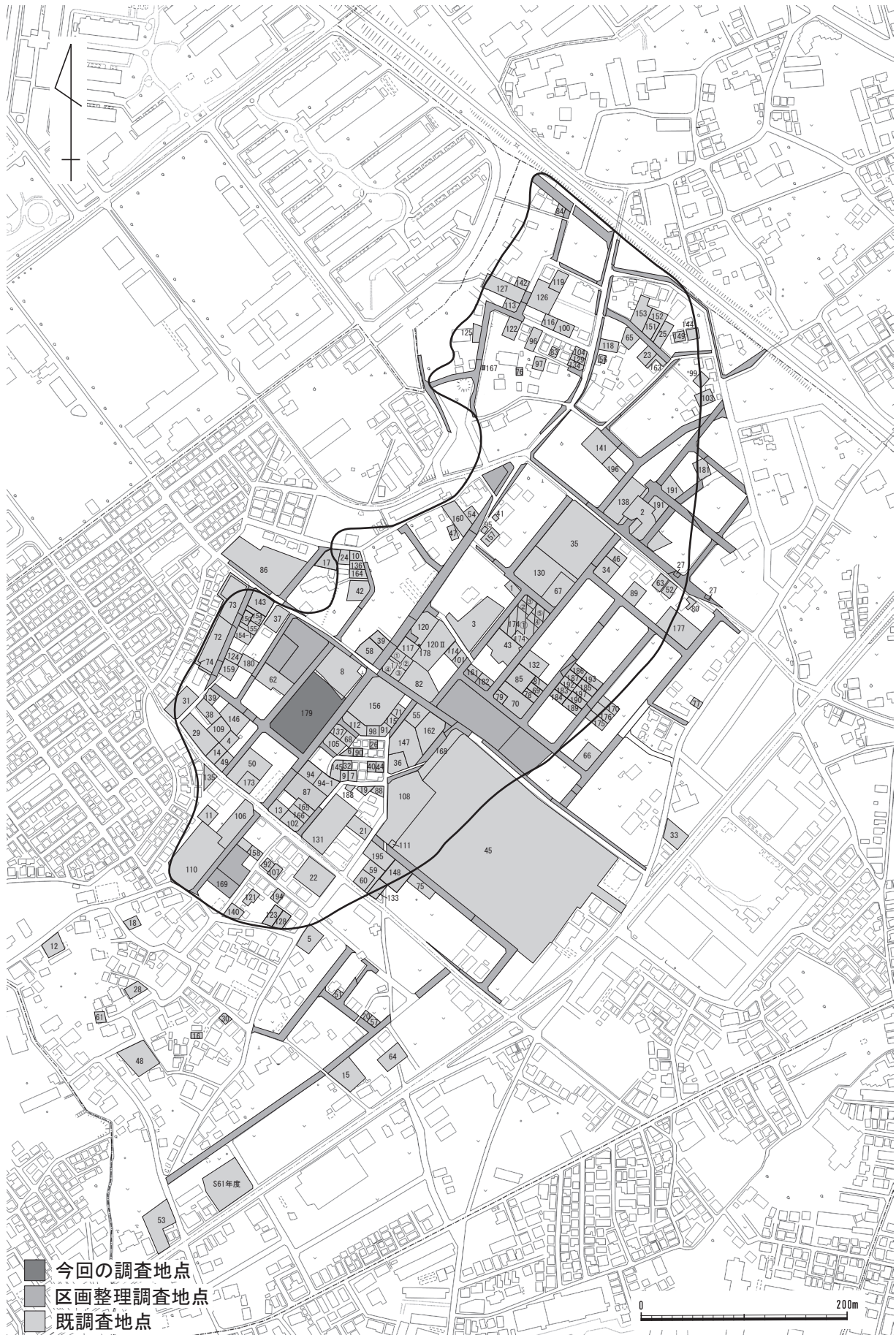
縄文時代では、草創期において、表面採集資料ではあるが、長さ11.9cmの両面調整石器1点が確認されている。早期では、条痕文系土器を伴う炉穴15基が遺跡北西隅を中心に検出されている。

前期では、黒浜式期と住居跡が数軒と諸磯C式期の土坑1基が遺跡南西隅に分布している。最新では平成24年度の第180地点で黒浜式期の住居跡1軒が検出されている。

中期では、特に西原大塚遺跡においては市内でも遺跡数が最も多く、現時点で中葉の勝坂式期から後葉の加曾利E式期の住居跡が180軒を超え、さらにそれらが環状に配置していることが判明しつつある。遺物では、50号住居跡出土の硬玉製大珠(文献No.23)、108号住居跡出土の顔面把手付土器(未報告)などが特筆される。

後期では、堀之内式期の住居跡1軒、加曾利B式期の住居跡1軒が遺跡南西隅に検出されている。

晩期では、遺構外遺物として安行3式土器が遺跡北西隅で出土しているが、遺構は検出されていない。



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

調査地点	面積 (㎡)	発掘調査期間	調査原因	遺 構 の 概 要	文献名 第3表文献No.
第1地点	112.50	昭和48年8月3日～12日	学術調査	縄文中期(住居跡5軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.1
第2地点	940.00	昭和55年7月20日～8月21日	学術調査	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.2
第3地点	439.00	昭和58年8月23日～9月8日	共同住宅	縄文中期(住居跡5軒、土坑2基)	No.3
第4地点	105.00	昭和62年1月5日～11日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.4
第6地点	64.32	昭和62年11月18日～20日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	No.5
第7地点	77.44	昭和63年1月20日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(小竪穴状遺構1基)、時期不詳(土坑1基、溝跡1本)	No.7
第8地点	1,227.00	昭和63年3月16日～8月6日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑24基)、弥生後期～古墳前期(住居跡13軒、方形周溝墓1基、掘立柱建築遺構1棟)	No.6
第9地点	75.86	昭和63年8月18日～9月10日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第10地点	80.54	昭和63年8月27日～10月4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑4基、遺物包含層)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)	
第11地点	220.84	平成元年5月16日～25日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.8
第14地点	129.00	平成2年5月26日～6月11日	共同住宅	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.10
第21地点	265.73	平成3年5月28日～29日	事務所併用住宅	弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.10
第32地点	60.11	平成6年4月7日～14日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒)	No.9
第34地点	317.00	平成7年8月4日～9月1日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒、土坑6基)、弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)、奈良・平安(住居跡1軒)	No.11
第36地点	248.05	平成8年10月15日～26日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.13
第37地点	220.00	平成9年4月8日～6月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)、時期不詳(土坑4基)	No.14
第39地点	63.76	平成9年8月5日～28日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡3軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、方形周溝墓1基)	No.14
第43地点	779.60	平成12年1月11日～3月24日	農地転用	縄文中期(住居跡10軒、土坑22基)、弥生後期～古墳前期(住居跡9軒)、古墳(1軒)	No.16
第45地点	5,642.42	平成11年8月3日～12月24日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡72軒、方形周溝墓1基)、古墳後期(住居跡2軒)	No.15
第47地点	86.12	平成12年4月3日～4日	個人住宅建設	縄文中期(土坑1基)、弥生後期～古墳前期(溝跡1本)	No.17
第54地点	90.74	平成13年9月13日～14日	物置建設	縄文中期～後期(土坑7基)、弥生後期～古墳前期(方形周溝墓1基)	No.18
第65地点	115.93	平成14年7月25日～8月9日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.19
第67地点	456.20	平成14年9月9日～11月29日	個人住宅建設	縄文中期(住居跡8軒、土坑8基)、弥生後期～古墳前期(住居跡8軒、掘立柱建築遺構1棟、土坑1基)	No.22
第108地点	684.60	平成21年2月23日～4月14日	コミュニティ機能を持つ複合施設建設	縄文中期(住居跡1軒)、弥生後期～古墳前期(住居跡15軒)	No.28
第110地点	500.00	平成17年2月7日～3月10日	集合住宅建設	旧石器(石器集中2カ所)、縄文中期(土坑1基、集石1基)、弥生後期～古墳前期(住居跡7軒)	No.21
第111地点	80.00	平成17年1月17日～1月21日	消防車庫建設	古墳前期(住居跡1軒)	No.20
第113地点	119.75	平成17年2月4日～15日	個人住宅建設	縄文早期(炉穴1基)、近世以降(土坑16基)	No.26
第120-1地点	460.56	平成17年6月27日～7月7日	保育園建設	縄文中期(住居跡1軒、土坑62基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒、方形周溝墓1基)	No.25
第120-2地点	566.55	平成18年5月30日～6月28日			
第124地点	150.02	平成17年12月19日～平成18年1月13日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡3軒)	No.26
第131地点	472.21	平成18年8月30日～9月20日	集合住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡2軒、方形周溝墓5基)	No.25
第137地点	100.00	平成18年11月9日～15日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)、時期不詳(ピット5本)	No.27
第138地点	20.00	平成19年2月5日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(溝跡1本)	No.24
第154地点	120.02	平成20年3月17日～19日	分譲住宅軒建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒)、奈良・平安(住居跡1軒、ピット1本)、中世以降(土坑1基)	No.24
第155地点	120.00	平成19年3月18日	個人住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1)	No.27
区画整理	38,242.39	平成元年12月20日～平成19年1月12日	区画整理事業	旧石器(石器集中12カ所)、縄文早期(炉穴13基)、縄文前期(住居跡2軒、土坑1基)、縄文中期(住居跡101軒、土坑233基、集石13基)、縄文後期(住居跡2軒、土坑9基)、弥生後期～古墳前期(住居跡362軒、方形周溝墓22基)、古墳後期(住居跡6軒)、奈良・平安(住居跡7軒)、中近世(土坑155基、井戸跡6基)	No.12 No.23
第169地点	90.00	平成22年10月4日～13日	共同住宅建設	弥生後期～古墳前期(住居跡1軒、掘立柱建築遺構1棟)	No.29
第174①地点	627.54	平成23年10月19日～平成24年1月13日	宅地造成	縄文中期(住居跡10軒、屋外炉2基、土坑44基)、弥生後期～古墳前期(住居跡4軒)	No.30

第2表 西原大塚遺跡発掘調査一覧

第1章 遺跡の立地と環境

No.	書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡 発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・落合静男 谷井 彪・宮野和明
2	志木市史 原始・古代資料編	1984	志木市史	志木市	宮野和明・井上国夫 小久保徹
3	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
4	新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点 発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
5	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
6	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
7	西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
8	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
9	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 深井恵子
10	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14 地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第 1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺 跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
11	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
12	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概 報	1998	—	志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
13	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
14	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
15	西原大塚遺跡第45地点 発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松オーガニクス株式会社	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳・上田 寛
16	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 内野美津江
17	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 深井恵子
18	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
19	志木市遺跡群14	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
20	西原大塚遺跡第111地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
21	西原大塚遺跡第110地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第9集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
22	志木市遺跡群15	2006	志木市の文化財第37集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調 査報告書	2009	志木市遺跡調査会調査報告第13集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
24	西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点 埋蔵文 化財 発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第14集	志木市遺跡調査会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
25	西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山 遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第15集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江 宮川幸佳
26	志木市遺跡群17	2008	志木市の文化財第39集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
27	志木市遺跡群18	2009	志木市の文化財第41集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木 修
28	西原大塚遺跡第108地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2009	志木市の文化財第42集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 坂上直嗣・青池紀子他
29	西原大塚遺跡第169地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第47集	志木市教育委員会	尾形則敏・徳留彰紀
30	西原大塚遺跡第174①地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志木市の文化財第55集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形則敏 藤波啓啓・松木綾子

第3表 西原大塚遺跡発掘調査報告書一覧

弥生時代では、市内全体を見ても前・中期が空白期となる。後期では、末葉以降古墳時代前期にかけての比較的新しい時期の住居跡が現時点では、600軒を超えて検出されており、県内でも屈指の検出数であることは疑いがない事実であろう。住居跡以外では、掘立柱建築遺構3棟、方形周溝墓34基が検出されている。遺物では、122号住居跡出土の動物形土製品1点と第45地点17号方形周溝墓出土の鳥形土製品1点・壺形土器4点が、平成24年3月31日付けで、市指定文化財に指定されている。

古墳時代では、中期が空白期となり、後期の住居跡10軒が検出されている。また、本遺跡内北東に塚の山古墳が所在するが、近接する道路部分の調査でも周溝が不検出であるため、詳細は不明である。

奈良・平安時代では、住居跡13軒が検出されている。本遺跡では、8世紀前葉に比定される19号住居跡が最古の資料となる。

中・近世では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査において、地下式坑（地下室か）を含む土坑155基、井戸跡7基、配石遺構1基が検出されている。本地点の調査において、3本の溝跡（51～53M）が検出され、それらが方形の区画をもち、館跡として想定できる可能性があることには注目される。

[註]

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒なぬしみやはらなかえもん なかつねが、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成24年2月、大東建託株式会社より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。工事計画は志木市幸町3丁目7415～7417（面積2,445.98㎡）に集合住宅の建設を行うものである。

教育委員会は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、概ね下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

2. 確認調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能である場合については、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

平成24年2月、教育委員会は、工事主体者である個人から確認調査依頼書を受理し、3月7日から14日にかけて確認調査を実施した。13本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡20軒、平安時代の住居跡2軒、平安時代以降の溝跡1本、時期不明の溝跡1本、ピット群多数を確認した（第3図）。教育委員会は直ちに大東建託株式会社に確認調査の結果を報告し、同時に埋蔵文化財の保存措置を要請し、平成24年4月から7月にかけて保存措置に関する協議を行った。6月当初、宅地部分の一部と駐車場の1,139.46㎡については十分な保護層が確保できるため盛土保存とし、それ以外の宅地部分である1,306.52㎡については十分な保護層を確保できないため記録保存（発掘調査）として、それぞれ取り扱うこととなった。しかし、その後、建築計画に変更が生じ、宅地の一部分に十分な保護層が確保できなくなったため、当該箇所の75㎡を記録保存として追加で取り扱うこととなった。その結果、宅地部分の一部と駐車場を合わせた1,064.46㎡を盛土保存とし、それ以外の宅地部分である1,381.52㎡を記録保存（発掘調査）として取り扱うこととした。これを受けて教委教育委員会は、平成24年8月3日付で埋蔵文化財発掘調査の通知を埼玉県教育委員会に提出した。

平成24年6月、志木市埋蔵文化財保存事業取扱要綱に基づき、志木市（市長 長沼 明）と工事主体者との間で委託契約を締結した。調査主体者となる教育委員会は、発掘調査の実施にあたり、民間調査組織の支援を受けることとし、競争入札を行った。その結果、支援を依頼する民間調査組織が共和開発株式会社（代表取締役 加藤 直秀）に決定し、委託契約を締結した。

以上により、教育委員会を調査主体に、平成24年6月18日より発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

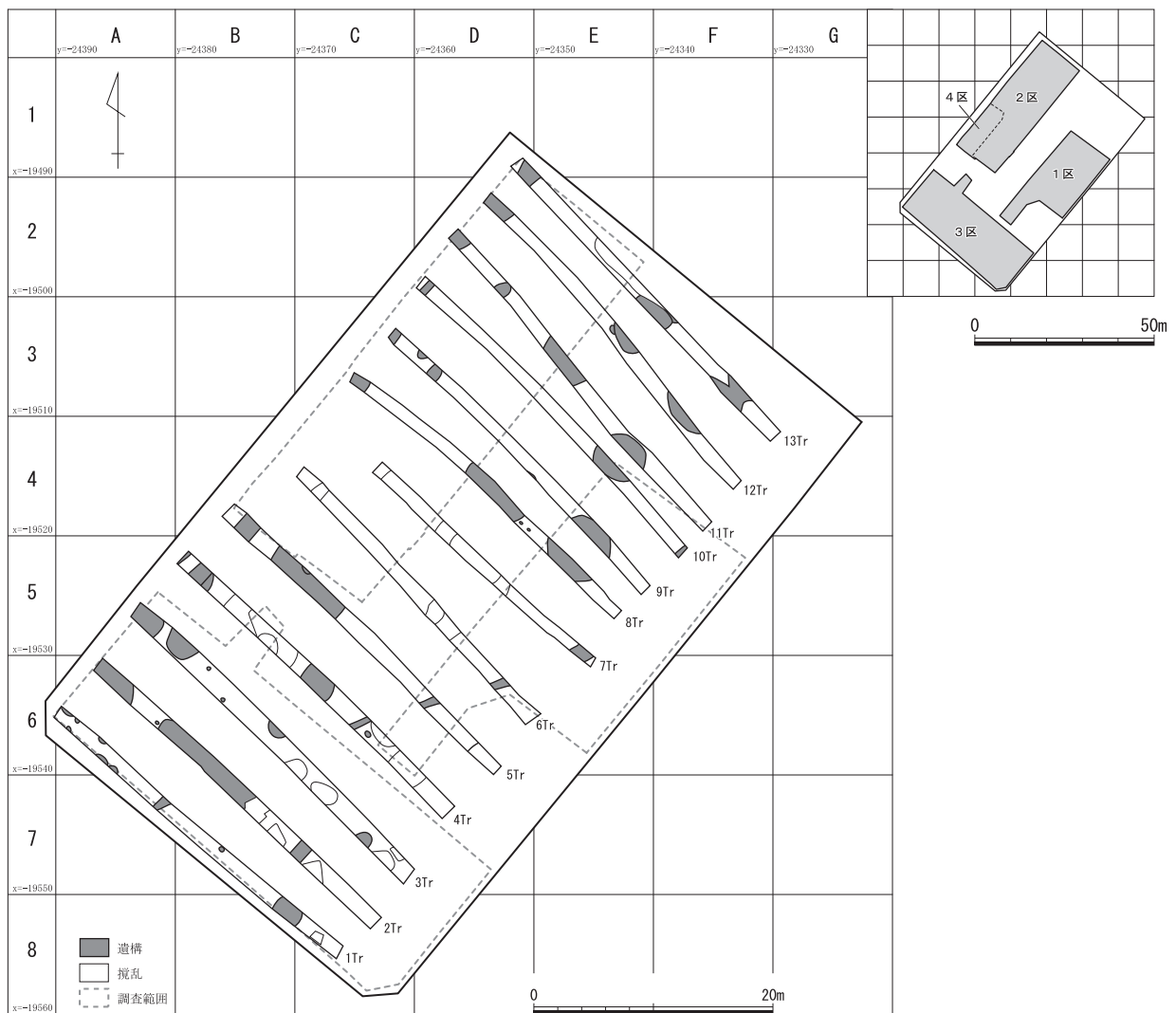
本調査は、平成24年3月7日～14日に行われた確認調査の結果とその後の協議を経て、平成24年6月18日より現地作業を開始した。敷地面積2,445.98㎡、調査面積は1,381.52㎡である。

調査は、敷地内の建物建設範囲に該当する3箇所がその対象となり、1～3区として、区ごとに調査を進めた。また、建築計画の変更に伴い2区南西部分を拡張することとなったため、4区として調査を行った。

調査開始に先立ち、6月18日～20日にかけて、資材の搬入・基準点移動などの準備作業を行い、6月21日より調査を開始した。

調査区内の表土は重機によって除去した。発生土は調査区脇に仮置きし、各区の調査終了後に埋め戻しを行った。なお、最終的な整地作業は、施工業者である大東建託株式会社が行った。

表土除去後、遺構確認及び検出写真撮影を行い、その後、遺構の調査を開始した。遺構は、断面観察のために覆土を半截またはベルト状に残して掘り下げ、覆土の堆積状況を記録した。遺構の平面図については、トータルステーションにて国家座標と標高を記録し、現場にて図化した。遺物は出土位置を



第3図 確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況 (1/600・1/2,000)

第2章 発掘調査の概要

記録して取り上げを行い、微細な破片については、遺構及びグリッドごとを一括して取り上げた。

発掘調査は、1区が6月21日～7月11日、2区は7月17日～7月31日、3区は8月1日～9月12日、4区を9月10日～9月14日まで行った。9月18日には撤収作業を開始し、9月24日に現地での作業を終了した。

9月25日より基礎整理作業を行い、10月5日に現地調査業務を完了した。

	平成24年(2012)				備考
	6月	7月	8月	9月	
1区表土掘削	■				6/21～6/25
579Y		■			7/9
580Y		■			6/28～7/2
581Y		■			6/28～7/2
582Y		■			7/2～7/9
702D		■			7/5・6
6M		■	■		1区6/26 / 3区8/10
1～3Tr		■			7/9～7/11
1区埋め戻し		■			7/11～7/15
2区表土掘削		■			7/10～7/15
583Y		■			7/19～7/24
584Y		■			7/18～7/23
585Y		■			7/23・24
703D		■			7/13・7/24
704D		■			7/20
705D		■			7/20～7/23
706D		■			7/25・26
50M		■		■	2区7/17・18 / 4区9/12・13
51M		■		■	2区7/17・18 / 4区9/12・13
16FP		■			7/19
4～7Tr		■			7/26～7/31
2区埋め戻し			■		8/1～8/10
3区表土掘削			■		7/30～8/7
586Y			■		8/9～8/17
587Y			■		8/9～8/17
588Y			■		8/8～8/21
589Y			■		8/15～29
80Y			■		8/23・24
83Y			■		8/28・29
707D			■		8/22・23
708D			■		8/22・23
709D			■		8/23
710D			■		8/24
711D			■		8/24
712D			■		8/24
713D			■		8/27
714D			■		8/29
715D				■	9/3・4
52M			■		8/8
53M			■	■	8/9 / 拡張9/10・11
15U(12Tr)				■	9/5～9/12
8～11・13・14Tr				■	9/3～9/11
3区埋め戻し				■	9/12～9/18
4区表土掘削				■	9/10～9/12
4区埋め戻し				■	9/14～9/18
撤収作業				■	9/18～9/24

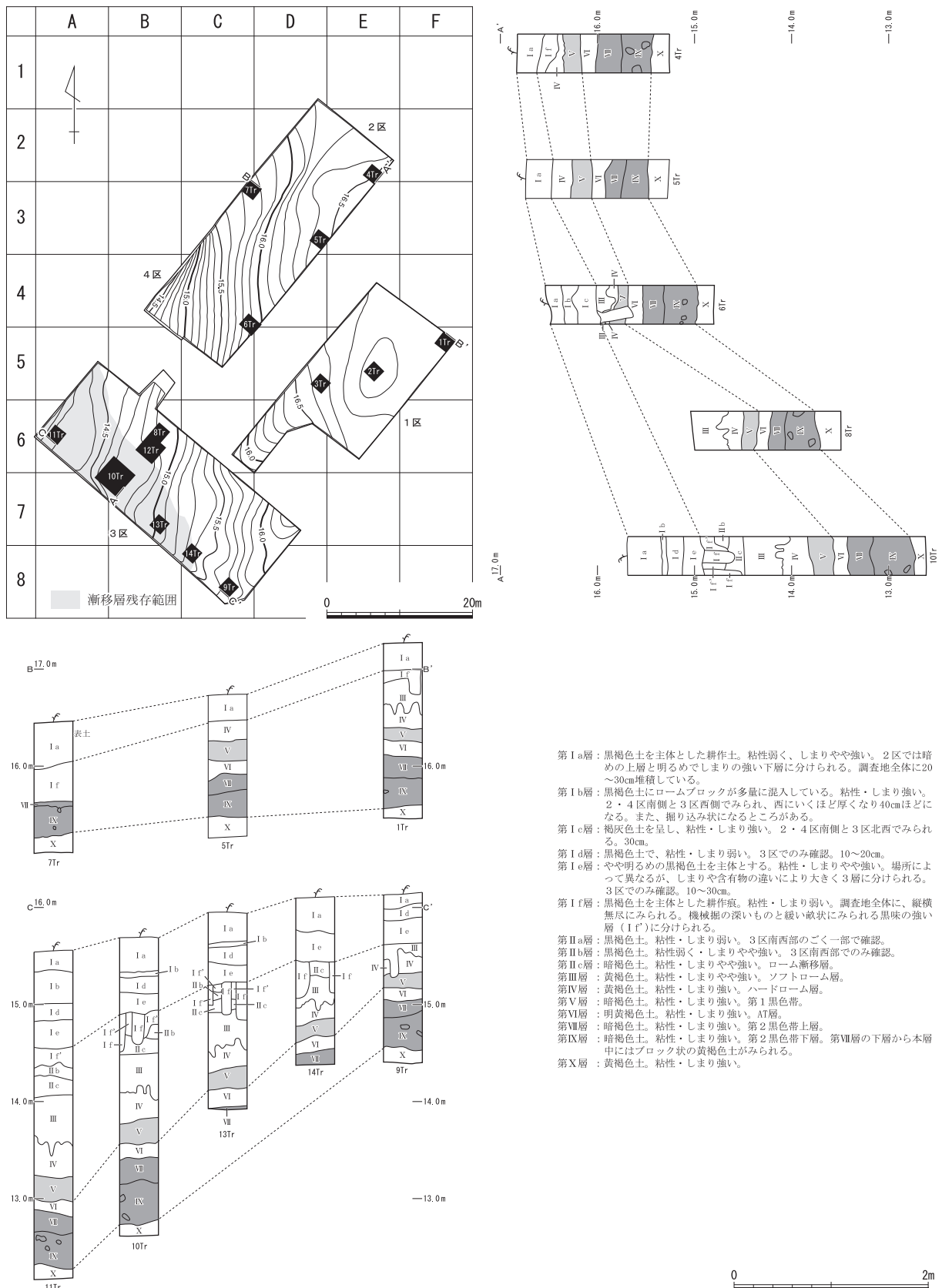
第4表 西原大塚遺跡第179地点の発掘調査工程表

第3節 基本層序

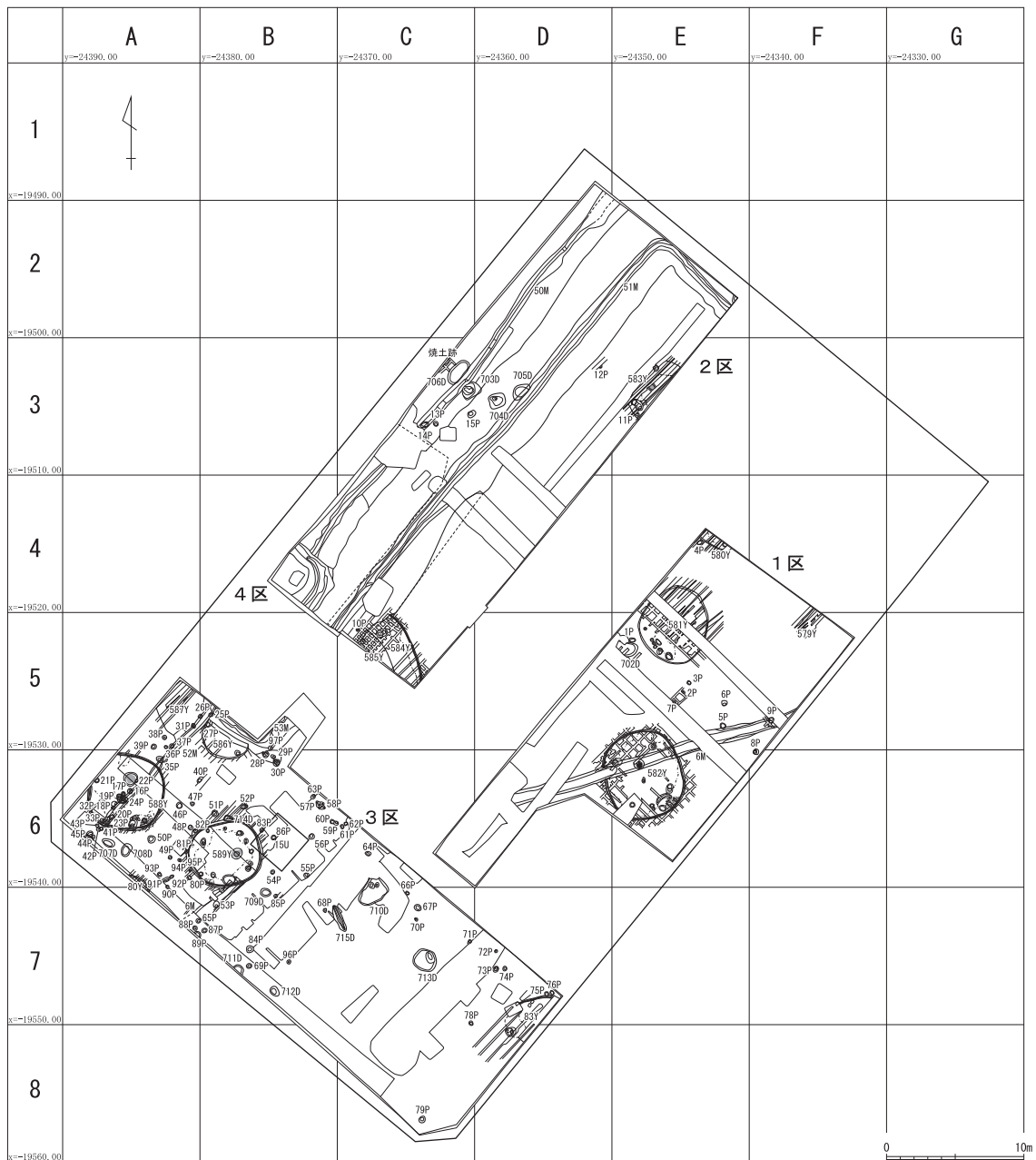
本調査地点では、旧石器時代の調査も兼ね14箇所の深掘りトレンチを設定し、層序の確認を行った。1～11号トレンチは立川ローム第X層上位まで、12～14号トレンチは第VII層上位まで掘り下げた。

各トレンチの堆積状況とみると、1区・2区の北東側では、ほぼ平坦または傾斜は緩く（第4図A-A' 4～6号トレンチ・B-B'）、1区・2区と3区の境付近から急激に落ち込んでいる（第4図A-A'）

10・12号トレンチ・C-C')。本調査地点は、北東側に広がる台地の縁辺にあたり、南西側の谷地形へと下る傾斜地となっている。



第3章 検出された遺構と遺物



第5図 遺構分布図 (1/500)

第1節 旧石器時代

(1) 概要

旧石器時代の調査は、各区の縄文時代以降の調査終了後に行った。本調査地点周辺では、調査地南側に隣接する、西原特定土地区画整理に伴う発掘調査（以下「区画整理事業」）の第11地点で4号石

器集中地点が検出されており、本調査区内でも、3区の表土掘削時に旧石器時代の遺物が出土したため、特に3区を中心としてトレンチを14箇所設定した。

トレンチは2×2mの範囲で、基本的には立川ローム第Ⅹ層までを掘り下げることとし、調査順に1～14の番号を付して調査を行った(第4図)。このうち9号トレンチについては、Ⅸ層下位より円礫が1点出土したが、1点のみで広がりが見られないこと、出土位置が調査範囲内の際であったことから、それ以上の調査は行わなかった。

12号トレンチは、86号ピットの調査中に、壁面より剥片(第7図-3)が出土したため、これを中心に1×1mの範囲で設定し、調査したものである。この結果、旧石器時代の遺物の出土が認められ、この石器集中範囲を15号石器集中地点とした。なお、遺物の広がりを確認するため、12号トレンチの東・南側を1mずつ拡張したが、遺物の出土は認められなかった。

(2) 石器集中地点

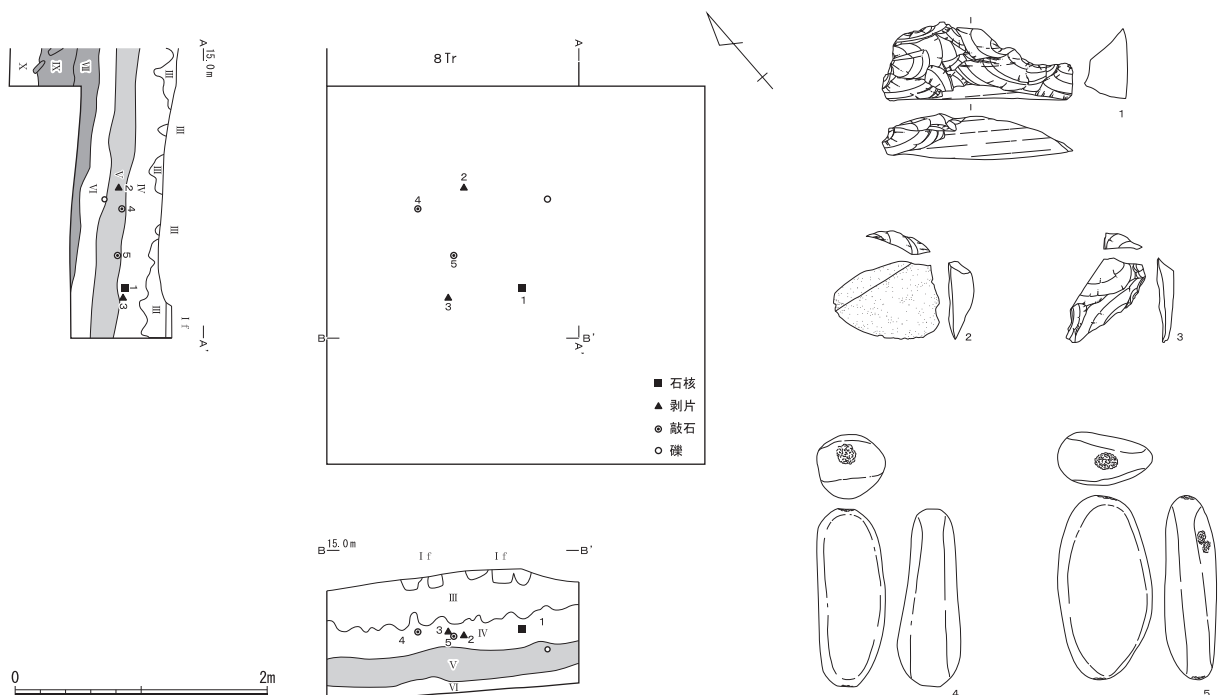
15号石器集中地点

概要 (第6図、図版2-2・3)

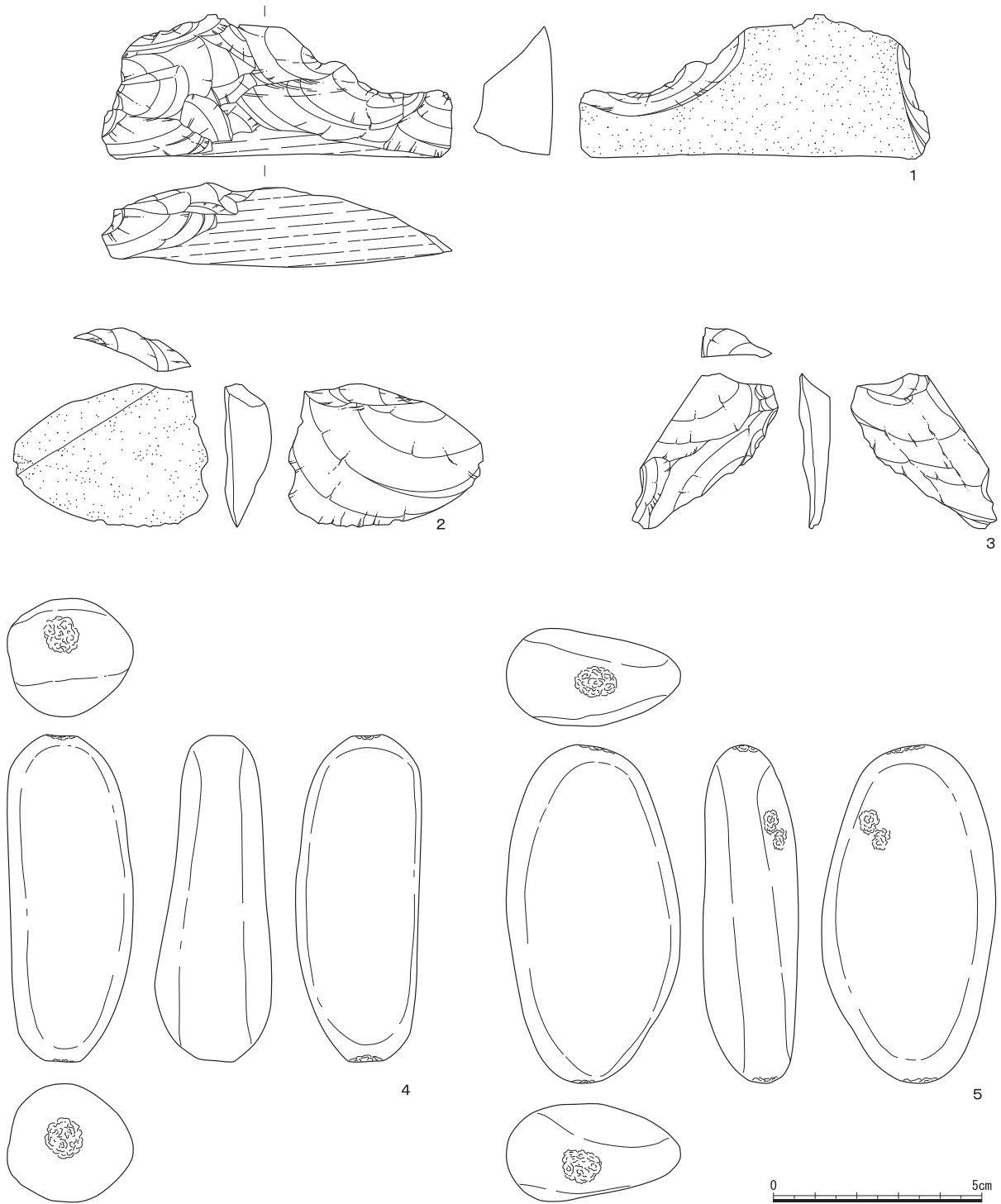
(B-6) グリッドに位置する。12号トレンチ内の約1m四方の範囲内から、石核1点・剥片2点・敲石2点が出土した。出土層位は立川ローム第Ⅳ層下位である(調査区内でも傾斜があるため、第6図の断面に示した位置は投影のため誤差がある。B-B'の位置が実際の出土層位に近い)。

遺物 (第7図、第5表、図版10-5)

1は石核、2・3は剥片で、いずれも黒色頁岩である。3点は同一個体の可能性が高い。4・5は敲石で、両端部には敲打痕がみられる。



第6図 15号石器集中地点 (1/60)

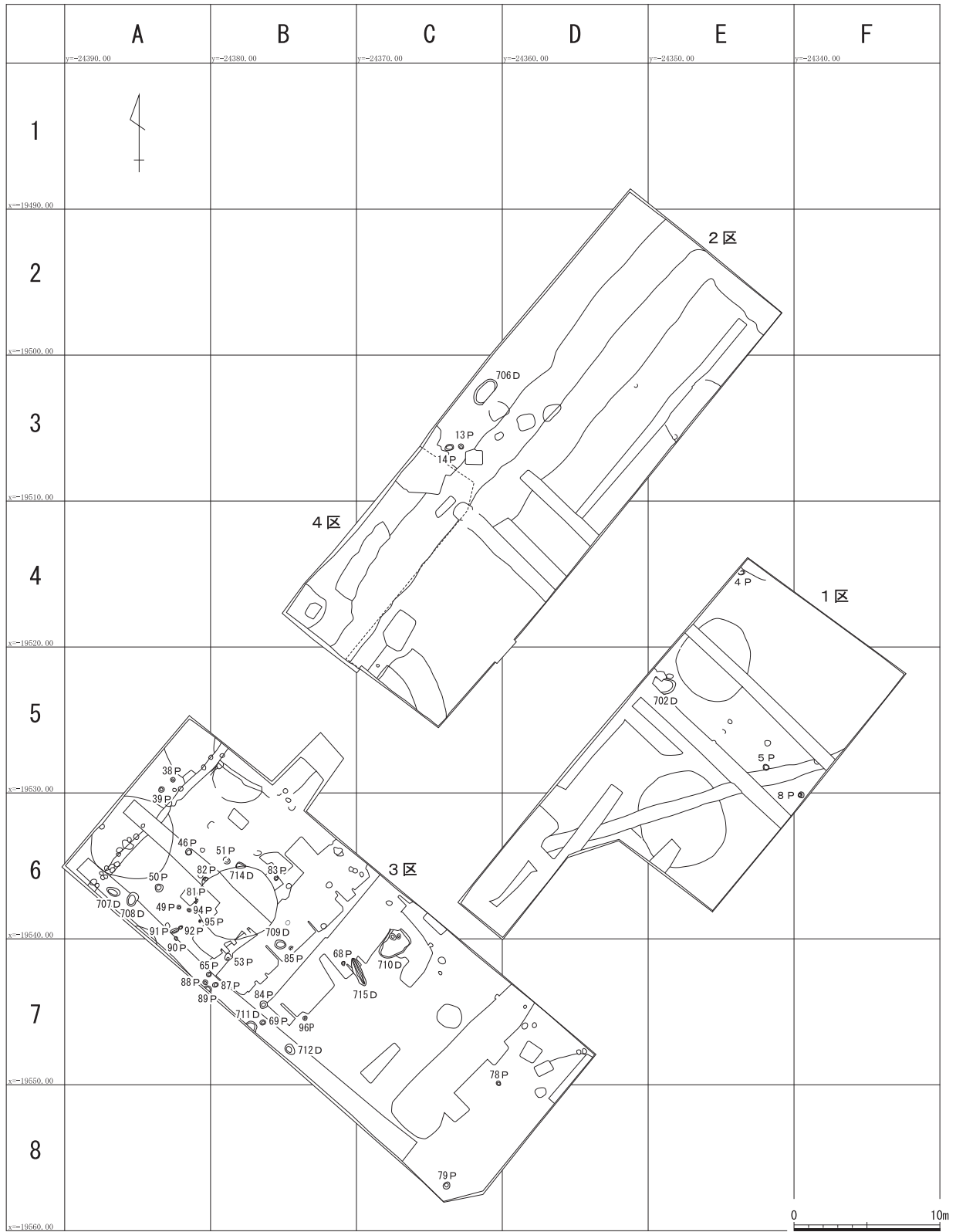


第7図 15号石器集中地点出土遺物 (2/3)

遺物番号	種別	石材	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	石核	黒色頁岩	IV層下位	8.3	3.4	1.9	52.4
2	剥片	黒色頁岩	IV層下位	4.6	3.4	1.1	16.1
3	剥片	黒色頁岩	IV層下位	3.7	3.5	0.7	6.0
4	敲石	砂岩	IV層下位	7.8	3.0	2.8	100.2
5	敲石	砂岩	IV層下位	8.0	4.1	2.3	120.3

第5表 15号石器集中地点出土遺物一覧

第2節 縄文時代



第8図 縄文時代遺構分布図 (1/400)

(1) 概 要

縄文時代の遺構は、土坑 10 基・ピット 31 本が検出された。遺物は、縄文土器 225 点(前期前半 37 点・諸磯式 2 点・阿玉台式 23 点・勝坂式 16 点・加曾利 E 式 21 点・中期型式不明 83 点・時期不明 43 点)、石器 17 点(石鏃 2・打製石斧 5・剥片 10 点)が出土しており、その多くが当該期以外の遺構や表土・攪乱などからの出土である。

(2) 土 坑

702 号土坑

遺 構 (第9図、図版2-4)

[位 置] (E-5) グリッド。

[検出状況] 1区中央西側で検出された。西側を攪乱されている。

[構 造] 平面形：不整な楕円形と推定される。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸現況 158cm/短軸 105cm/深さ 20cm。長軸方位：N-77°-W。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、3層に分けられる。

[遺 物] 阿玉台式土器の小片 1 点が出土している。

[時 期] 出土遺物と覆土の様子から、縄文時代中期前半と考えられる。

706 号土坑

遺 構 (第9図、図版2-5)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 2区中央西側で検出された。50号溝跡に切られている。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸 201cm/短軸現況 100cm/深さ 32cm。長軸方位：N-42°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、3層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

707 号土坑

遺 構 (第9図、図版3-1)

[位 置] (A-6) グリッド。

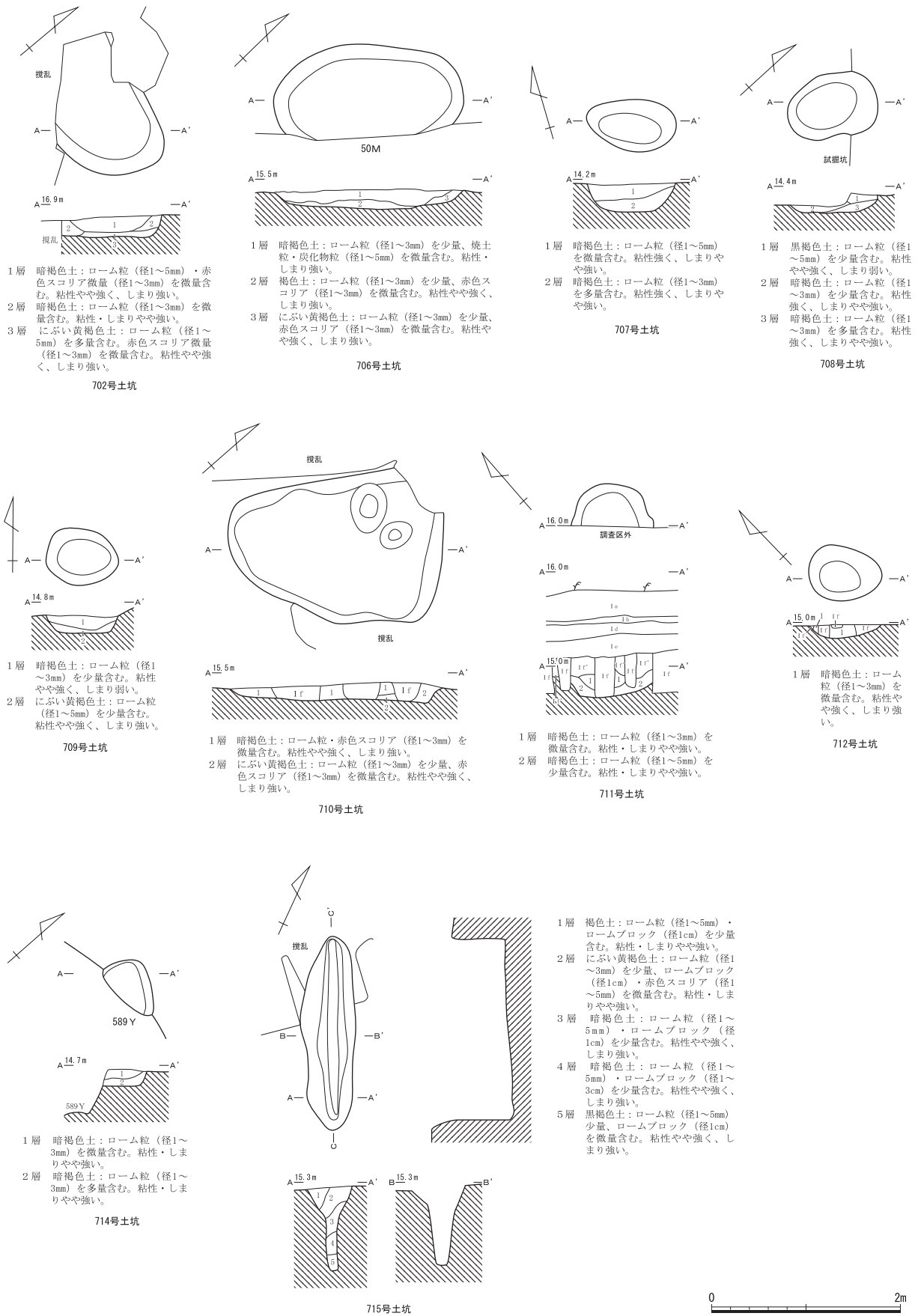
[検出状況] 3区西端で検出された。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸 95cm/短軸 56cm/深さ 31cm。長軸方位：N-64°-W。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。



第9図 縄文時代土坑（1/60）

708号土坑

遺 構 (第9図、図版3-2)

[位 置] (A-6) グリッド。

[検出状況] 3区西端で検出された。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸 95cm／短軸 66cm／深さ 22cm。長軸方位：N-40°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、3層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

709号土坑

遺 構 (第9図、図版3-3)

[位 置] (B-7) グリッド。

[検出状況] 3区中央、調査区を縦断する攪乱内にて検出された。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸 77cm／短軸 60cm／深さ 21cm。長軸方位：N-90°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

710号土坑

遺 構 (第9図、図版3-4)

[位 置] (C-6・7) グリッド。

[検出状況] 3区中央北側で検出された。北東側を攪乱されている。

[構 造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がみられる。規模：長軸 228cm／短軸 79cm／深さ 14cm。長軸方位：N-47°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時 期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

711号土坑

遺 構 (第9図、図版3-5)

[位 置] (B-7) グリッド。

[検出状況] 3区中央南壁際で検出された。南西側は調査区外に至り、耕作機による攪乱を受けている。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模：長軸 87cm／短軸現況 45cm／深さ 13cm。長軸方位：N-46°-W。

[覆 土] 暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

[遺 物] なし。

[時期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

712号土坑

遺構 (第9図、図版3-6)

[位置] (B-7) グリッド。

[検出状況] 3区中央南側で検出された。耕作機による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：楕円形。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模：長軸78cm/短軸57cm/深さ15cm。長軸方位：N-44°-W。

[覆土] 暗褐色土を主体とした単層である。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

714号土坑

遺構 (第9図、図版3-7)

[位置] (B-6) グリッド。

[検出状況] 3区中央西側で検出された。耕作機による攪乱を受け、589号住居跡に切られている。

[構造] 平面形：不明。断面形：壁面はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。規模：長軸69cm/短軸現況40cm/深さ17cm。長軸方位：不明。

[覆土] 暗褐色土を主体とし、2層に分けられる。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

715号土坑

遺構 (第9図、図版3-8)

[位置] (B・C-7) グリッド。

[検出状況] 3区中央で検出された。北側上面は調査区を縦断する大型の攪乱に切れ、耕作機による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：溝状。断面形：漏斗状。規模：長軸206cm/短軸57cm/深さ97cm。長軸方位：N-25°-W。

[覆土] 5層に分けられる。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子や形状から、縄文時代と考えられる。

[備考] 形状から、陥し穴と考えられる。

(2) ピット

本調査地で検出したピット96本のうち、出土遺物や覆土の様子から31本を縄文時代に帰属するものとした。これらのうち、遺物の出土した8号ピットを図示し、その他は表にて報告する。

8号ピット

遺 構 (第10図、図版4-1)

[位 置] (F-6) グリッド。

[検出状況] 部分的に攪乱される。漸移層除去後に確認した。

[構 造] 平面形:円形。断面形:壁はほぼ垂直に立ち上がるが、中位に稜を有する。規模:長軸 39cm/短軸 39cm/深さ 84cm。

[覆 土] 4層に分けられる。

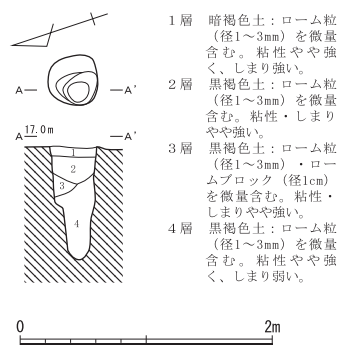
[遺 物] 縄文時代中期の土器1点が出土した。

[時 期] 出土遺物と覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

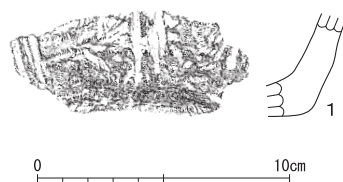
[備 考] 本遺構周辺には、縄文土器が含まれる暗褐色土が堆積していた。この層については住居跡などの遺構とも考えたが、住居跡に伴うその他の施設や床面となる硬化面などが確認されなかったことと、隣地の調査でも遺構が確認されていないことから、漸移層とした。

遺 物 (第11図、第6表、図版10-6)

1は深鉢の底部である。垂下する沈線文がみられる。



第10図 8号ピット(1/60)



第11図 8号ピット出土遺物(1/3)

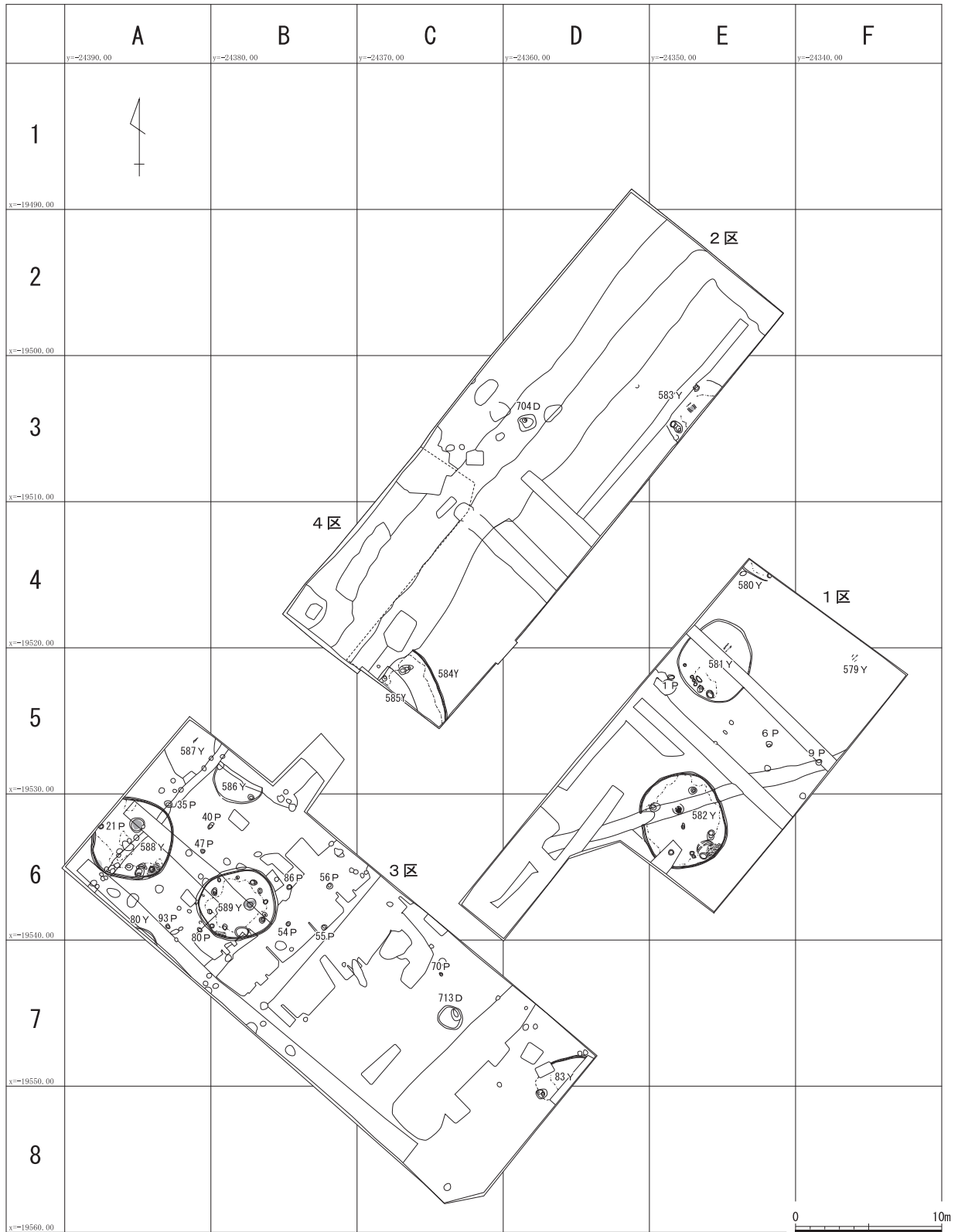
遺物番号	器種	遺存部位	口径器高底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	深鉢	底部破片	—	上層	中期/縦沈線文	細粗砂粒多量	良好	外面:赤褐色/内面:赤褐色

第6表 8号ピット出土遺物一覧

遺構番号	グリッド	調査区	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	確認面からの深さ (cm)	切り合い 旧→新	備考
4 P	E-4	1	楕円形	45	28	11	→ 580Y	
5 P	E-5	1	円形	43	40	22	—	
8 P	F-6	1	円形	39	38	84	—	土器小片1点出土
13 P	C-3	2	楕円形	38	33	67	→ 50M	
14 P	C-3	2	不整楕円形	61	41	113	→ 50M	
38 P	A-5	3	円形	31	31	8	—	
39 P	A-5	3	円形	39	37	19	—	
46 P	A-6	3	円形	43	42	10	—	
49 P	A-6	3	円形	26	26	33	—	
50 P	A-6	3	円形	56	55	17	—	
51 P	B-6	3	楕円形	51	43	16	—	
53 P	B-7	3	楕円形	48	40	38	→ 6 M	
65 P	A-7	3	楕円形	38	32	16	—	
68 P	B-7	3	不整楕円形	30	24	16	—	
69 P	B-7	3	楕円形	39	34	8	—	
78 P	C-7	3	楕円形	34	29	12	—	
79 P	C-8	3	楕円形	53	44	20	—	
81 P	A-6	3	(円形)	30	[22]	34	→ 589Y	
82 P	A-6	3	(円形)	55	[28]	35	→ 589Y	
83 P	B-6	3	円形	30	27	18	—	
84 P	B-7	3	円形	55	52	12	—	漸移層除去後確認
85 P	B-7	3	円形	27	25	5	—	
87 P	B-7	3	楕円形	41	32	16	—	漸移層除去後確認
88 P	A-7	3	楕円形	36	31	12	—	漸移層除去後確認
89 P	A-7	3	(楕円形)	53	[28]	10	—	漸移層除去後確認/南西部は調査区外
90 P	A-6	3	楕円形	27	22	6	—	漸移層除去後確認
91 P	A-6	3	不整楕円形	56	29	25	—	漸移層除去後確認
92 P	A-6	3	楕円形	33	22	5	—	漸移層除去後確認
94 P	A-6	3	楕円形	29	22	25	—	漸移層除去後確認
95 P	A-6	3	円形	19	17	9	—	漸移層除去後確認
96 P	B-7	3	円形	31	29	12	—	漸移層除去後確認

第7表 縄文時代ピット一覧

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期



第12図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (1/400)

(1) 概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構として、住居跡 13 軒・土坑 2 基・ピット 14 本を調査した。遺物は、遺構外出土も含め、壺 661 点・甕 417 点・高坏または鉢 87 点・石器 6 点・装身具 2 点が出土した。

(2) 住居跡

80 号住居跡

遺 構 (第 13 図、図版 4-2)

[位 置] (A-6・7) グリッド。

[検出状況] 区画整理事業第 11 地点 (平成 6 年度) で調査された住居跡の北東隅部分である。3 区北西部で検出された。77 号住居跡 (平成 6 年度同調査・弥生時代後期～古墳時代前期) を切っている。

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：一辺 3.5m 前後と推測される。床面までの深さは約 50cm。主軸方位：真北より西に若干振れると思われる。壁溝：なし。床面：貼床。厚さは 5cm 前後。柱穴：なし。炉：調査範囲内では検出されていない。貯蔵穴：調査範囲内では検出されていない。

[覆 土] 黒褐色土を主体とし、7 層に分層した。

[遺 物] 今回の調査では、壺 4 点・甕 5 点・高坏または鉢 1 点が出土している。

[時 期] 弥生時代後期～古墳時代前期。

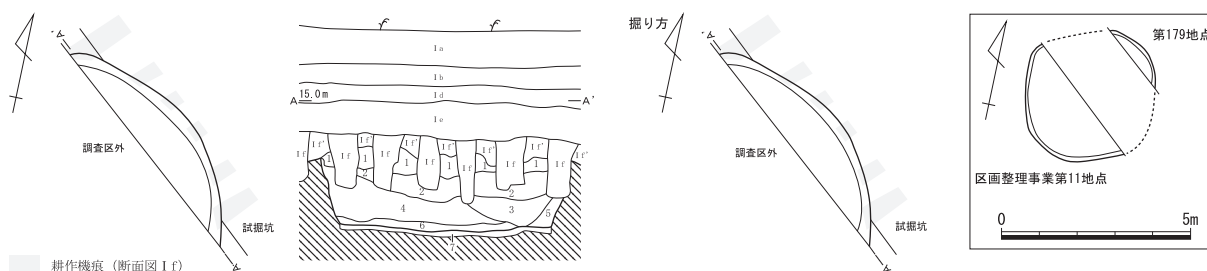
遺 物 (第 14・15 図、第 8 表、図版 10-7)

1～14 は、区画整理事業で出土した遺物である。

1～9 は壺である。1 は床面直上で出土している。2～5 は口縁部破片で、2 は棒状浮文が付された幅広複合口縁、3 の内面には下端部を結節文で区画した縄文帯が施されている。6～9 は胴部破片で、6・7 には山形文が施され、8・9 には端末結節文がみられる。

10～14 は甕である。いずれもヘラナデされるが、ハケメが残存している。

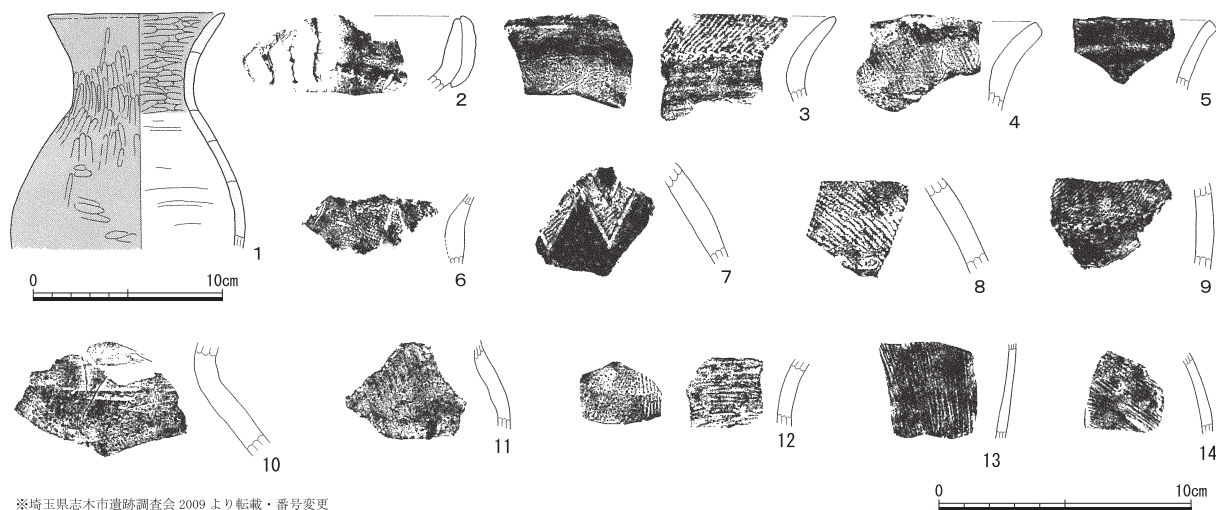
15 は、今回の調査で出土した、無頸壺の口縁部である。幅のやや広い複合口縁で、複合部には羽状縄文が施され、下端部にはキザミを有する。複合部下には部分的に粘土帯が貼り付けられ、肥厚している。



- 1層 黒褐色土：ローム粒 (径1～3mm) を微量含む。粘性・しまり弱い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒 (径1～5mm) ・ロームブロック (径1cm) を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3層 黒色土：ローム粒 (径1～5mm) を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒 (径1～5mm) を少量、焼土粒 (径1～3mm) を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 5層 黒褐色土：ローム粒 (径1～5mm) を少量、ロームブロック (径1cm) を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。4層より色調暗め。
- 6層 黒褐色土：ローム粒 (径1～5mm) を多量、ロームブロック (径1～3cm) を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 7層 褐色土：ローム粒 (径1～5mm) ・ロームブロック (径1～5cm) を多量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。

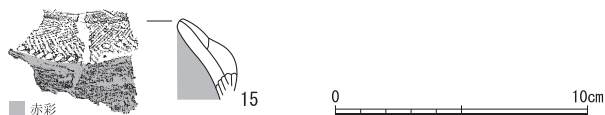
0 2m

第 13 図 80 号住居跡 (1/60・1/200)



※埼玉県志木市遺跡調査会 2009 年より転載・番号変更

第 14 図 80 号住居跡区画整理事業時出土遺物 (1/3・1/4)



第 15 図 80 号住居跡出土遺物 (1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
15	壺	口縁部破片	—	—	無頸壺／幅広複合口縁／複合部羽状縄文 LR-RL・端部キザミ／内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

第 8 表 80 号住居跡出土遺物一覧

83 号住居跡

遺 構 (第 16 図、図版 4-3)

[位 置] (D-7・8) グリッド。

[検出状況] 区画整理事業第 8 III 地点 (平成 6 年度) で調査された住居跡の北側部分である。3 区東端部で検出し、これで住居跡全体の調査ができたことになる。

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸約 7m / 短軸 5.8m / 床面までの深さ 10cm 前後。主軸方位：N-25°-W。壁溝：今回の調査では検出されなかった。幅 15cm 前後 / 深さ約 5cm。床面：貼床。厚さは 10～20cm。今回の調査範囲では硬化面が検出されている。柱穴：4 本主柱穴と入り口施設、他 1 本が検出されている。入り口施設と思われるピットは、深さ 46cm を測り、住居内に傾斜をもっている。炉：住居跡中央よりやや北寄りに位置する。10cm ほど掘りこまれた地床炉である。貯蔵穴：南壁際、中央よりやや東寄りに位置する。長軸 97cm / 短軸 61cm / 深さ 17cm。

[覆 土] 今回は 6 層に分層した。

[遺 物] 今回の調査では、台付甕の脚部 1 点が出土した。

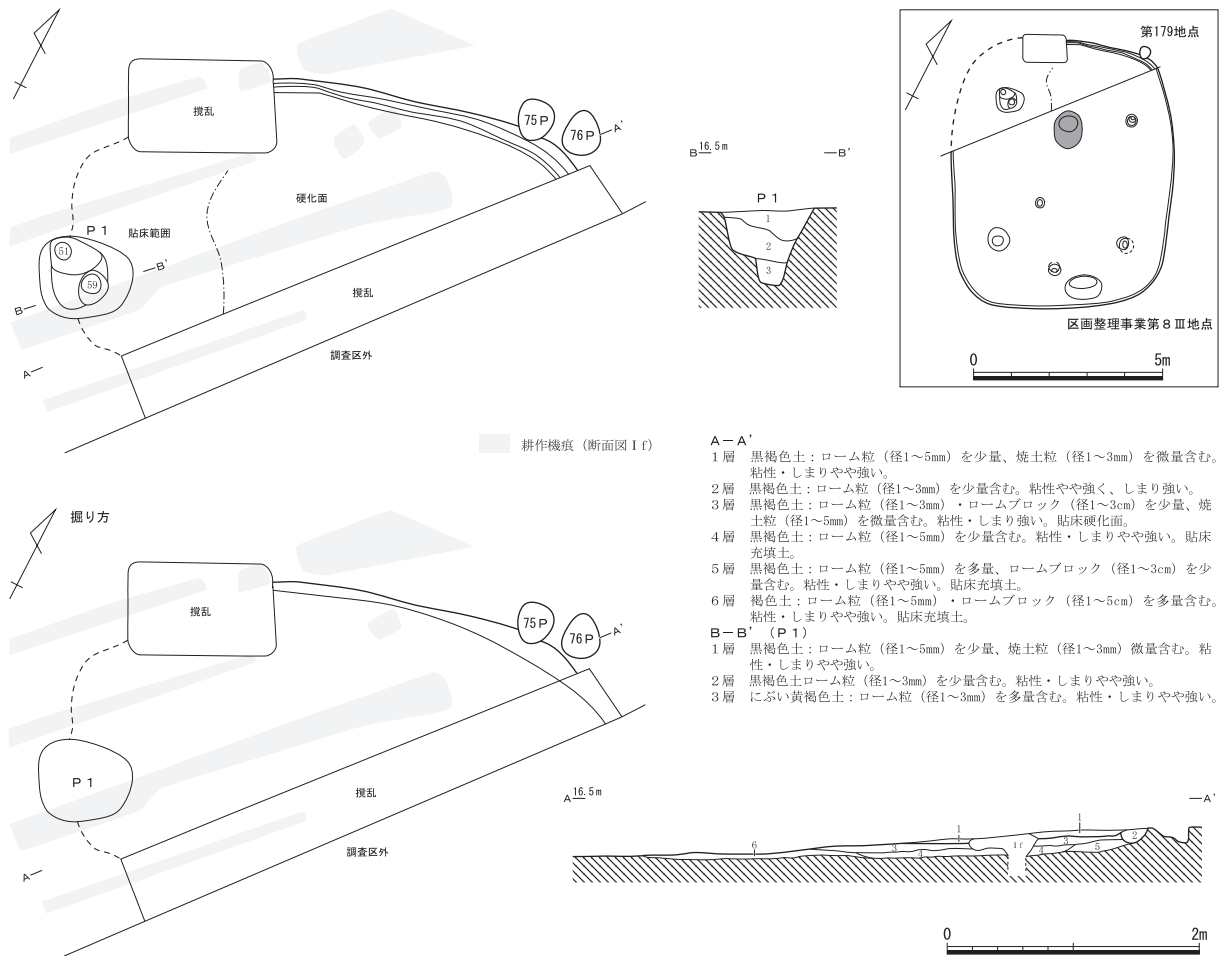
[時 期] 古墳時代前期。

遺 物 (第 17・18 図、第 9 表、図版 10-8)

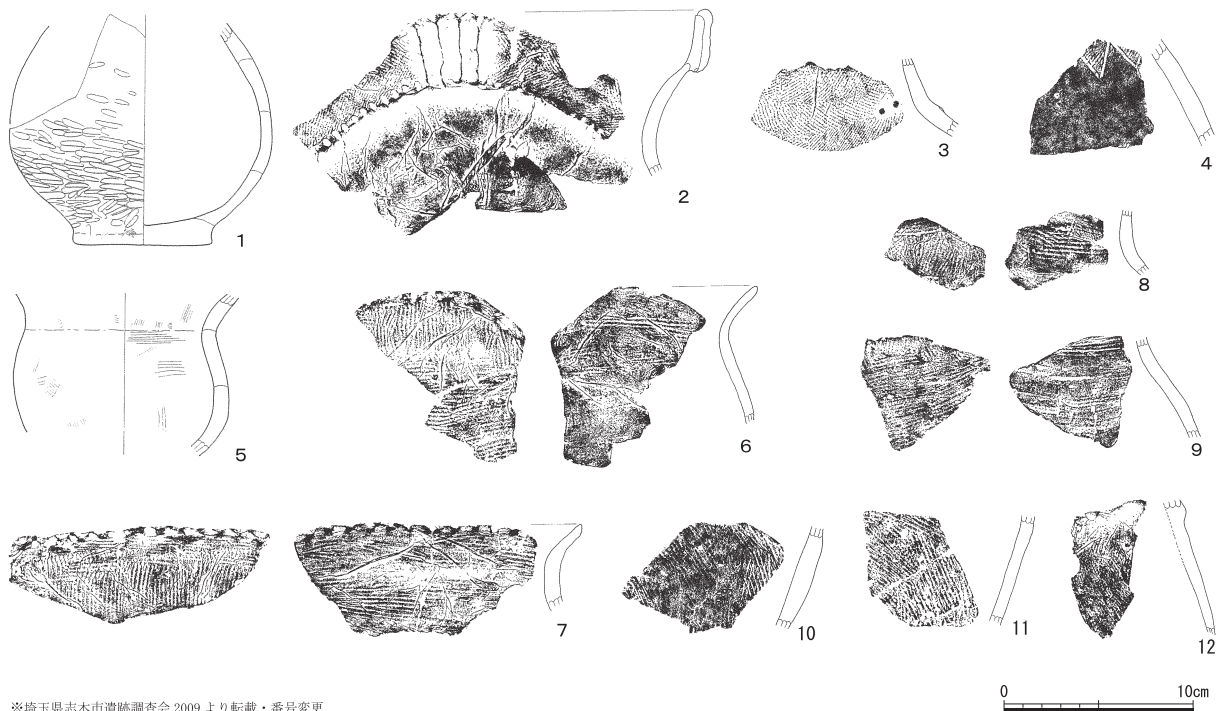
1～12 は、区画整理事業で出土した遺物である。

1～4 は壺である。1 は底径約 7cm、胴部は球形を呈する。2・3 は同一個体で、羽状縄文が施文

第3章 検出された遺構と遺物

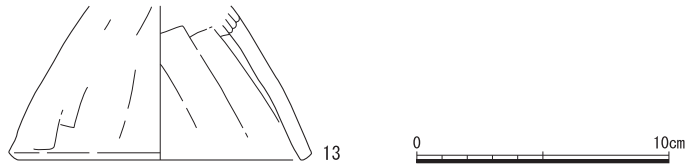


第16図 83号住居跡 (1/60・1/200)



※埼玉県志木市遺跡調査会 2009 より転載・番号変更

第17図 83号住居跡区画整理事業時出土遺物 (1/4)



第18図 83号住居跡出土遺物（1/3）

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
13	甕	脚部 1/3	— [6.1] (12.0)	床面直上	外面ナデ/内面ヘラナデ	細砂粒多量	良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色

第9表 83号住居跡出土遺物一覧

された複合口縁には4本一単位の棒状浮文が付され、下端部にはキザミが施されている。頸部には円形浮文が付されている。4の胴部破片には山形文が施されている。

5～12は甕である。5は小型の台付甕で、床面上から出土している。6・7は口縁部で口唇部にはキザミが施されている。8～11は胴部、12は脚部で、いずれもヘラナデされているが、ハケメが残っている。

13は、今回の調査で出土した、台付甕の脚部である。ナデで調整されている。

579号住居跡

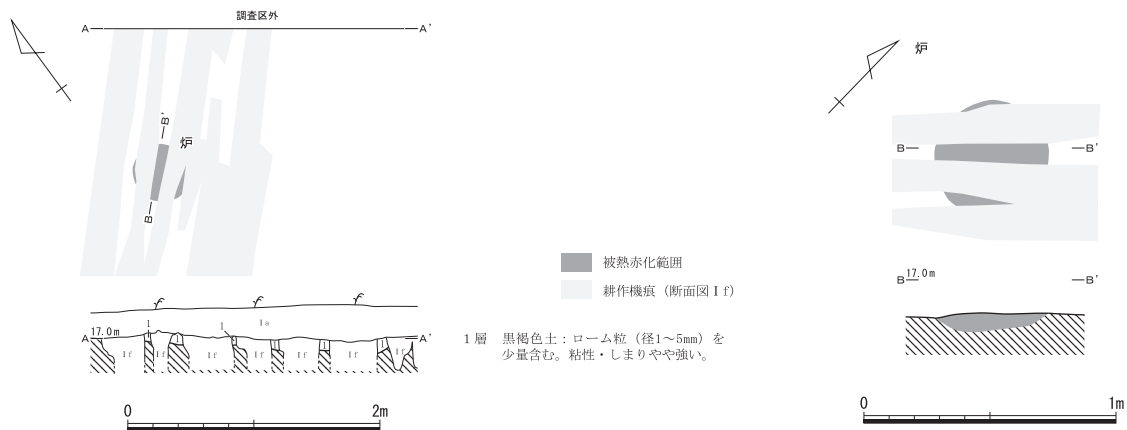
遺 構（第19図、図版4-4）

[位 置]（F-5）グリッド。

[検出状況] 1区北東部で検出された。耕作機による攪乱のため平面形を確認することができず、調査区北壁で断面を確認した。炉の痕跡が残存していたが、その他の施設は確認できなかった。

[構 造] 平面形：不明。規模：不明。主軸方位：不明。壁溝：不明。床面：不明。柱穴：検出されていない。炉：上面は削平されており、掘り込みの有無は確認できなかった。赤化の範囲は45×42cmの円形を呈し、厚さは約5cmに及ぶ。貯蔵穴：検出されていない。

[覆 土] 1層のみ確認した。貼床の残部と思われる。



第19図 579号住居跡（1/60・1/30）

[遺物] なし。

[時期] 遺存状態が不良のため詳細は不明であるが、覆土の様子や周囲の状況から弥生時代後期～古墳時代前期の可能性が高い。

580号住居跡

[遺構] (第20図、図版4-5)

[位置] (E-4) グリッド。

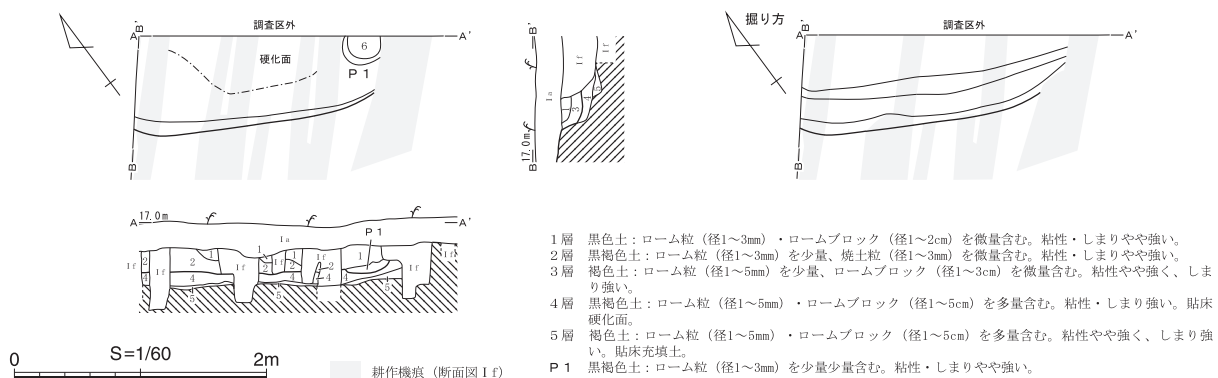
[検出状況] 1区北西隅で検出された。南東の壁際一部を確認し、その他は調査区外に至る。耕作機による攪乱が床面にまで達している。また、4号ピットを切っている。

[構造] 平面形：不明。規模：不明。主軸方位：不明。壁溝：調査区内では検出されていない。床面：貼床。厚さは15cm前後で、中央部が硬化している。掘り方は壁際が一段高くなっている。柱穴：ピットを1本確認した。炉：調査区内では検出されていない。貯蔵穴：調査区内では検出されていない。

[覆土] 5層に分層した。

[遺物] ハケ調整のみられる甕の胴部小片1点が出土した(小片のため図示していない)。

[時期] 弥生時代後期～古墳時代前期。



第20図 580号住居跡(1/60)

581号住居跡

[遺構] (第21～23図、図版4-6・7)

[位置] (E-4・5) グリッド。

[検出状況] 1区北部で検出された。全体を確認できたが、耕作機による攪乱が床面まで達しており、中央部には深い攪乱が東西に走っている。北部では床面まで削平されており、壁は確認できなかった。

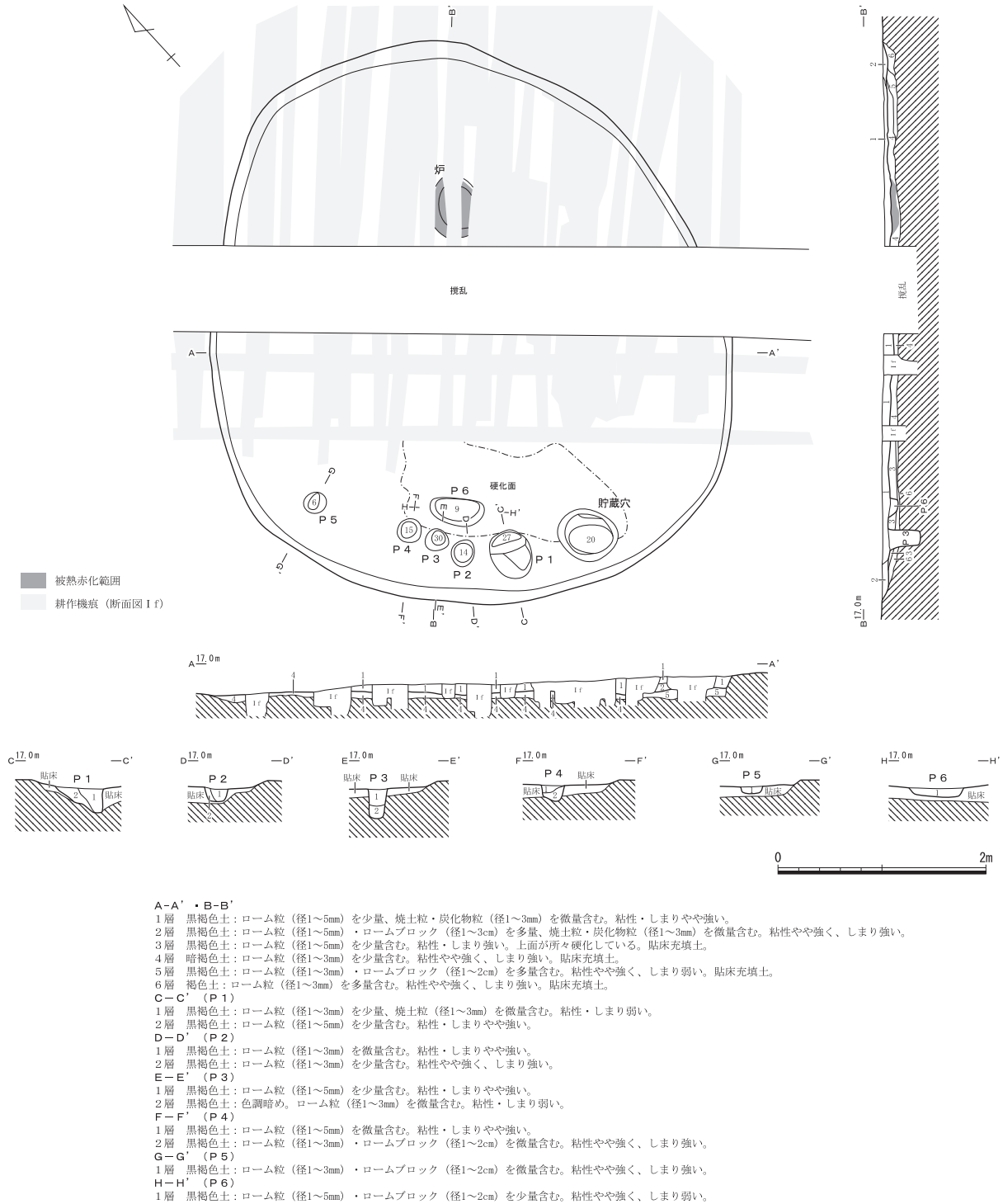
[構造] 平面形：円形。規模：長軸5.42m／短軸5.02m／深さ10cm。主軸方位：N-43°-E。壁溝：なし。床面：貼床。入り口と考えられる南西側が硬化している。掘り方は壁際が一段高くなっている。柱穴：ピットを7本確認した。主柱穴は不明であるが、入り口と考えられる南側の壁に沿って集中している。P7は貼床を外した後に確認した。炉：中央よりやや北側に位置し、60×40cmほどの楕円形を呈するものと推測される。被熱は弱い。貯蔵穴：南東隅で検出した。遺物は出土していない。

[覆土] 6層に分層した。黒褐色土主体で、貼床にはロームブロックが多く含まれている。

[遺物] 本住居跡に伴う遺物として、壺11点、甕5点、高坏・鉢3点が出土している。分布状況は、

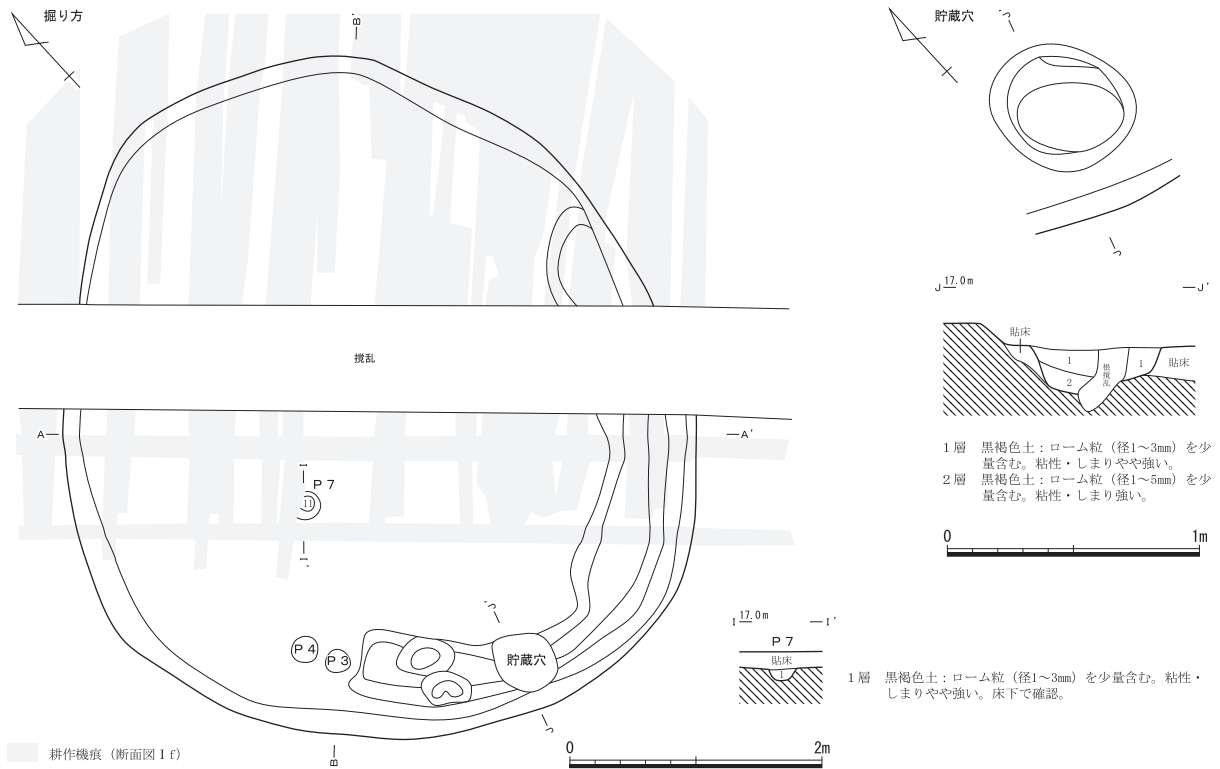
貯蔵穴の東側を中心として住居跡南側に散在する。住居跡北側では耕作・削平の影響が大きく、分布状況は把握できなかった。壺には小型壺の胴部片が1点みられる。また、甕では、582号住居跡と接合するもの2個体が認められる(第24図-3・第29図-4)。本住居跡からは、第24図-3の大部分と、第29図-4については、胴下部の一部と脚部が出土している。

[時期] 弥生時代後期。

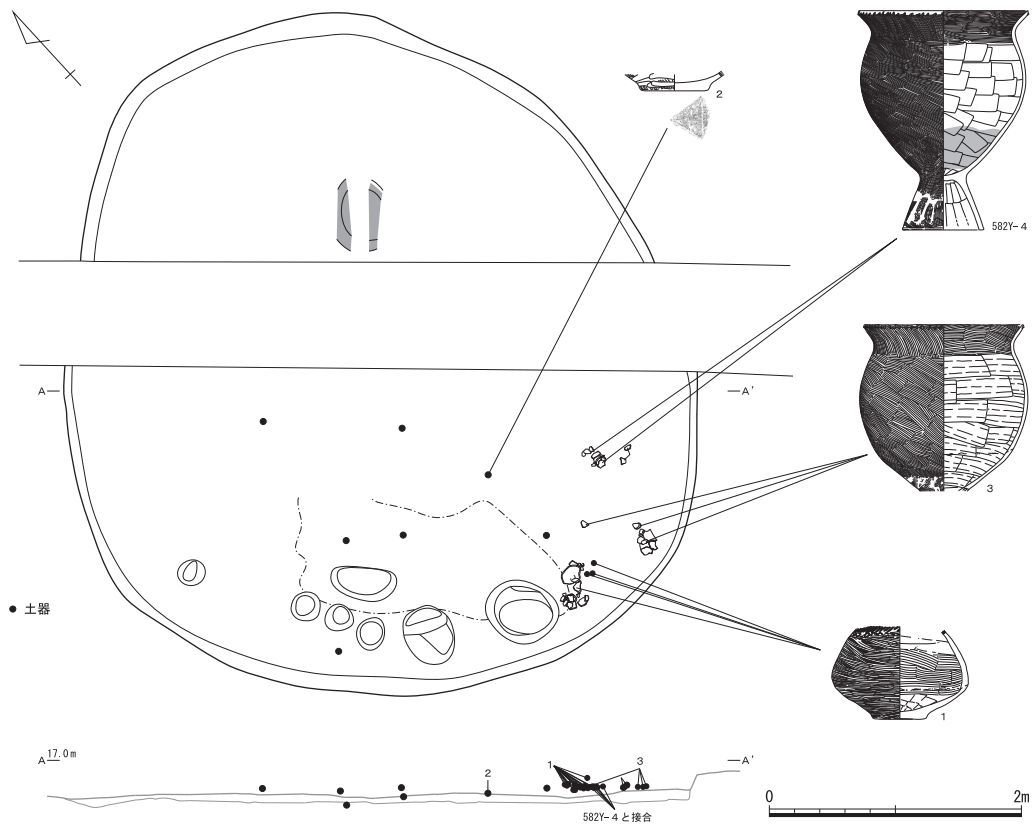


第21図 581号住居跡 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



第22図 581号住居跡掘り方・貯蔵穴 (1/60・1/30)

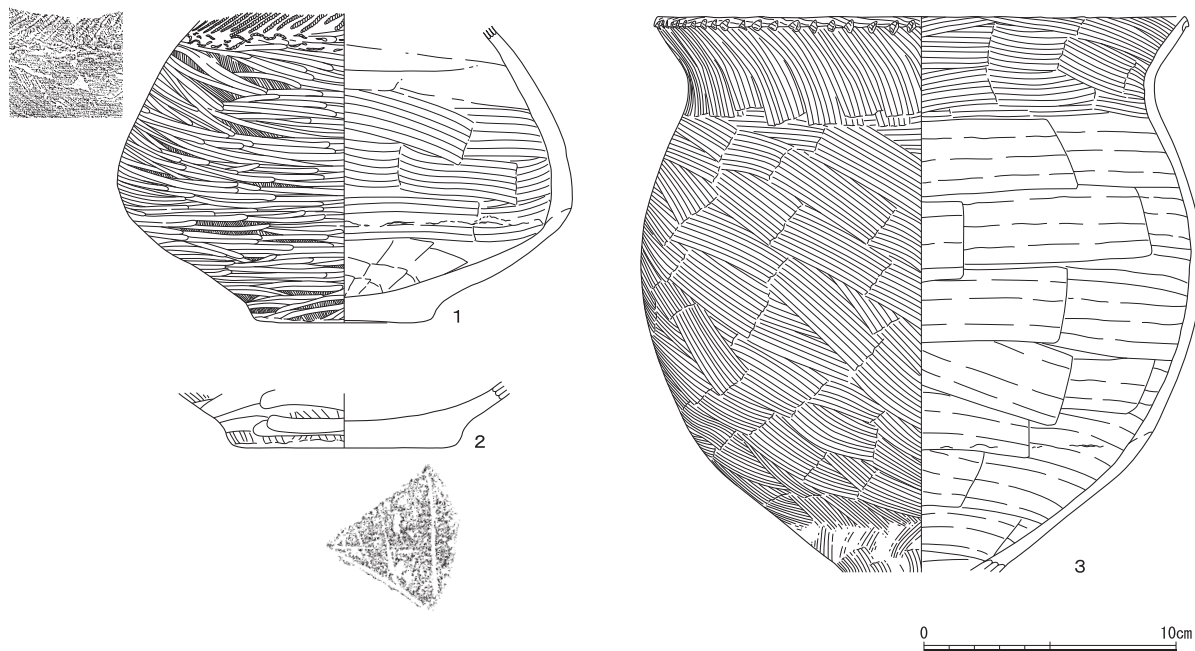


第23図 581号住居跡遺物分布図 (1/60)

遺物 (第24図、第10表、図版11-1)

1は上位を欠いた壺である。横位の縄文帯の下端部を2条のS字状結節文で区画している。外面はハケメ調整後ヘラミガキされており、ところどころで赤彩の残存が確認できる。2は壺底部である。底面には木葉痕がみられる。

3は甕で、ハケメ調整されている。口唇部のキザミはハケ状工具によるものである。本資料は、582号住居跡出土の土器片と接合している。



第24図 581号住居跡出土遺物(1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	胴～底部ほぼ完存	— [12.3] 6.9	床面直上	胴下部に最大径(18cm)／縄文LR・S字状結節文2条／外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩微量残存／内面ナデ・ハケメ・ヘラナデ	細粗砂粒少量 ／小石微量	良好	外面：黒褐色 内面：暗灰褐色
2	壺	底部1/5	— [2.7] (8.8)	床面直上	外面ハケメ・ヘラミガキ／内面ヘラナデ／底面木葉痕	細粗砂粒・小石微量	良好	外面：明褐色 内面：灰褐色
3	甕	口縁～胴部1/5	— [2.7] (8.8)	下層	胴部最大径推定12.3cm／582号住居跡出土土器と接合／口唇部キザミ／外面ハケメ／内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色

第10表 581号住居跡出土遺物一覧

582号住居跡

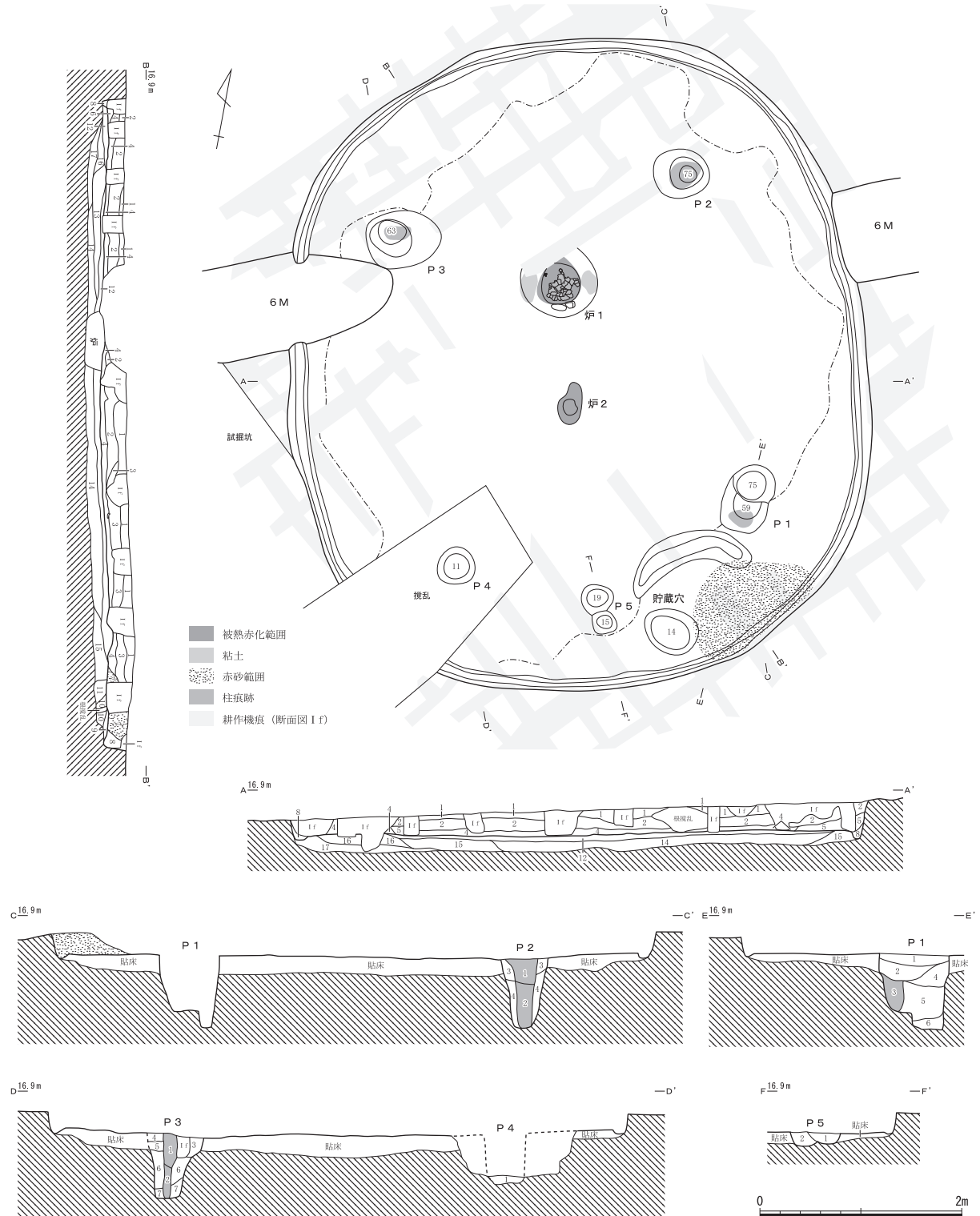
遺構 (第25～28図、図版4-8～5-4)

[位置] (D・E-5・6)グリッド。

[検出状況] 1区南部で検出された。全体を確認できたが、耕作機による攪乱が床面まで達するものもある。中央よりやや北側で、東西に延びる6号溝跡に切られる。

[構造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸6.46m／短軸5.73m／床面までの深さ約30cm。主軸方位：N-20°-W。壁溝：全周する。幅約10cm／深さ約10cm。床面：貼床。厚さは15cm前後で、壁際を除きほぼ全面で硬化している。掘り方はほぼ平坦であるが、南側に向かって緩い段状に高くなっている。

る。柱穴：ピットを5本確認した。主柱穴はP 1～P 4で、P 1～P 3では柱痕跡が確認できた。P 5は入り口施設と考えられる。炉：2基検出された。炉1は、中央よりやや北寄りに位置し、径70cm前後の円形を呈する。粘土板を用いており、その外側には白色粘土の堆積が部分的に確認された。枕石が2点置かれており、被熱は強い。また、炉の土を水洗選別したところ、いずれも碎片であるが、炭化米1点と貝殻6点、炭化種子1点が検出された。炉2は、41×23cmの楕円形を呈する地床炉である。住

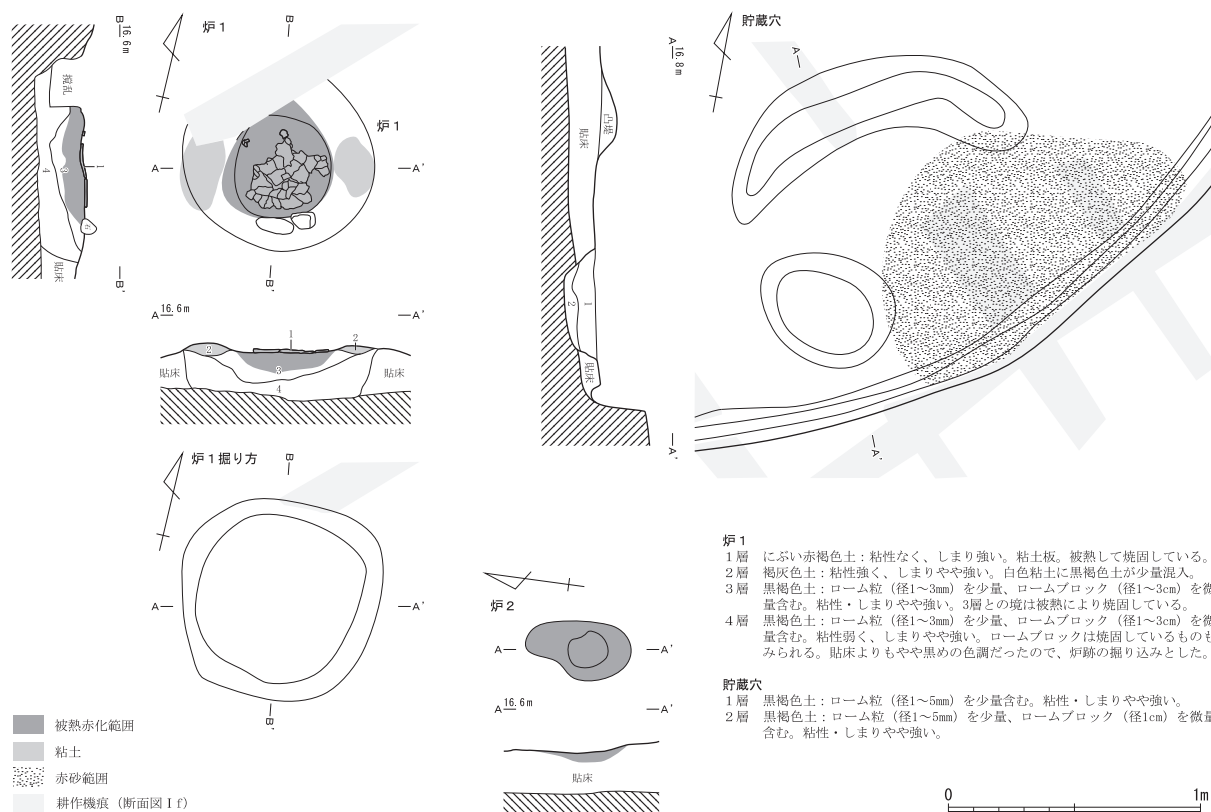


第25図 582号住居跡 (1/60)



- A-A'・B-B'**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）・焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまり強い。
 - 5層 暗褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
 - 6層 暗褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 7層 にぶい黄褐色土：小石（径1～10mm）を少量含む。粘性なく、しまりやや強い。砂質土。
 - 8層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1cm）を多量含む。粘性・しまり強い。
 - 9層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまり強い。
 - 10層 黒褐色土：黒めの色調。ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
 - 11層 黒褐色土：黒めの色調。ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
 - 12層 黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量、焼土粒・炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。黒褐色土とロームの混合土。貼床硬化面。
 - 13層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床充填土。
 - 14層 黒褐色土：黒めの色調。ローム粒（径1～3mm）を少量、ロームブロック（径1～3cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床充填土。
 - 15層 黒褐色土：黒めの色調。ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床充填土。
 - 16層 黄褐色土：粘性やや強く、しまり強い。ローム主体、黒褐色土混入。貼床充填土。
 - 17層 黒褐色土：黒めの色調。ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
- C-C'（P2）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。柱痕。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～10mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- D-D'（P3）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。柱痕。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～10mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床硬化面。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床充填土。
 - 6層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 7層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。6層よりもロームブロックが多い。
- D-D'（P4）**
- 1層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- F-F'（P5）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- E-E'（P1）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：1層よりやや黒めの色調。ローム粒（径1～10mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。柱痕。
 - 4層 褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
 - 5層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 6層 暗褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。

第26図 582号住居跡掘り方（1/60）



第27図 582号住居跡炉・貯蔵穴 (1/30)

居跡のほぼ中央に位置し、強く熱を受け、焼固している。貯蔵穴：南壁際で検出した。55 × 44cmの楕円形を呈し、深さは14cmである。遺物は出土していない。北側には幅30cm・長さ120cm・高さ5cmほどの凸堤を有する。

[覆土] 17層に分層した。黒褐色土主体で、貼床にはロームブロックが多く含まれている。また、住居跡南壁際では、いわゆる「赤砂」が検出された。130 × 80cmの範囲で、厚さは15cmほどである。壁際ほど厚く、住居跡内へ流れ込むように堆積している。裾部は貯蔵穴と凸堤にかかっている。

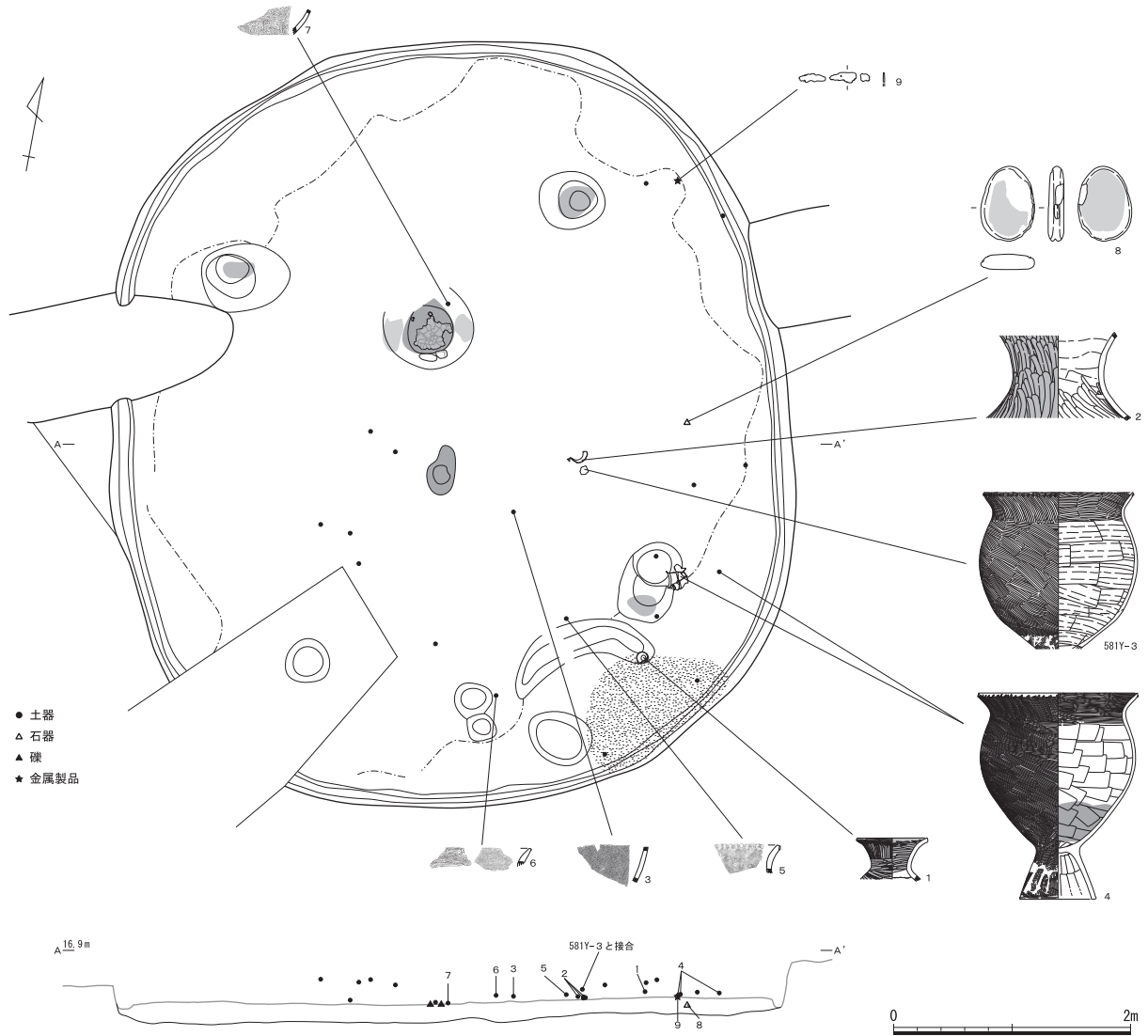
[遺物] 本住居跡に伴う遺物として、壺13点、甕9点、高坏・鉢5点、石器1点、金属製品1点が出土している。遺物は、住居跡の南東側を中心に散在する。甕には581号住居跡出土土器と接合するものがある(第24図-3・第29図-4)。本住居跡からは第24図-3の胴下部1破片と、第29図-4の口縁部～胴下部が出土している。金属製品は青銅製の銅釧で、破片ではあるが、床面直上から出土している。

[時期] 弥生時代後期。

[遺物] (第29図、第11表、図版11-2)

1は壺の口縁部である。ハケメ調整後にヘラミガキされており、内外面には赤彩が施されている。2は壺の頸部、3は壺の胴部破片で、外面には赤彩がみられる。

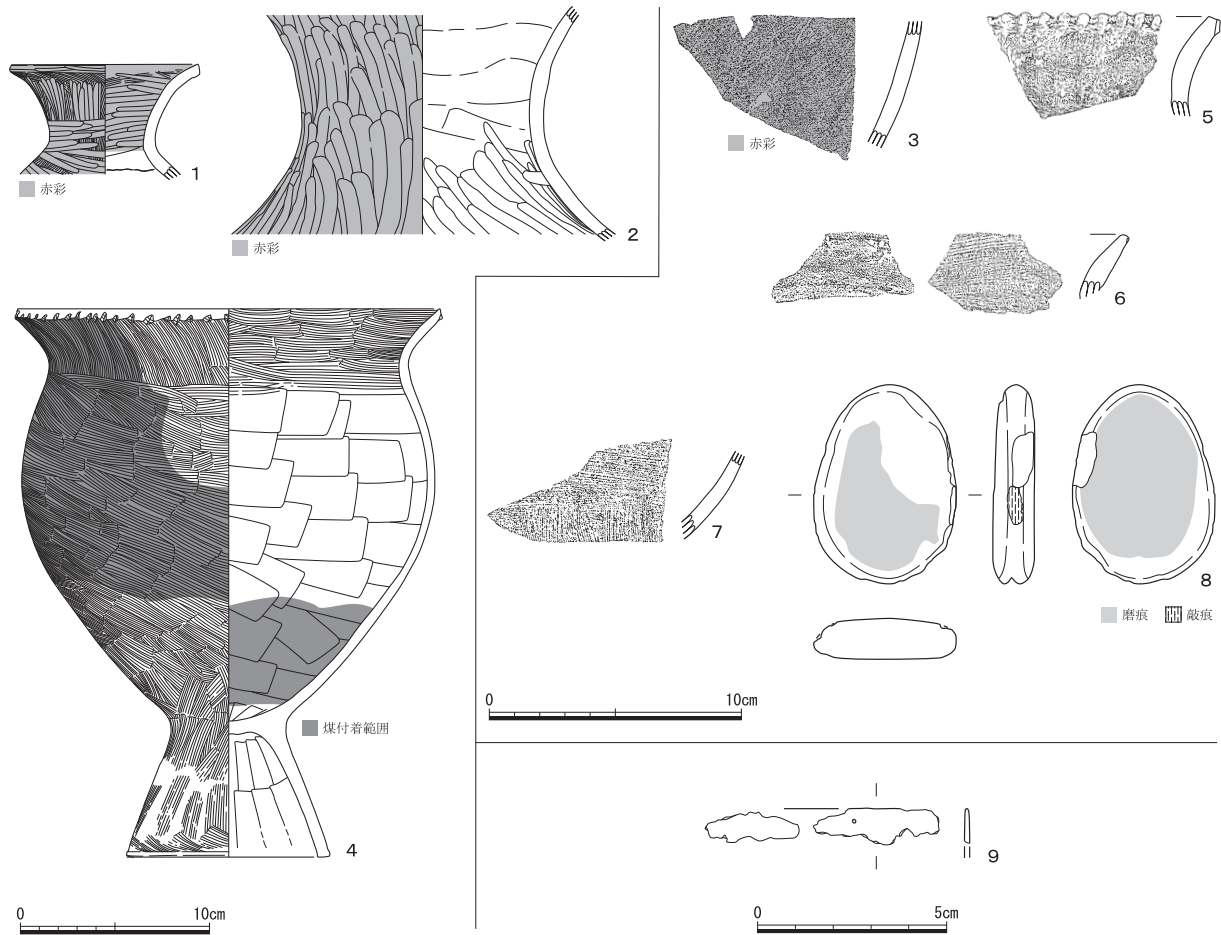
4は台付甕である。口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施されている。本資料は、581号住居跡出土の土器と接合しており、口縁～胴部下位までが581号住居跡、胴部下位～脚部が本住居跡から出土している。5・6は甕の口縁部破片で、5には棒状工具によるキザミが施される。6にもキザミの痕



第 28 図 582 号住居跡遺物分布図 (1/60)

遺物番号	器種	遺存部位	口径器高底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	口縁～頸部 ほぼ完存	10.5 [6.1] —	床面直上	外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩／内面ヘラミガキ・ヘラナデ・赤彩	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
2	壺	頸部 1/2 強	—	床面直上	外面ヘラミガキ・赤彩／内面ヘラミガキ・ヘラナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色・褐色 内面：暗灰褐色
3	壺	胴部破片	—	下層	外面ヘラミガキ・赤彩／内面ヘラナデ	細砂粒少量	良好	外面：暗赤褐色 内面：明灰褐色
4	甗	口縁～脚部 1/5	(23.0) 29.0 (10.8)	下層	胴部最大径推定 21.8cm／口唇部キザミ／外面ハケメ／内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
5	甗	口縁部破片	—	下層	口唇部キザミ／内外面ナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：褐色 内面：黒褐色
6	甗	口縁部破片	—	床面直上	外面ナデ／内面ハケメ	細砂粒少量	良好	外面：暗赤褐色 内面：褐色
7	甗	胴部破片	—	炉	外面ハケメ／内面ヘラナデ	細砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：明灰褐色
遺物番号	種別	材質	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	
8	磨石	砂岩	床面直上	7.9	5.7	1.7	105.0	
9	銅釧	青銅	床面直上	径 (5.0～5.5)	[0.9]	[0.1]	1.4	

第 11 表 582 号住居跡出土遺物一覧



第29図 582号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

跡がみられるが、ナデによってほとんど消されている。7は甕の胴部破片で、ハケメがみられる。

8は磨石である。表裏両面と側面の一部に磨痕がみらる。

9は銅釦である。端部は磨かれ、やや薄く作られているようである。

583号住居跡

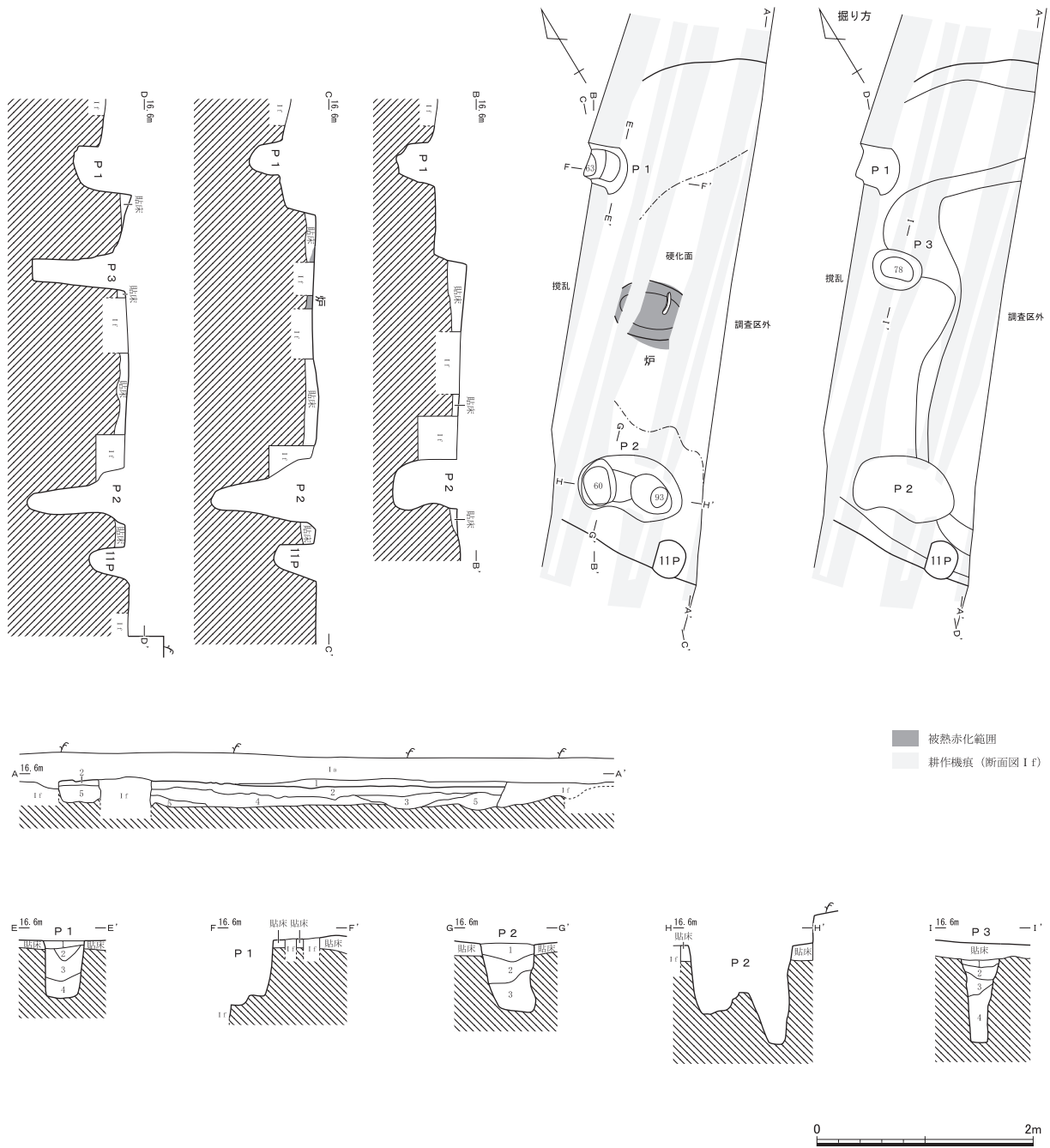
遺 構 (第30・31図、図版5-5・6)

[位 置] (E-3) グリッド。

[検出状況] 2区北側で検出された。西側3分の1ほどが検出されているが、耕作機による攪乱は床面まで達し、検出時には一部床面が露出している状態であった。11号ピットに切られている。

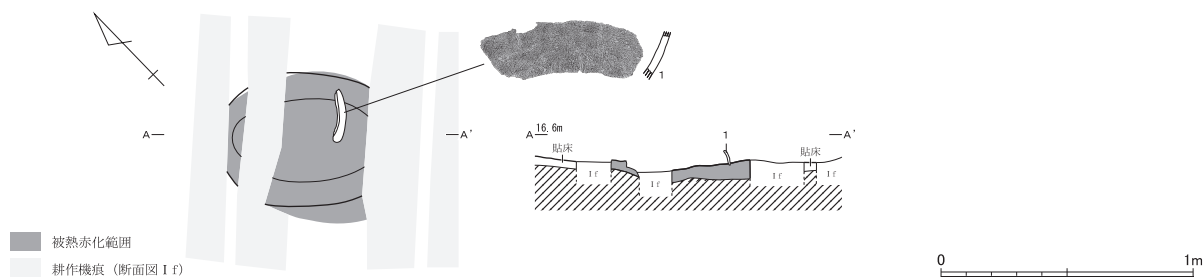
[構 造] 平面形：不明。規模：不明。主軸方位：不明。壁溝：調査区内では検出されていない。床面：貼床。厚さは20cm前後で、住居跡中央部と思われる炉周辺を中心に硬化している。掘り方は中央部が一段低くなるようである。柱穴：ピットを3本確認した。主柱穴はP1・P2と考えられる。P3は貼床下で確認した。炉：地床炉である。大半が攪乱されているが、住居跡検出範囲のほぼ中央で確認できた。58×55cmの楕円形を呈するものと思われ、良く焼けており、枕に利用したと考えられる壺胴部片(第32図1)が検出されている。貯蔵穴：調査区内では検出されていない。

[覆 土] 5層に分層した。

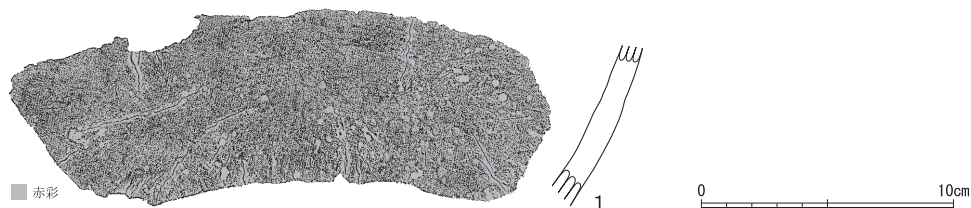


- A-A'**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～10cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床硬化面。部分的に、焼けているのか赤く見える箇所がある。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
 - 4層 黒褐色土：3層に似るがロームがやや多めで、しまりがやや強い。貼床充填土。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
- E-E' (P1)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。黒色土混入。
 - 3層 灰黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 灰黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- G-G' (P2)**
- 1層 黒褐色土：P1の1層と同等。下位にはP1の2層に似た土が薄く堆積している。
 - 2層 灰黄褐色土：P1の3層と同等。
 - 3層 灰黄褐色土：P1の4層と同等。ロームブロックがやや多い。
- I-I' (P3)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 灰黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 3層 にぶい黄褐色土：ローム主体で、黒褐色土が混入。粘性やや強く、しまり強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。

第30図 583号住居跡 (1/60)



第31図 583号住居跡炉 (1/30)



第32図 583号住居跡出土遺物 (1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	胴部破片	—	炉	炉の枕ノスス付着/外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ・赤彩	細粗砂粒・赤色粒子少量/小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：暗褐色

第12表 583号住居跡出土遺物一覧

[遺物] 本住居跡に伴う遺物として、壺の胴部破片2点が出土している。

[時期] 弥生時代後期。

[備考] P2には掘り込みが2箇所みられ、北側の掘り込みは当初貼床の土と判別できなかった。また、P3は、P2の北の掘り込みと形状が酷似している。このことから、P1-P2南、P2北-P3という並びが想定され、建て替えの可能性が指摘できる。

遺物 (第32図、第12表、図版11-3)

1は壺の胴部破片である。炉の枕として使用されており、下位を上にした状態で出土した。上になっていた端部にはススがみられる。

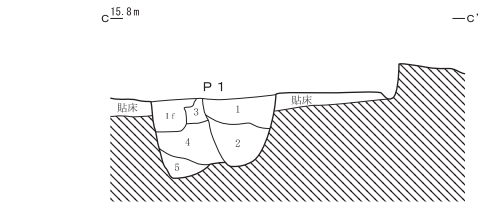
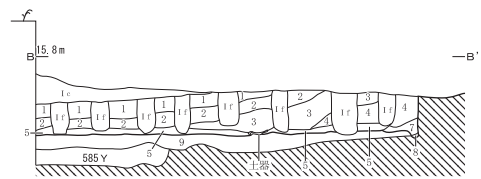
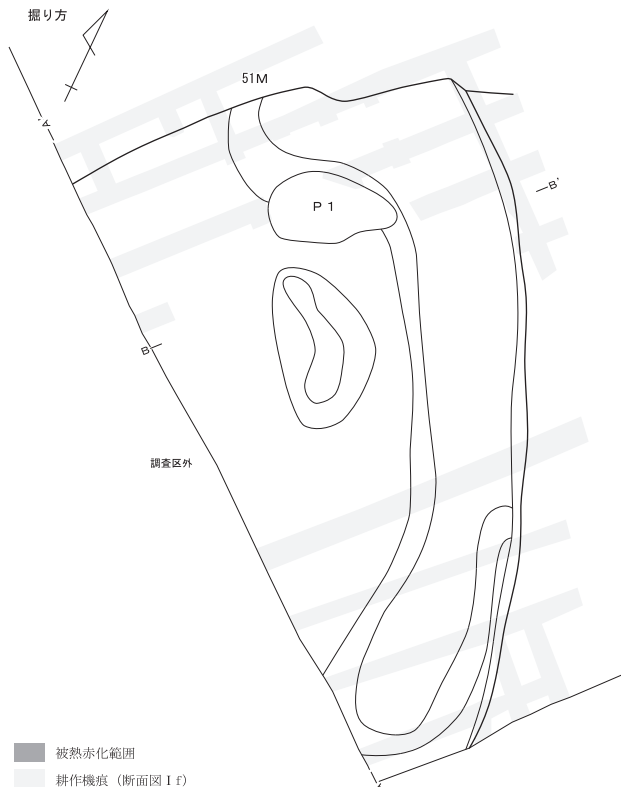
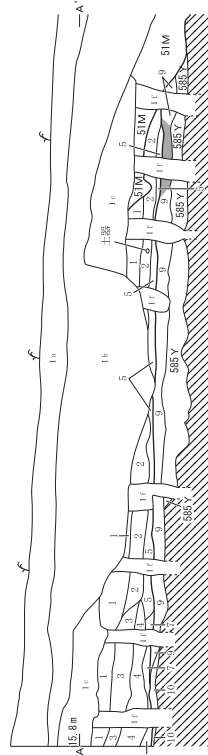
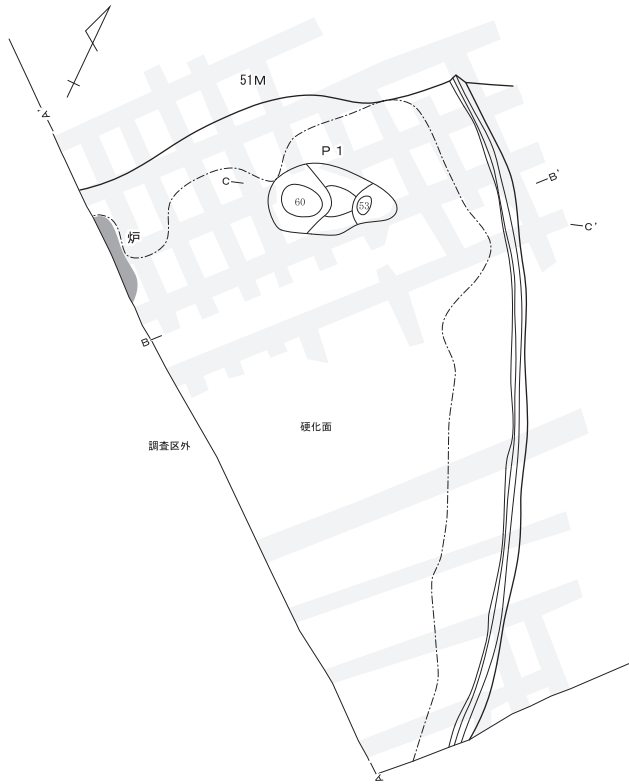
584号住居跡

遺構 (第33・34図、図版5-7・8)

[位置] (C-5) グリッド。

[検出状況] 2区南端で検出された。北東側の3分の1ほどを確認できたと考えられる。51号溝跡に切られ、585号住居跡を切る。

[構造] 平面形：不明。規模：調査区内では約5.4×3.0mの範囲を確認した。確認面から床面までの深さは35cm前後。主軸方位：N-25°-Wほどと推測される。壁溝：調査部分では確認された。幅約10cm/深さ5cm前後。床面：貼床。厚さは10cm前後。壁際以外は硬化している。掘り方は中央部が低くなるようである。柱穴：ピットを1本確認した。形状から主柱穴と考えられる。炉：調査区壁



A-A'・B-B'

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）・焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまり強い。
- 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
- 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性・しまり強い。
- 8層 にふい黄褐色土：ローム粒（径1～3mm）・ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
- 9層 にふい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量、焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまり強い。貼床硬化面。
- 10層 にふい黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性・しまり強い。7層よりもロームが多く、色調が明るい。貼床充填土。

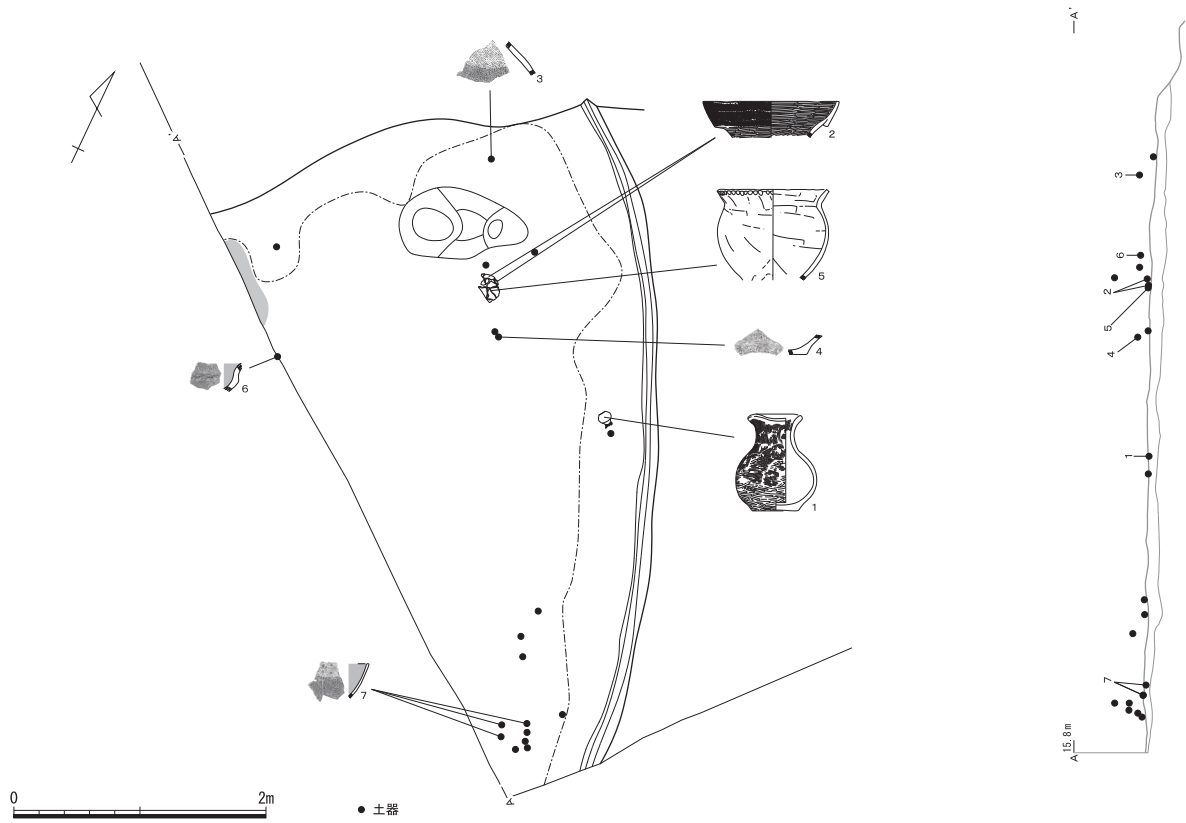
C-C' (P1)

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 暗褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）を微量含む。粘性・しまり強い。

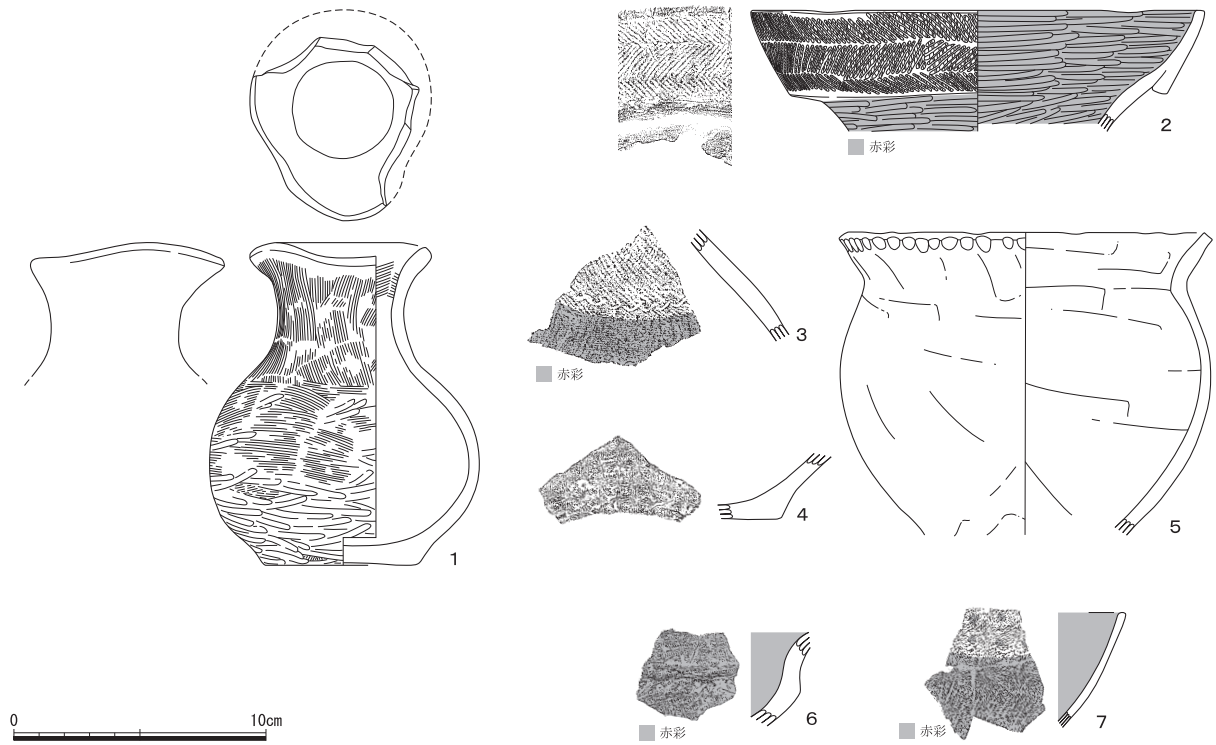
被熱赤化範囲
耕作機痕（断面図1f）



第33図 584号住居跡 (1/60)



第34図 584号住居跡遺物分布図 (1/60)



第35図 584号住居跡出土遺物 (1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	ほぼ完存	(7.2) 12.8 6.1	床面直上	片口小型壺／外面ハケメ・ヘラミガキ／内面口縁部ハケメ・以下ヘラナデ	細粗砂粒少量／小石微量	良好	外面：白灰褐色 内面：明褐色
2	壺	口縁部 1/4弱	(18.0) [4.8] —	床面直上	幅広複合口縁／複合部羽状縄文（無節）／内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒少量／土器片微量	良好	外面：赤褐色・灰褐色 内面：赤褐色
3	壺	胴上部破片	—	下層	縄文 RL／外面ヘラミガキ・無文部赤彩／内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：暗赤褐色 内面：暗褐色
4	壺	底部破片	—	下層	外面ヘラミガキ／内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：白灰褐色 内面：暗灰褐色
5	甕	口縁～胴部 1/3	(14.8) [12.0] —	床面直上	口唇部キザミ／内外面ヘラナデ	粗砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：黒褐色
6	高坏	坏部破片	—	下層	口縁部外反・下位に稜／内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
7	高坏・鉢	口縁部破片	—	床面直上	円形朱文径6mm／縄文 LR・S字状結節文・円形朱文／外面ヘラミガキ・無文部赤彩／内面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

第13表 584号住居跡出土遺物一覧

際で炉と考えられる被熱範囲がごく一部確認できた。貯蔵穴：調査区内では検出されていない。

[覆 土] 10層に分層した。

[遺 物] 本住居跡に伴う遺物として、壺19点、甕9点、高坏・鉢4点が出土している。壺では、ほぼ完形の片口の小型壺（第35図-1）が、横位の状態で床面直上から出土している。

[時 期] 弥生時代後期。

遺 物（第35図、第13表、図版12-1）

1は小型壺で、口縁部の1/2強ほどを失っているが、ほぼ完存している。ハケメ調整後に粗いヘラミガキが施されている。口縁部は片口の様相を呈している。2は壺の口縁部である。幅広複合口縁で、複合部には無節の羽状縄文が施されている。3は壺の胴上部の破片で、縄文帯の下端部にはS字状結節文が施されている。4は壺の底部で、ヘラミガキで調整されている。

5は甕である。ナデ調整されており、口唇部には棒状工具によるキザミが施されている。6は高坏の坏部破片である。口縁部は外反し、下位に稜を有する。7は高坏または鉢の口縁部である。縄文帯には円形朱文が2列多数みられ、下端部はS字状結節文が施されている。

585号住居跡

遺 構（第36図、図版6-1）

[位 置]（C-5）グリッド。

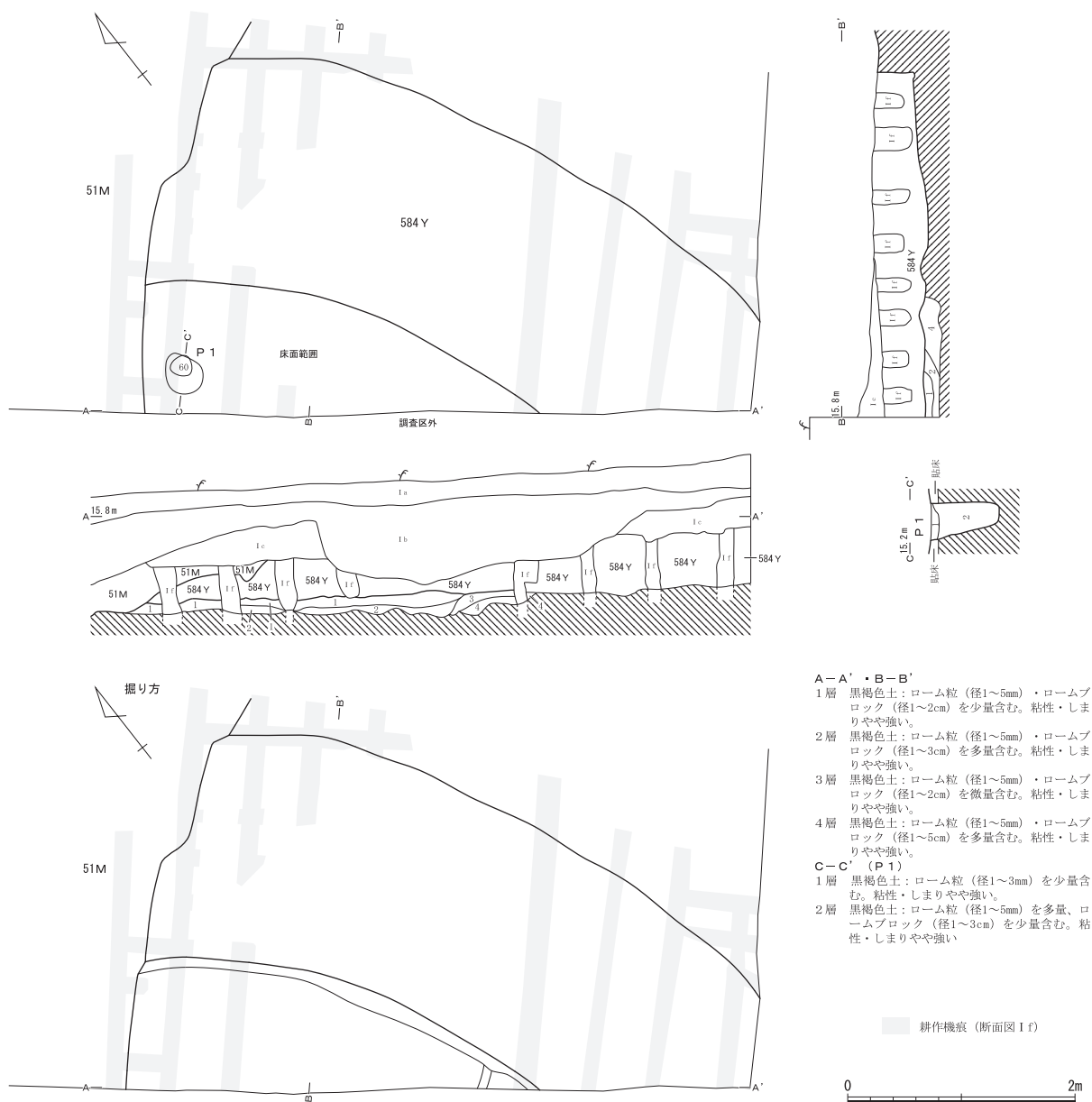
[検出状況] 2区南端で検出された。北東側の一部を確認できたと考えられる。51号溝跡・584号住居跡に切られる。

[構 造] 平面形：不明。規模：調査区内では約3.6×1.1mの範囲を確認した。主軸方位：584号住居跡と同等の、N-25°-Wほどと推測される。壁溝：調査区内では検出されていない。床面：貼床。厚さは10～20cm。壁際以外は硬化している。掘り方は中央部が低くなるようである。柱穴：ピットを1本確認した。炉：調査区内では検出されていない。貯蔵穴：調査区内では検出されていない。

[覆 土] 4層に分層した。貼床部分と考えられ、最上面は部分的に硬化している。

[遺 物] なし。

[時 期] 弥生時代後期。



第36図 585号住居跡（1/60）

586号住居跡

遺 構（第37・38図、図版6-2）

[位 置]（B-5・6）グリッド。

[検出状況] 3区北西部で検出された。52号溝跡・53号溝跡・27号ピットに切られる。

[構 造] 平面形：円形。規模：径約3.6mと推測される。主軸方位：不明。壁溝：なし。床面：貼床。厚さは5cm前後で、明確な硬化はみられない。掘り方はほぼ平坦である。柱穴：ピットを1本確認した。用途は不明である。炉：調査区内では検出されていない。貯蔵穴：P 1がこれに相当する可能性が高い。

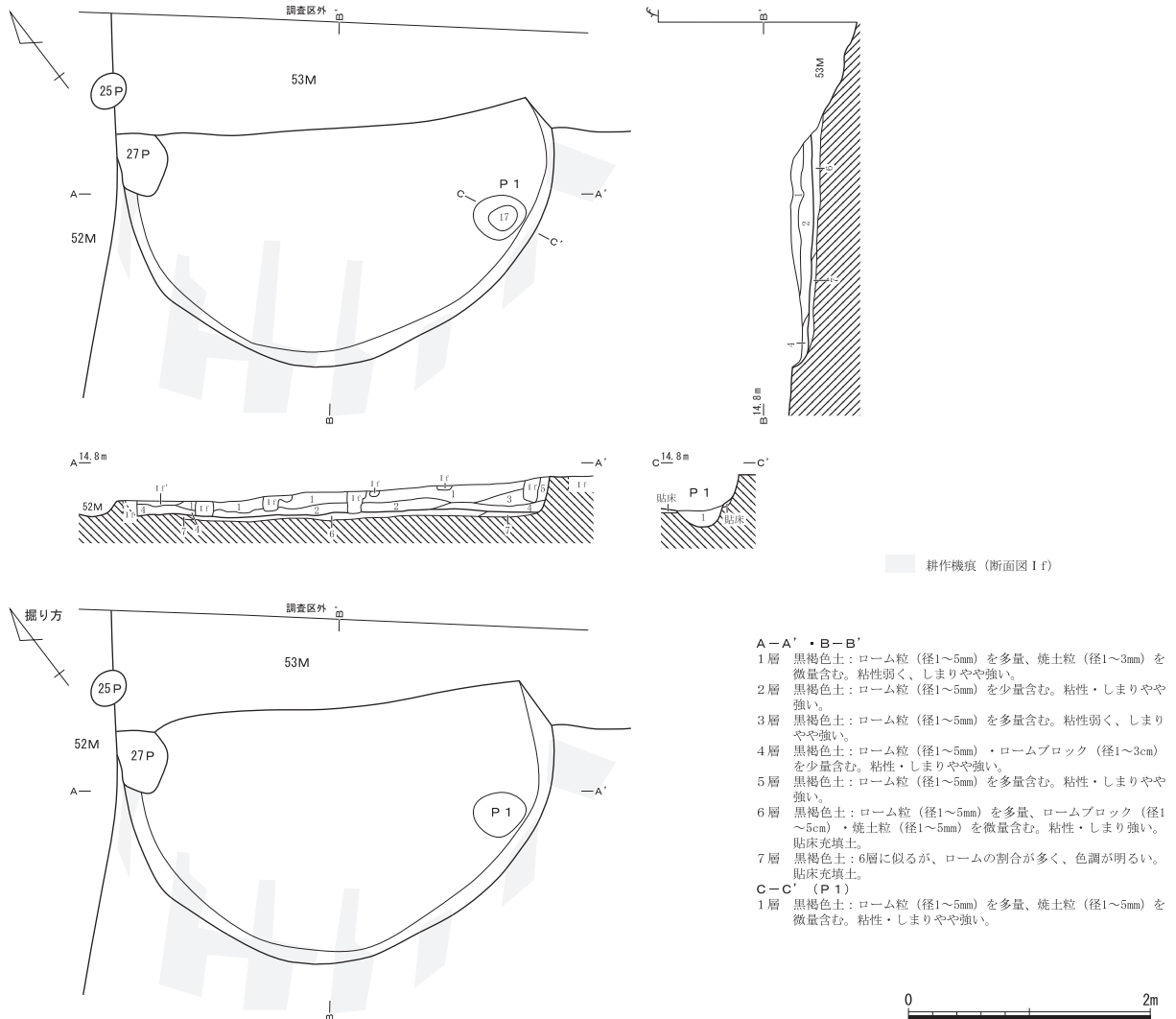
[覆 土] 7層に分層した。

[遺 物] 本住居跡に伴う遺物として、壺13点、甕4点、高坏・鉢4点が出土している。東側に寄った出土状況である。広口壺（第39図-1）は、接合しないものの、同一個体と思われる破片がやや広域に散在している。

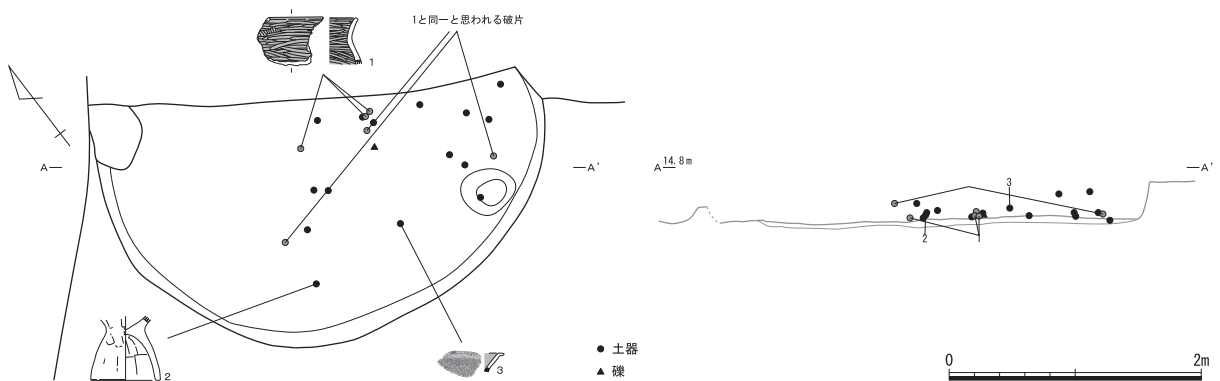
[時 期] 弥生時代後期。

遺 物 (第39図、第14表、図版12-2)

1は広口壺の口縁部である。内外面にヘラミガキが施されている。2は甕の脚部である。ナデ調整されている。3は高杯の口縁部である。口唇端部は外側へ水平に屈曲している。

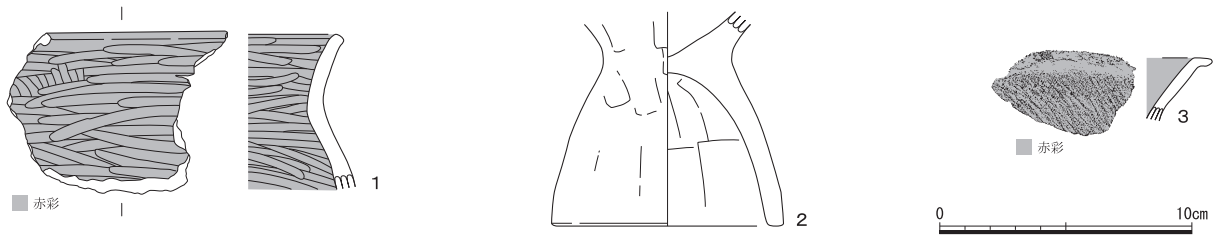


第37図 586号住居跡 (1/60)



第38図 586号住居跡遺物分布図 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



第39図 586号住居跡出土遺物(1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	口径器高底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	口縁部破片	—	下層	広口壺/内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
2	甃	脚部 1/4	[8.5] (9.2)	床面直上	外面ナデ/内面ヘラナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：灰褐色 内面：明赤褐色
3	高坏	口縁部破片	—	下層	外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ・赤彩	細砂粒・赤色粒子少量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

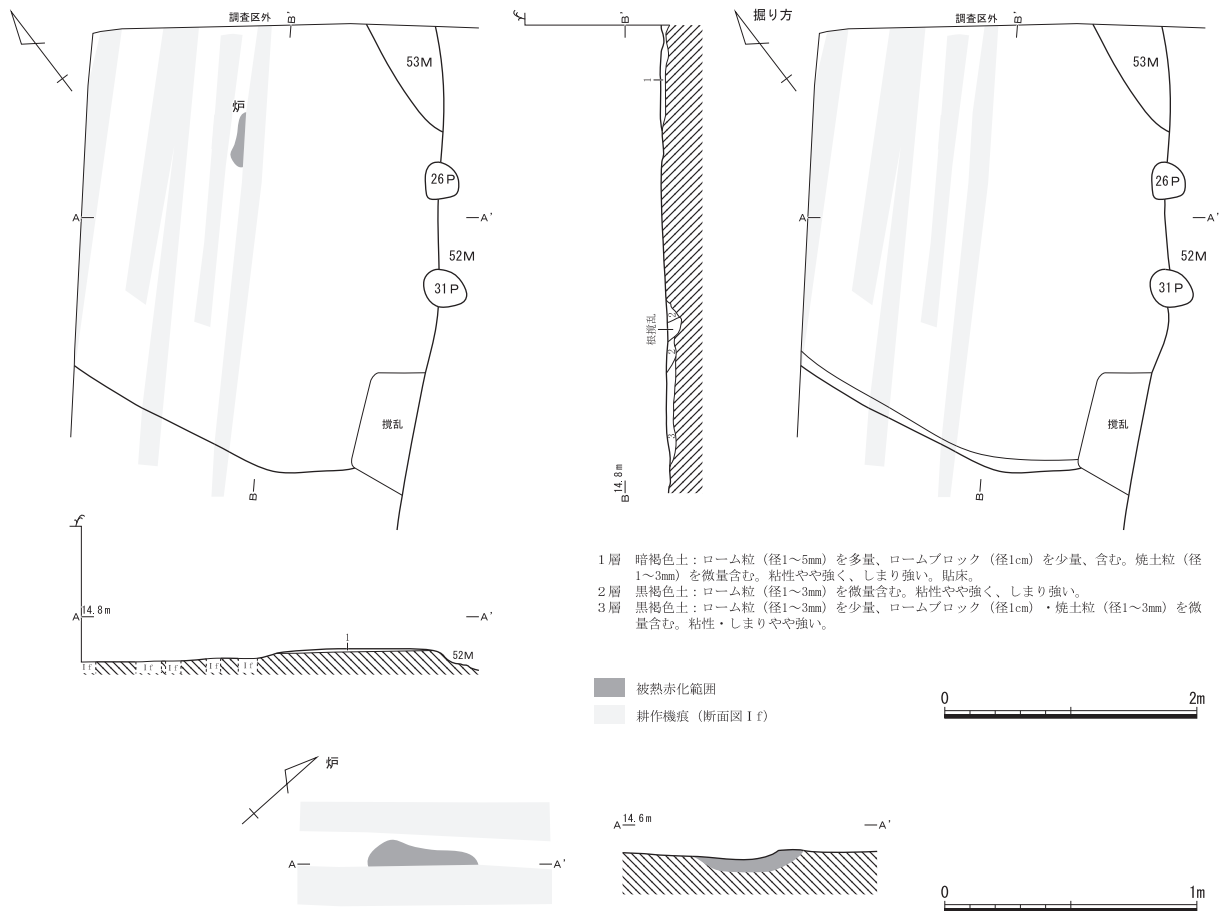
第14表 586号住居跡出土遺物一覧

587号住居跡

遺 構 (第40図、図版6-3・4)

[位 置] (A・B-5) グリッド。

[検出状況] 3区北西隅で検出された。52号溝跡・53号溝跡・26号ピット・31号ピットに切られ、



第40図 587号住居跡(1/60・1/30)

北側は調査区外に至る。覆土は調査区壁際のみ極薄く残存しており、大半は床面まで削平されている。

[構 造] 平面形:不明。規模:調査区内では約 3.5 × 3.0m の範囲を確認した。主軸方位:不明。壁溝:調査区内では検出されていない。床面:貼床。厚さは 5 cm 程度。明確な硬化はみられない。掘り方はほぼ平坦である。柱穴:調査区内では検出されていない。炉:44 × 7cm の範囲で検出されたが、削平されているため、掘り込みの有無は不明である。貯蔵穴:調査区内では検出されていない。

[覆 土] 3層に分層した。調査区壁際ではこの上に黒褐色土層 1層を確認している。

[遺 物] なし。

[時 期] 弥生時代後期～古墳時代前期。

588号住居跡

遺 構 (第 41～44 図、図版 6-5～7-2)

[位 置] (A-6) グリッド。

[検出状況] 3区西端で検出された。52号溝跡・16～24号ピット・32～34号ピットに切られ、北西隅は調査区外に至る。

[構 造] 平面形:隅丸方形。規模:一辺約 5.5m・床面までの深さ 25cm前後。主軸方位:N-10°-E。壁溝:全周する。床面:貼床。厚さは 15cmほど。壁際を除き、ほぼ全面が硬化している。掘り方は壁際が一段高くなっている。柱穴:5本検出した。そのうち3本は床下で確認した(P3～P5)。P1は赤砂の下で検出した。P2は位置的に入り口施設と考えられる。炉:中央よりやや北側に位置する。径 1m ほどの円形を呈し、10cm ほどの掘り込みをもつ地床炉で、被熱は強い。貯蔵穴:南東壁際に位置する。72 × 59cm の楕円形を呈し、深さは 20cm 前後である。北側に 10cm ほど離れて、幅 20cm・高さ 5cm の凸堤が、70cm ほどの長さでみられる。遺物は壺と高坏・鉢の破片が3点出土している。

[覆 土] 9層に分層した。黒褐色土を主体としている。貯蔵穴の東側の壁際には 120 × 70cm の範囲で「赤砂」がみられ、10cm ほどの厚さをもつ。東側中央では炭化物を多く含む層が床面上に 5cm ほど堆積し、層中からは炭化材が出土している。これらのうち5点を分析した(付編参照)。

[遺 物] 本住居跡に伴うものとして、壺 61点、甕 46点、高坏・鉢 6点、石器 2点が出土している。遺物は住居跡の南東部を中心に散在しているが、南西隅の焼土範囲の上層に集中がみられ、焼土とともに投げ込まれたような分布状況である。また、住居跡東側の中央では炭化材が検出された。これらの長軸は交差するような2つの方向が確認でき、建材の可能性が指摘される(付編参照)。

[時 期] 出土遺物は古墳時代前期が主体となるが、これらは住居廃絶後に廃棄された可能性がある。

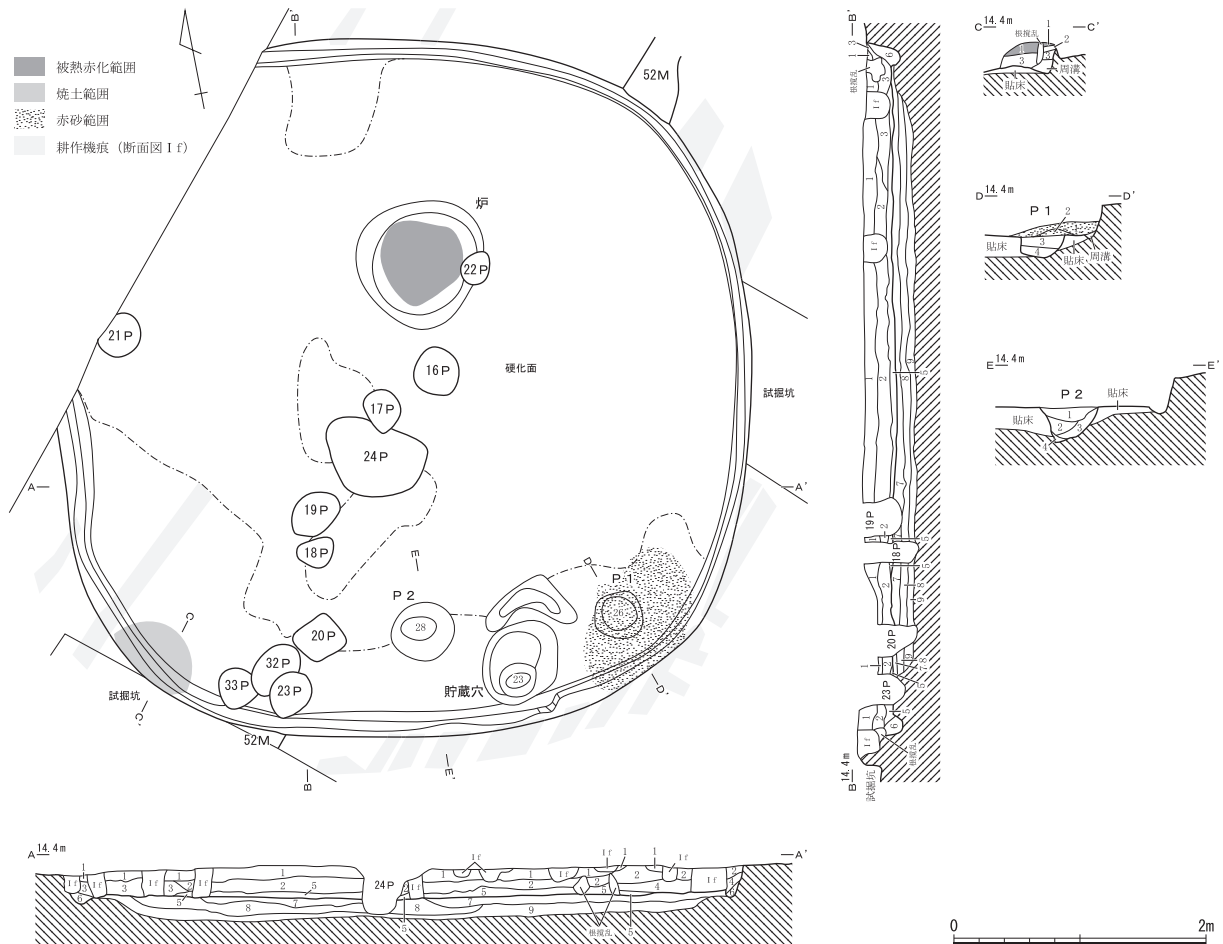
遺 物 (第 45・46 図、第 15 表、図版 12-3・13-1)

1は小型壺の口縁部で、ハケメ後にヘラミガキで調整されている。2は幅広複合口縁で、棒状浮文が3本付されている。内外面ともに赤彩がわずかに残存している。3は壺の頸部で、下位には細かい縄文が施され、円形浮文が1個と痕跡が隣に1箇所みられる。4は胴上部の破片で、下端部をS字状結節文で区画された細縄文帯が施され、その上には円形浮文1個が付されている。5は、器壁が厚く、2条のS字状結節文がみられる。ハケメ後にヘラミガキされている。6・7は壺の胴部破片で、7は小型壺であろう。8は壺の底部である。

9はハケメ調整の甕である。10・11は甕の口縁部で、口唇部には10はハケ状工具、11は棒状工具によるキザミが施されている。12～15は甕の胴部破片で、12はナデ、13～15はハケ調整である。

第3章 検出された遺構と遺物

16・17は台付甕の脚部である。17はヘラミガキがみられ、高坏の可能性もある。18～21は、S字甕の破片で、19・20の胴部は器壁が薄く、細かくシャープなハケメが施されており、同一個体と思われる。21は脚部との接合部分で、ほぼ同様のハケメで調整されている。22・23は打製石斧で、23には磨痕がみられる。24・25は磨石である。24は、6面のうち4面で、非常に滑らかで光沢のある磨痕がみられる。25の側面には敲打痕がみられる。



A-A'・B-B'

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒・炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3層 褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）・炭化物粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～3cm）・焼土粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 5層 褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
- 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性・しまり強い。
- 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性・しまり強い。貼床硬化面。
- 8層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床。
- 9層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。場所により黒色土が混入し、色調が暗い部分がある。貼床。

C-C'（焼土範囲）

- 1層 黒褐色土：焼土粒（径1～5mm）を多量、ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。

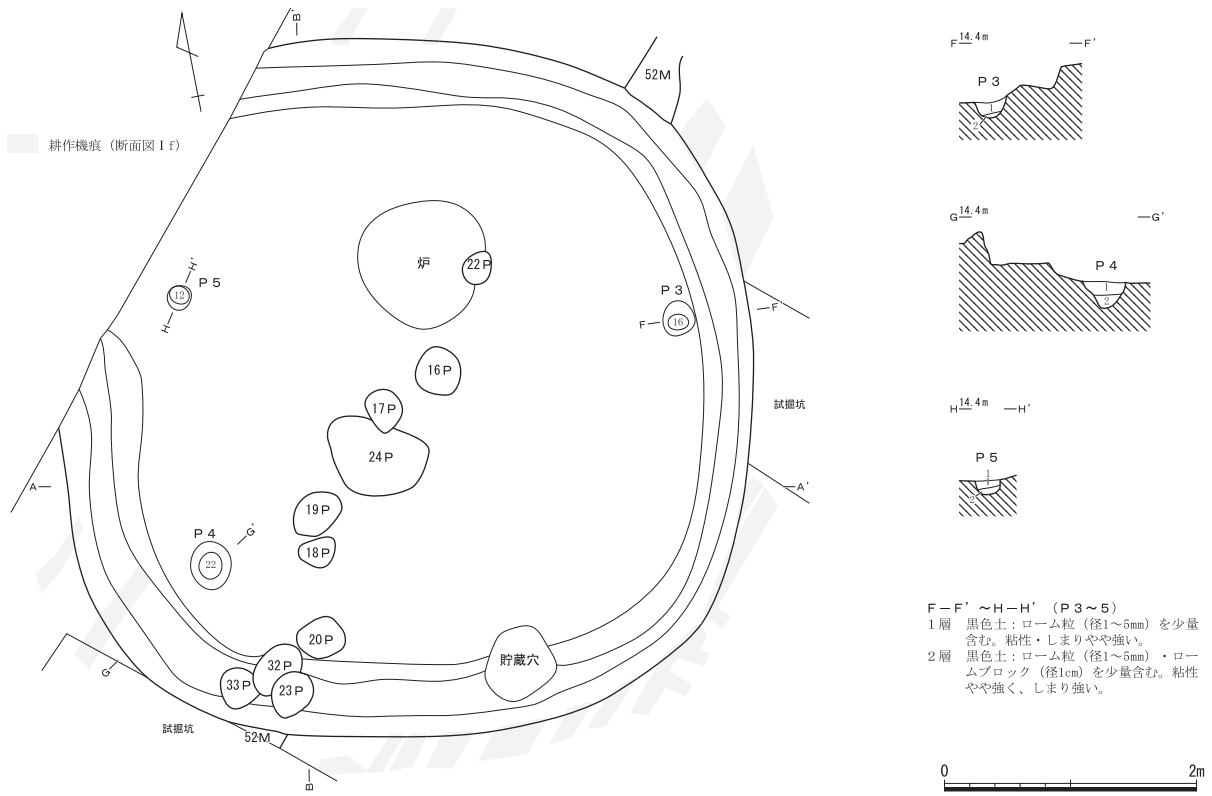
D-D'（赤砂範囲・P1）

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・小石（径1～5mm）・白色粒（径1～5mm）を多量含む。粘性弱く、しまりやや強い。砂質土（赤味は弱い）。
- 2層 褐色土：白色粒（径1～5mm）を多量、ローム粒（径1～5mm）・小石（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。砂質土。
- 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまり強い。P1覆土。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を微量含む。粘性強く、しまりやや強い。P1覆土。

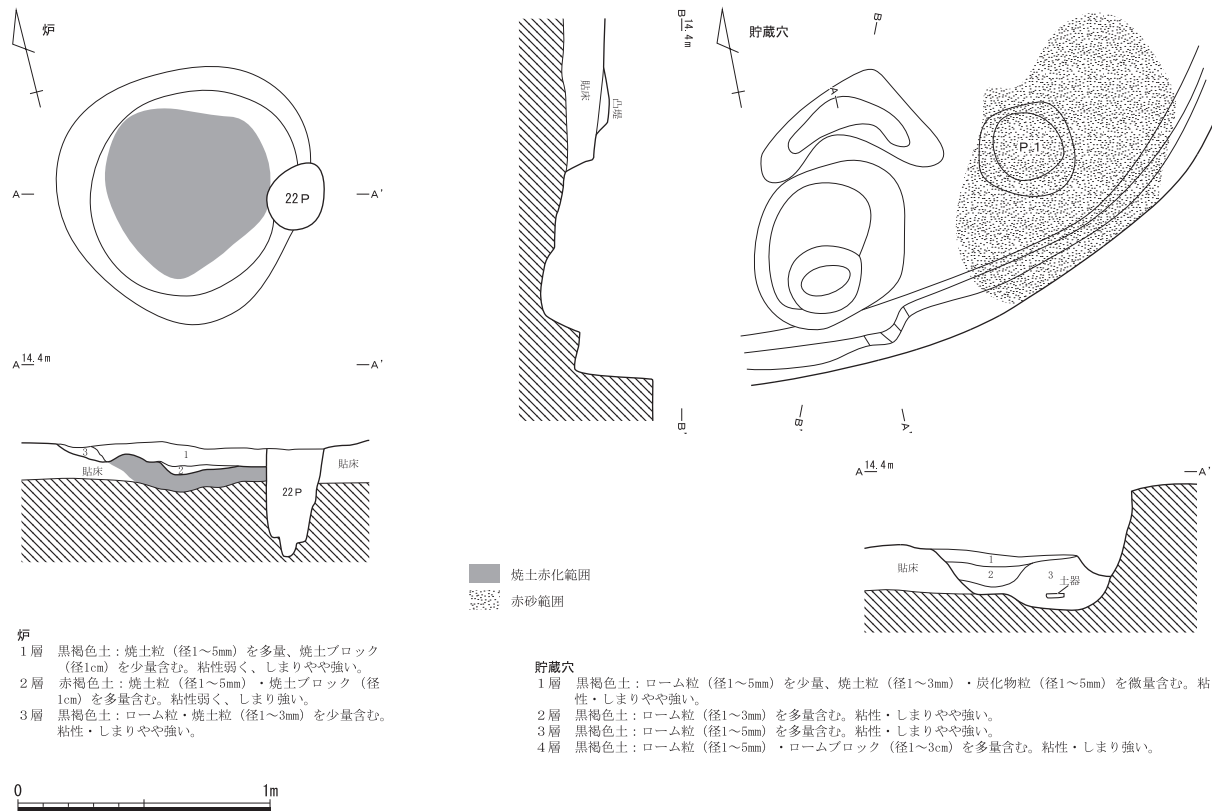
E-E'（P2）

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～5mm）・炭化物粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量、ロームブロック（径1～3cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまり強い。

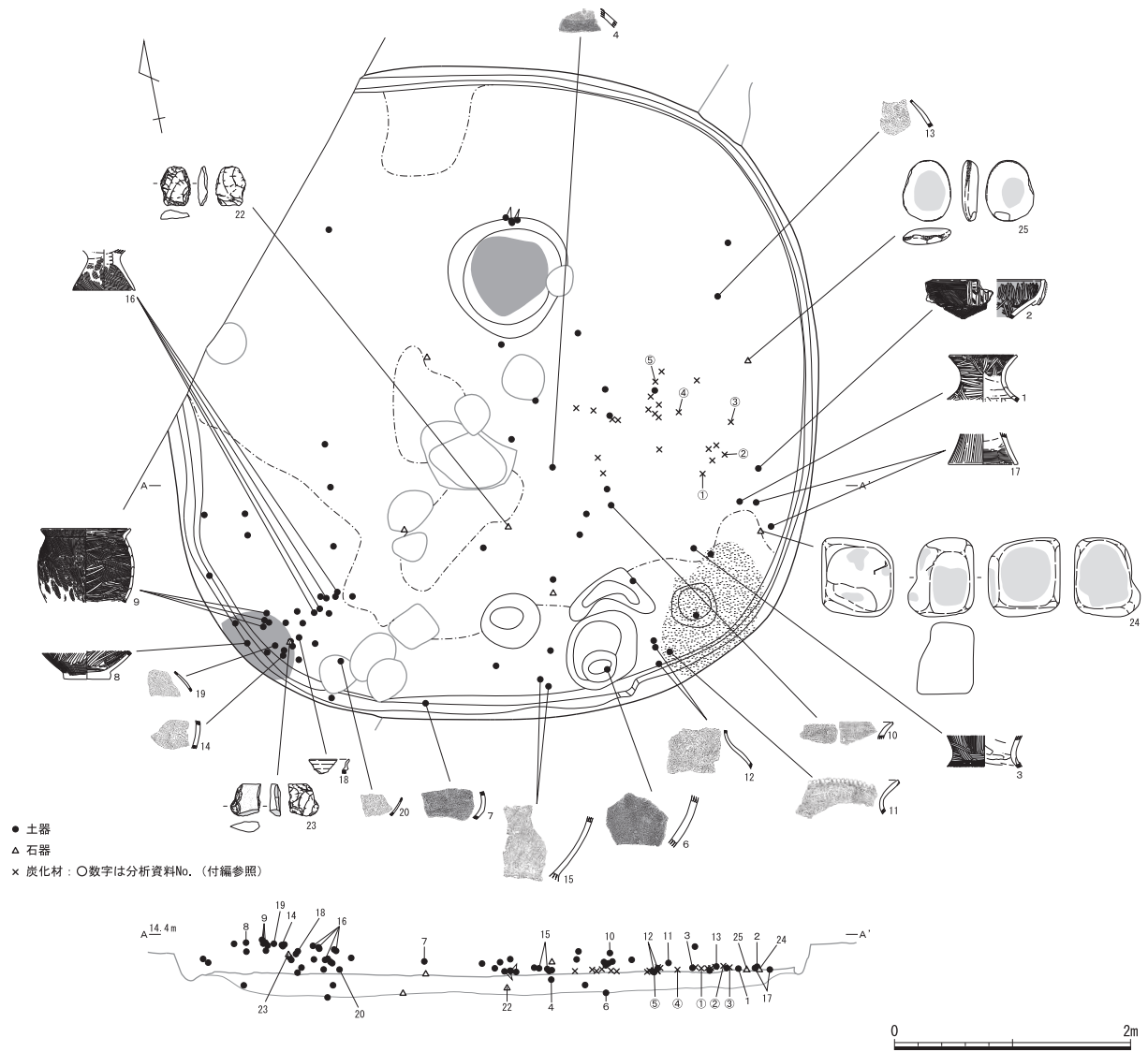
第41図 588号住居跡（1/60）



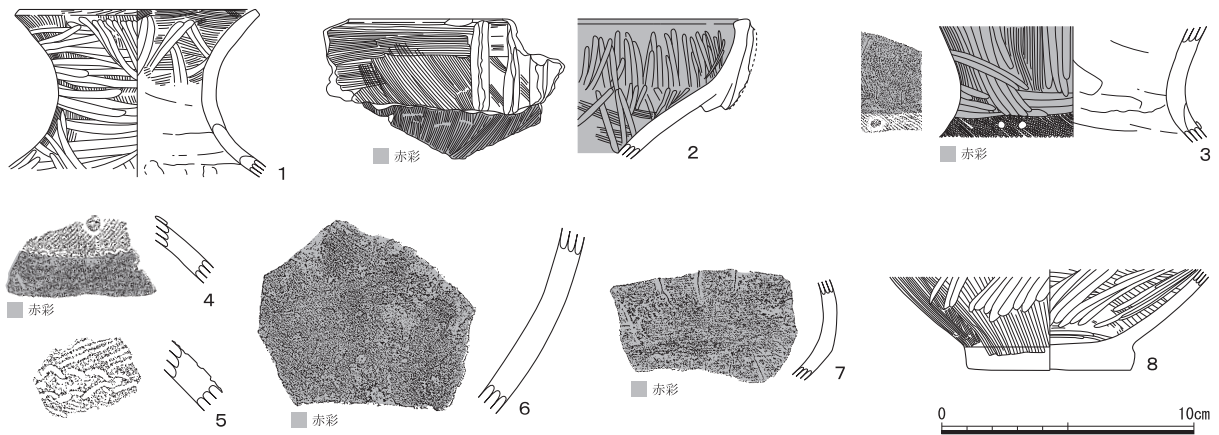
第42図 588号住居跡掘り方 (1/60)



第43図 588号住居跡炉・貯蔵穴 (1/30)



第44図 588号住居跡遺物分布図 (1/60)



第45図 588号住居跡出土遺物1 (1/3)



第46図 588号住居跡出土遺物2 (1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	遺存部位	口径 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	口縁部 1/3	(9.3) [6.8] —	下層	小型壺/外面ハケメ・ヘラミガキ/内面ハケメ・ヘラナデ	細砂粒少量	良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色
2	壺	口縁部破片	—	下層	外面ハケメ・赤彩/内面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩	細砂粒多量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗赤褐色
3	壺	頸部 1/3	—	下層	頸部最小径(4.8cm)/円形浮文径4mm/縄文RL・円形浮文/外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細砂粒少量	良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色
4	壺	胴上部破片	—	貼床	円形浮文径5mm/縄文LR・S字状結節文・円形浮文/外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：明褐色
5	壺	胴上部破片	—	炉	器壁厚い/縄文LR・S字状結節文/一括資料	細粗砂粒多量/小石少量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色
6	壺	胴部破片	—	貯蔵穴	外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒・赤色粒子少量	良好	外面：赤褐色 内面：暗灰褐色
7	壺	胴部破片	—	上層	小型/外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：暗灰褐色
8	壺	底部完存	— [4.0] (6.4)	上層 (焼土範囲周辺)	内外面ハケメ・ヘラミガキ	細砂粒微量	良好	外面：褐色 内面：褐色
9	甗	口縁～胴部 1/3	(12.4) [10.5] —	上層 (焼土範囲周辺)	胴部最大径(13.5)cm/外面ハケメ/内面ハケメ・ヘラミガキ	細砂粒少量/小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
10	甗	口縁部破片	—	上層	口唇部キザミ/内外面ハケメ	細砂粒微量	良好	外面：黒褐色 内面：黒褐色
11	甗	口縁部破片	—	下層	口唇部キザミ/内外面ナデ	細砂粒少量	良好	外面：暗褐色 内面：暗灰褐色
12	甗	胴部破片	—	下層	内外面ナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：暗褐色
13	甗	胴部破片	—	床面直上	内面に煤少量付着/外面ハケメ/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：暗褐色
14	甗	胴部破片	—	上層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	細砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
15	甗	胴部破片	—	下層	外面ハケメ・ナデ/内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：暗褐色 内面：明赤褐色
16	甗	脚部 1/2	— [5.6] (8.8)	上層 (焼土範囲周辺)	内外面ナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：暗灰褐色 内面：赤褐色
17	甗	脚部	— [4.5] (9.8)	床面直上	外面ヘラミガキ/内面ヘラナデ	細砂粒・小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
18	甗	口縁部破片	—	上層 (焼土範囲周辺)	S字甗	細砂粒少量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
19	甗	胴部破片	—	上層 (焼土範囲周辺)	S字甗/器壁薄い/外面ハケメ	細砂粒少量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色
20	甗	胴部破片	—	下層 (焼土範囲周辺)	S字甗/器壁薄い/外面ハケメ	細砂粒少量	良好	外面：暗褐色 内面：明灰褐色
21	甗	胴～脚部 1/5	—	上層	S字甗/外面ハケメ/一括資料	細砂粒少量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗褐色

遺物番号	種別	石材	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量
22	打製石斧	ホルンフェルス	貼床	5.5	4.2	1.3	33.8
23	打製石斧	ホルンフェルス	上層 (焼土範囲周辺)	4.5	4.3	1.5	35.1
24	磨石	磨石	床面直上	11.2	10.1	8.1	1681.3
25	磨石	磨石	下層	8.5	6.8	2.3	190.2

第15表 588号住居跡出土遺物一覧

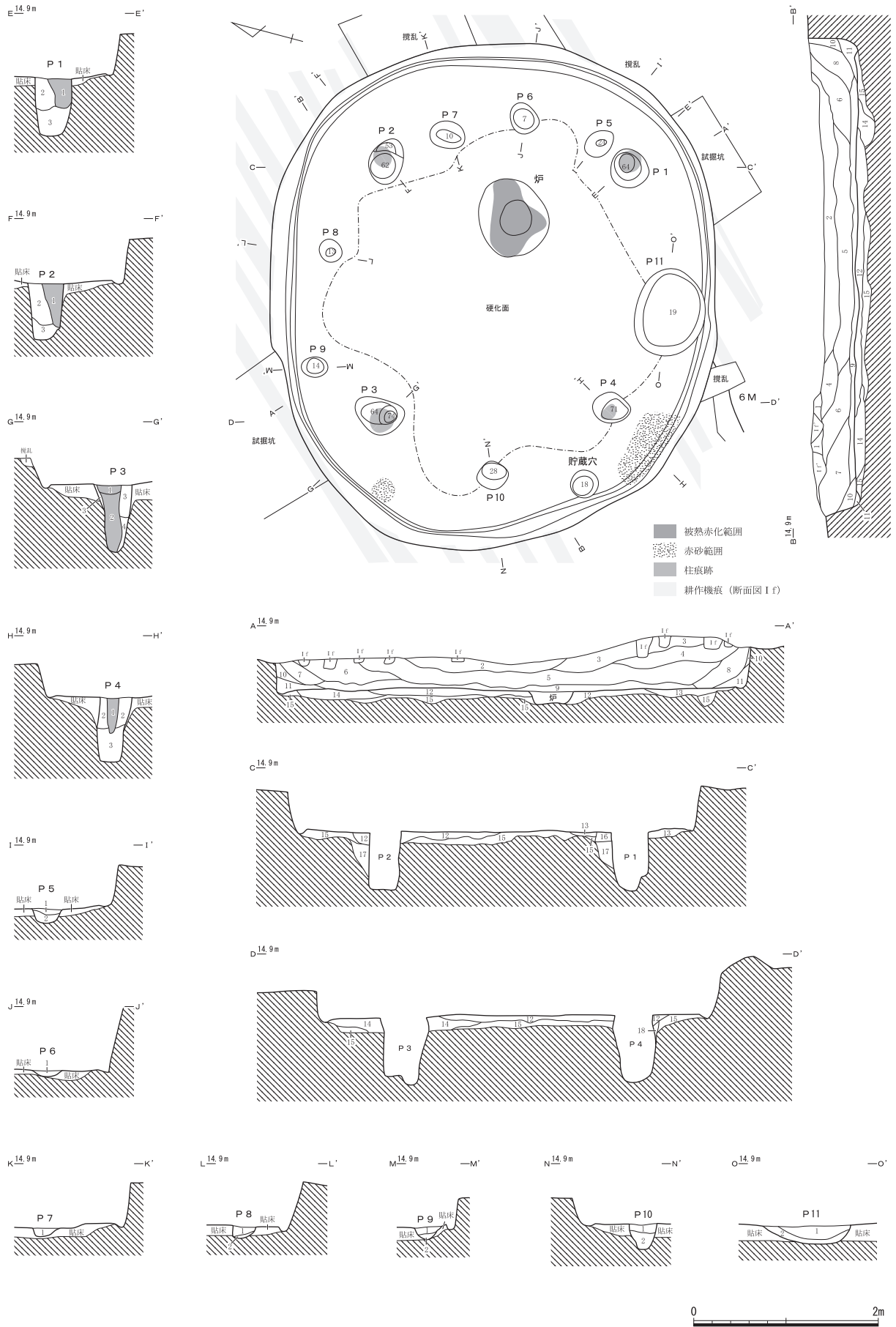
589号住居跡

遺 構 (第47～50図、図版7-3～8)

[位 置] (A・B-6) グリッド。

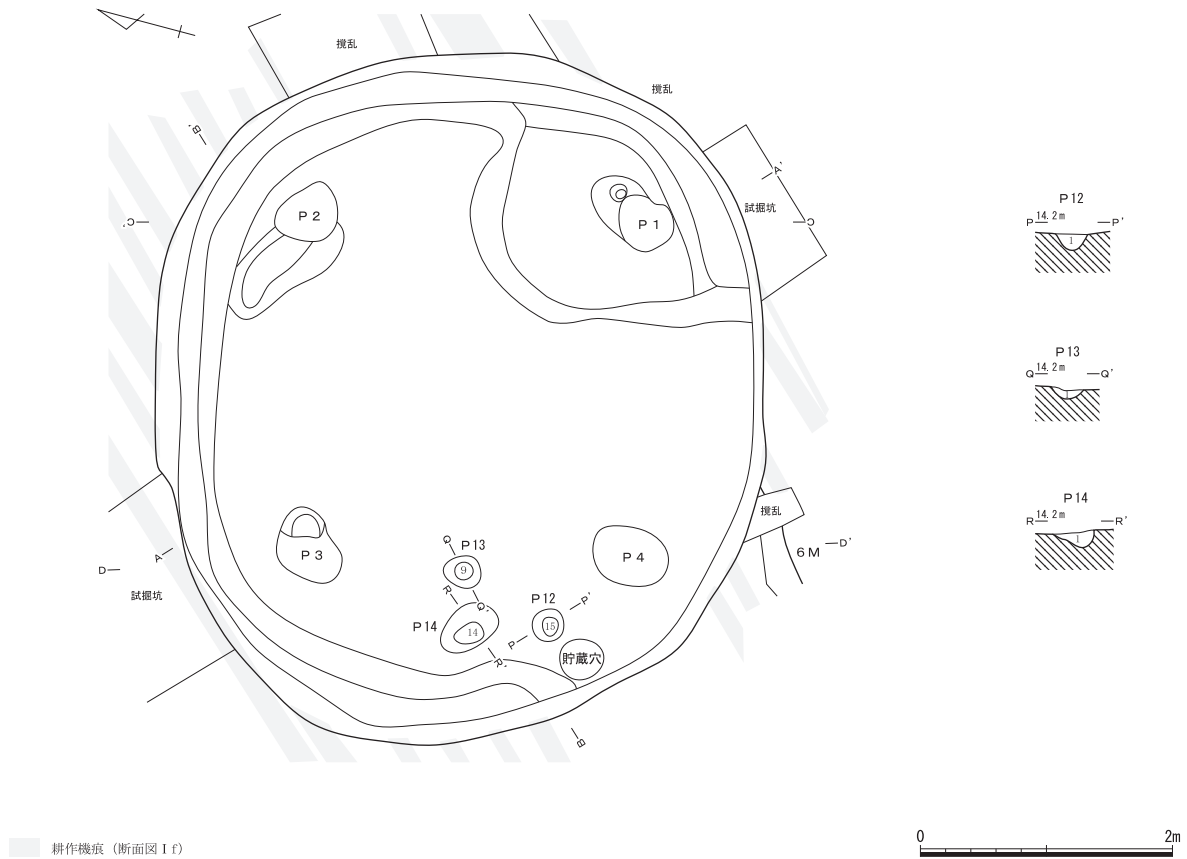
[検出状況] 3区西側で検出された。6号溝跡に切られ、714号土坑・81号ピット・82号ピットを切る。攪乱や後世の遺構に切られてはいるものの、その影響は少なく、平面的には全体を確認できた。

[構 造] 平面形：やや不整な隅丸方形。規模：長軸5.5m/短軸4.8m/確認面から床面までの深さは最大で55cm。主軸方位：N-75°-E。壁溝：全周する。床面：貼床。厚さは15cm前後で、壁際を除き、ほぼ全面が硬化している。大きめのロームブロックが目立つ。掘り方は壁際が一段高くなり、底面は凹凸がみられる。柱穴：11本検出した。そのうち、P1～P4は主柱穴である。径30～50cm前後、床面からの深さは60～75cmである。径15～25cmの柱痕跡が確認できた。P8～P10は、径30～



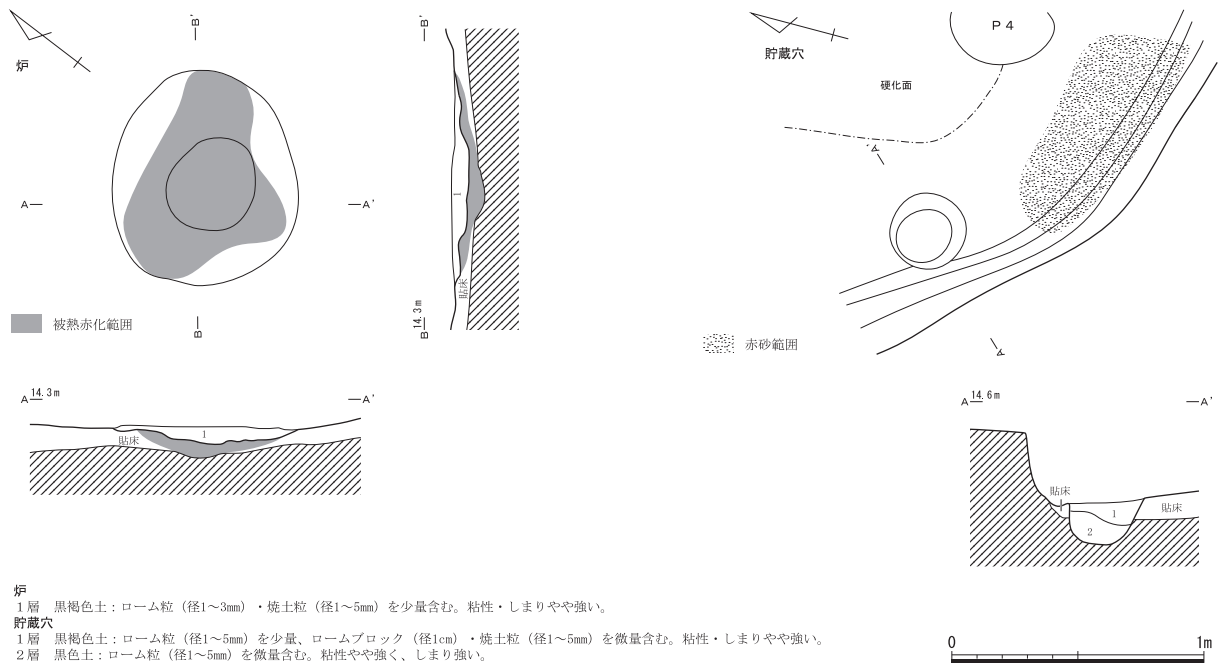
第47図 589号住居跡(1/60)

第3章 検出された遺構と遺物



- A-A' ~ D-D'**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~3mm）・焼土粒（径1~5mm）・炭化物粒（径1~3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒・焼土粒（径1~5mm）を少量、炭化物粒（径1~3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~5cm）を多量、焼土粒（径1~5mm）を少量、焼土ブロック（径1~5cm）・炭化物粒（径1~5mm）を微量含む。粘性・しまり強い。
 - 6層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 7層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量、焼土粒（径1~5mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 8層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。色調がやや暗い。
 - 9層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1~2cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
 - 10層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 11層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 12層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~3cm）を多量、焼土粒（径1~3mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。貼床硬化面。
 - 13層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~3cm）を多量、焼土粒（径1~3mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
 - 14層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~2cm）を少量含む。粘性強く、しまりやや強い。貼床充填土。
 - 15層 褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~5cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
 - 16層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1~3cm）を少量含む。粘性・しまり強い。貼床充填土。
 - 17層 にぶい黄褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1~3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
 - 18層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。貼床充填土。
- E-E'・F-F'・H-H'（P1・P2・P4）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。柱痕跡。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~3cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
- G-G'（P3）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。柱痕跡。
 - 2層 P1・P2・P4の1層相当。
 - 3層 P1・P2・P4の2層相当。
 - 4層 P1・P2・P4の3層相当。
- I-I'・M-M'（P5・P9）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黄褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~5cm）を多量含む。粘性弱く、しまり強い。
- J-J'・K-K'（P6・P7）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、焼土粒（径1~5mm）を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
- L-L'（P8）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。P5・9より色調明るめ。
 - 2層 黄褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1~5cm）を多量含む。粘性弱く、しまり強い。
- N-N'（P10）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を少量、ロームブロック（径1~2cm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- O-O'（P11）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
- P-P'（P12）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~3mm）を少量、焼土粒・炭化物粒（径1~3mm）を微量含む。粘性強く、しまりやや強い。
- Q-Q'・R-R'（P13・P14）**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1~5mm）・ロームブロック（径1cm）を少量、赤色スコリア（径1~3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。

第48図 589号住居跡掘り方（1/60）



第49図 589号住居跡炉・貯蔵穴（1/30）

50cmで、深さは10cm前後の浅いものである。P10は入り口施設と考えられる。P11は95×75cmの楕円形を呈し、他のものより規模が大きい。P12～P14は床下で確認した。炉：中央よりやや東寄りに位置する。84×73cmの楕円を呈し、10cmほど掘り込まれた地床炉である。炉の焼土を水洗選別したところ、炭化米1点とガラス玉1点（第52図-30）が検出された。貯蔵穴：南西壁際に位置する。径30cmほどの円形を呈し、深さは20cm前後である。遺物は出土していない。

〔覆土〕18層に分層した。黒褐色土を主体としている。貯蔵穴の南側と住居跡の北西の壁際には「赤砂」が検出された。赤味は弱く、床面上に薄く堆積していた。

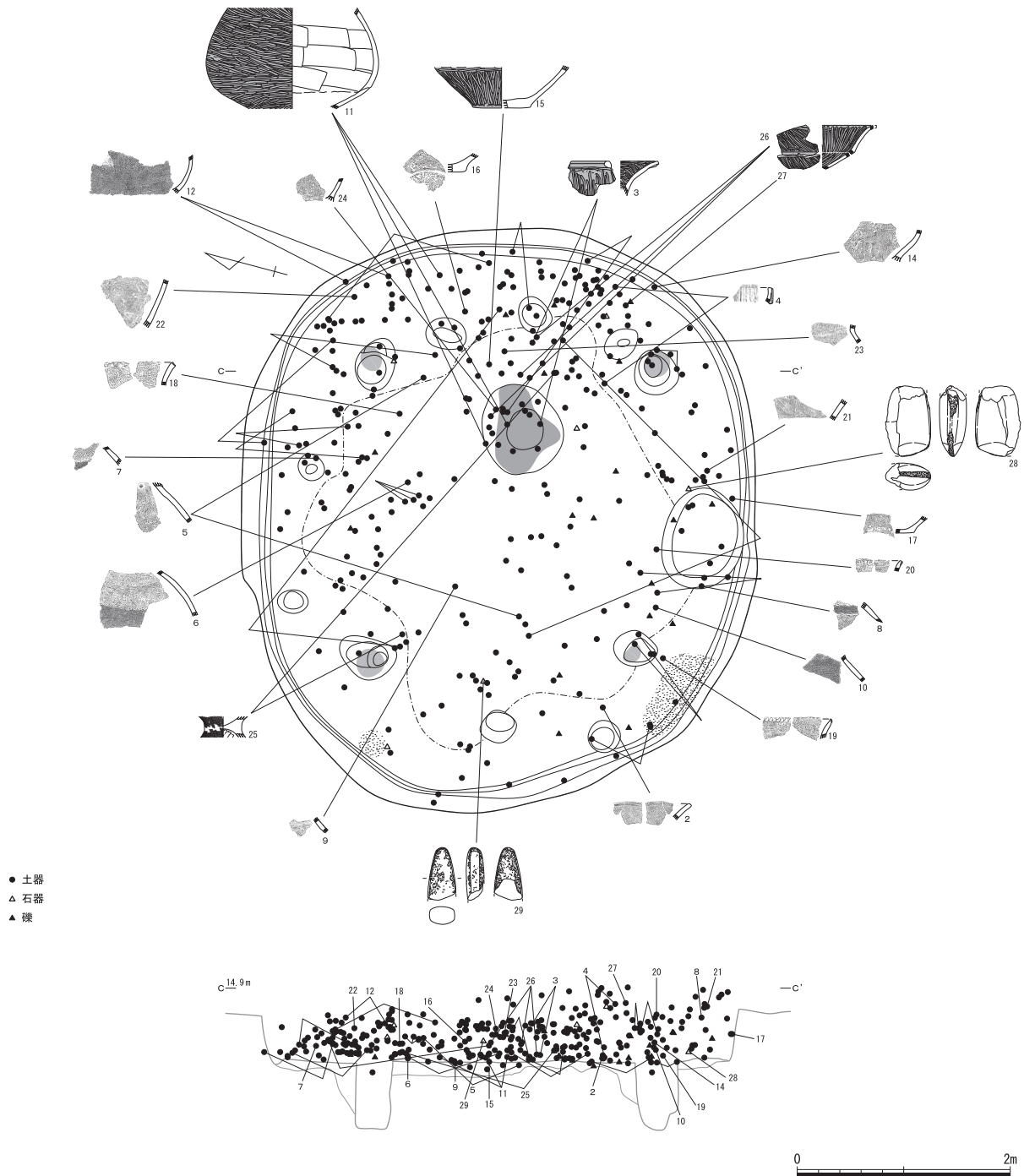
〔遺物〕本住居跡に伴うものとして、壺241点、甕169点、高坏・鉢23点、装飾品1点が出土しており、本調査地内の住居跡では最も多い出土量である。遺物は住居跡の北側にやや多く分布している。接合状況を見ると、平面的にも断面的にも離れた位置のものが接合する例が多くみられる。

〔時期〕弥生時代後期後半。

〔遺物〕（第51・52図、第16・17表、図版13-2・14-1）

1～4は壺の口縁部破片である。1は内外面ともにヘラミガキで丁寧に調整されており、外面には赤彩がわずかにみられる。2はハケメ調整である。3は幅の狭い複合口縁、4は幅広複合口縁で、口唇端部には縄文、複合部には羽状縄文が施され、棒状浮文が4本付されている。5～10は壺の胴上部破片で、5・6は下端部を結節文で区画された縄文帯が2段施され、5の上位には円形浮文が1個付されている。7・8も下端部を結節文で区画された縄文帯がみられ、8は縄文帯の間に無文帯を有する。9は櫛描横線文と櫛描波状文が施された東海西部系統の土器である。10はヘラミガキされているが、ハケメがかすかに残存している。7～14は壺の胴部で、13は小型壺であろう。15～17は壺の底部である。

18～20は甕の口縁部破片である。18は棒状工具による交互押捺、19も棒状工具、20はハケ状工具により口唇部にキザミをつけている。21～24は甕の胴部、25は甕の胴部と脚部の接合部で、い



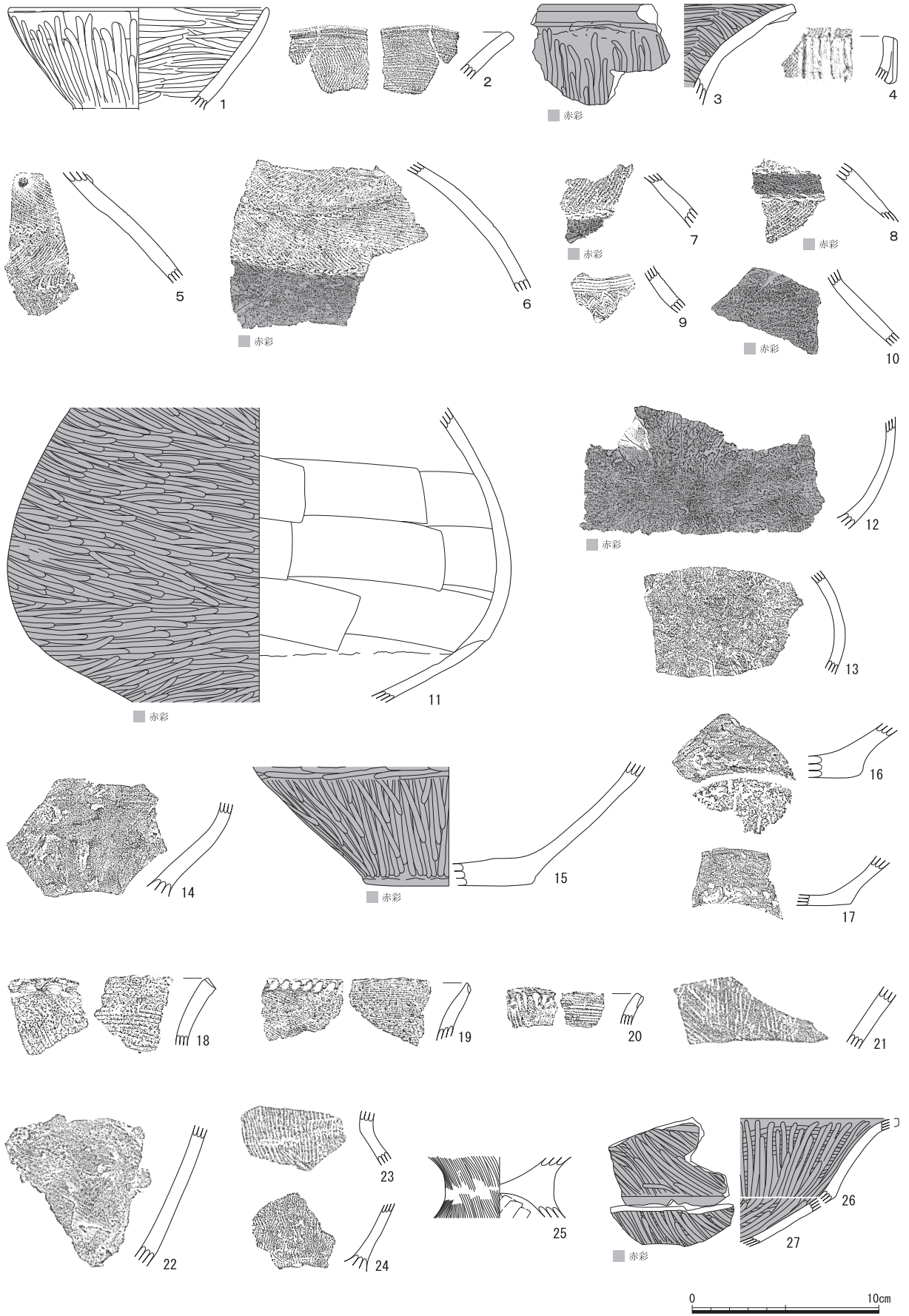
第 50 図 589 号住居跡遺物分布図 (1/30)

れもハケメがみられる。

26・27 は高坏の坏部破片で、同一個体と思われる。下位で稜をもって屈曲し、口縁部は外反する。形状や赤彩の状況から箱清水系のものと思われる。

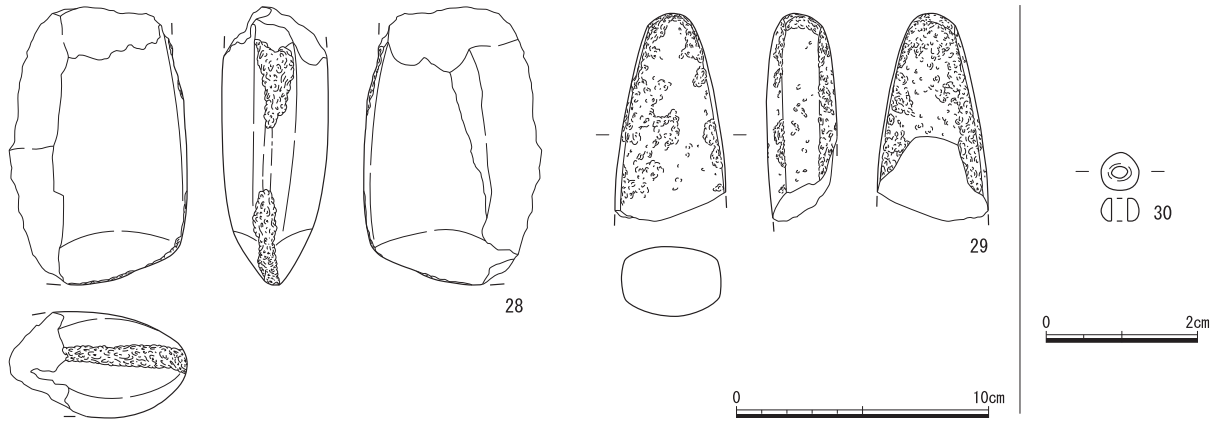
28・29 は磨製石斧である。28 は弥生時代中期、29 は縄文時代にまで遡るものであるが、二次使用の痕跡が見受けられるため、本住居跡出土遺物として扱った。

30 は炉から出土したガラス玉である。孔は直線的で壁面は比較的平滑、気泡は孔と並行に配列するものが観察でき、端面を貫くものもみられることから、引き伸ばし法で製作されたものと推察される。



第51図 589号住居跡出土遺物1 (1/3)

第3章 検出された遺構と遺物



第52図 589号住居跡出土遺物2 (1/3・1/1)

遺物番号	器種	遺存部位	口径器高底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	口縁部破片	—	上層	内外面ヘラミガキ/外面赤彩少量残存/一括資料	細砂粒少量/小石・雲母微量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色
2	壺	口縁部破片	—	下層	内外面ハケメ	細砂粒少量	良好	外面：明赤褐色 内面：明赤色
3	壺	口縁部破片	—	上層・下層	幅狭複合口縁/内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
4	壺	口縁部破片	—	上層・床面直上	幅広複合口縁/端部縄文LR/複合部羽状縄文RL-LR・棒状浮文	細砂粒微量	良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色
5	壺	胴上部破片	—	上層・貼床	縄文RL・S字状結節文・縄文LR・S字状結節文/円形浮文(径5mm)/外面ヘラミガキ/内面ヘラナデ	細粗砂粒・赤色粒子微量	良好	外面：灰褐色 内面：暗灰褐色
6	壺	胴上部破片	—	下層	羽状?縄文RL-LR・S字状結節文・羽状?縄文RL-LR・S字状結節文/無文部ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒・小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：明灰褐色
7	壺	胴上部破片	—	下層	縄文LR・Z字状結節文/無文部ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：赤褐色 内面：明褐色
8	壺	胴上部破片	—	上層	縄文LR・S字状結節文/無文部ヘラミガキ・赤彩/縄文LR/内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：明褐色
9	壺	胴上部破片	—	床面直上	東海西部系/櫛描横線文/櫛描波状文	細粗砂粒微量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色
10	壺	胴上部破片	—	下層	外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩/内面ハケメ・ヘラナデ	細粗砂粒多量/赤色粒子微量	良好	外面：暗赤褐色 内面：暗灰褐色
11	壺	胴部 1/3	器高 [15.8]	下層・床面直上	胴部最大径 27.0cm/外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒少量/小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：明褐色
12	壺	胴部破片	—	上層	外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	赤色粒子少量/細砂粒微量	良好	外面：赤褐色 内面：灰褐色
13	壺	胴部破片	—	上面	小型/外面ヘラミガキ/内面ヘラナデ/一括資料	細粗砂粒・雲母少量/小石微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
14	壺	胴下部破片	—	下層	外面ヘラミガキ/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：黄灰褐色 内面：明褐色
15	壺	底部 1/3	[6.6] (8.8)	下層	外面ヘラミガキ・赤彩/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：赤褐色 内面：明灰褐色
16	壺	底部破片	—	下層	外面ヘラミガキ/内面ヘラナデ/底面木葉痕	細粗砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：明灰褐色
17	壺	底部破片	—	下層	外面・底面ヘラミガキ/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：暗褐色 内面：明灰褐色
18	甗	口縁部破片	—	上層	口唇部棒状工具による交互押捺/内外面ハケメ	細粗砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：灰褐色
19	甗	口縁部破片	—	床面直上	口唇部棒状工具によるキザミ/内外面ハケメ	細粗砂粒少量/小石微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
20	甗	口縁部破片	—	上層	口唇部ハケ状工具によるキザミ/内外面ハケメ	細粗砂粒微量	良好	外面：明灰褐色 内面：明灰褐色
21	甗	胴部破片	—	上層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
22	甗	胴部破片	—	上層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：褐色 内面：黒褐色
23	甗	胴上部破片	—	上層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	赤色粒子少量/細砂粒・小石微量	良好	外面：白灰褐色 内面：暗灰褐色
24	甗	胴下部破片	—	上層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：白黄褐色 内面：白黄褐色
25	甗	胴~脚部 1/3	—	下層	外面ハケメ/内面ヘラナデ	細粗砂粒・雲母多量/小石微量	良好	外面：明赤褐色 内面：黒褐色
26	高坏	坏部破片	—	下層	内外面ヘラミガキ・赤彩/13と同一か/箱清水系?	細砂粒・赤色粒子微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
27	高坏	坏部破片	—	上層	内外面ヘラミガキ・赤彩/13と同一か/箱清水系?	細砂粒・赤色粒子微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

第16表 589号住居跡出土遺物一覽1

遺物番号	種別	材質	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴
28	磨製石斧	蛇紋岩	下層	[11.0]	[7.1]	4.2	[491.0]	基部・側縁部欠損／大型蛤刃石斧／刃部に敲打痕
29	磨製石斧	砂岩	上層	[8.2]	[4.4]	2.7	[141.0]	刃部欠損／長三角形型

遺物番号	種別	材質	出土位置	最大径	孔径	最大厚	重量	特徴
30	小玉	ガラス	炉	0.5	0.2	0.3	0.1	紺色透明／引き伸ばし法

第17表 589号住居跡出土遺物一覧2

(3) 土坑

704号土坑

遺構 (第53図、図版8-1)

[位置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 2区中央で検出された。耕作機による攪乱を受けている。

[構造] 平面形：隅丸方形。断面形：壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面にはピット状の掘り込みがみられる。規模：長軸 1.2m / 短軸 1.0m / 深さ 68cm。長軸方位：N-73°-E。

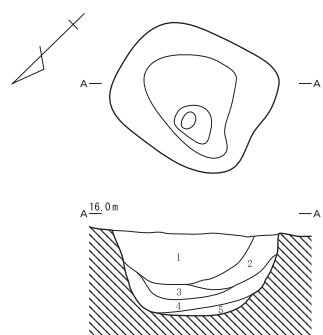
[覆土] 黒褐色土を主体とし、5層に分層した。

[遺物] 縄文時代中期の土器1点・壺4点・甕1点・高坏または鉢1点が出土している。

[時期] 出土遺物と覆土の様子から、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

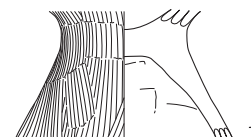
遺物 (第54図、第18表、図版14-2)

1は台付甕の脚部である。ハケメ調整されている。



第53図 704号土坑(1/60)

- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）・ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。1層よりもやや暗めの色調。
- 3層 黒色土：ローム粒（径1～3mm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまり強い。
- 5層 黒褐色土：ローム主体で黒褐色土混入。粘性・しまり強い。



第54図 704号土坑出土遺物(1/3)

遺物番号	器種	遺存部位	器高	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	甕	脚部 1/2	[5.1]	中層	外面ハケメ／内面ナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色

第18表 704号土坑出土遺物一覧

713号土坑

遺構 (第55図、図版8-2)

[位置] (C-7) グリッド。

[検出状況] 3区東側で検出された。耕作機による攪乱を受けている。

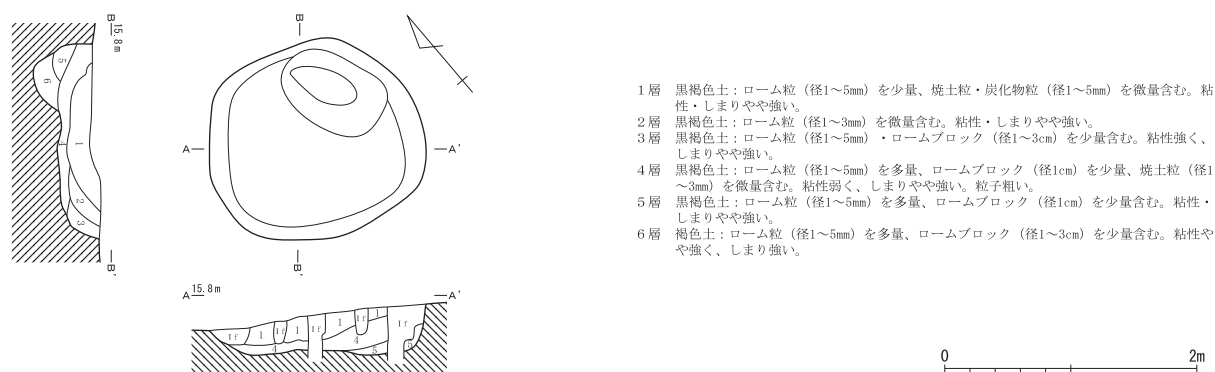
[構造] 平面形：円形。断面形：壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面にはピット状の掘り込みがみ

られる。規模：長軸 1.7m / 短軸 1.5m / 深さ 35cm。長軸方位：N - 54° - W。

[覆 土] 黒褐色土を主体とし、6層に分層した。

[遺 物] 台付甕の脚部破片 1点が出土している。小破片のため図示していない。

[時 期] 出土遺物と覆土の様子から、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。



第 55 図 713 号土坑 (1/60)

(3) ピット

ピットは、詳細不明なものが多いが、出土遺物や覆土の様子から、14本(第12図、第20表)を当該期のものとした。このうち、54～56・86号ピットは、形状・覆土ともに類似しており、位置関係からも住居跡や掘立柱建物跡などの可能性が高いが、確認が得られなかったため、単独のピットとして記録した。この4本を図示し、その他のピットは表にて報告する。

54～56・86号ピット

遺 構 (第57図、図版8-3)

[位 置] (B-6) グリッド。

[検出状況] 3区中央西寄りで検出された。調査区内を縦断する大きな攪乱に切られている。

[構 造] 平面形：円形のピットが、1間×1間の正方形に並ぶ。断面形：ピットの壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模：径40cm前後/深さ最深95cm(55号ピット)。ピット間は、55-56号・56-86号間が2.9m、86-54号・54-55号間が2.6mである。主軸方位：ほぼ真北を指す。

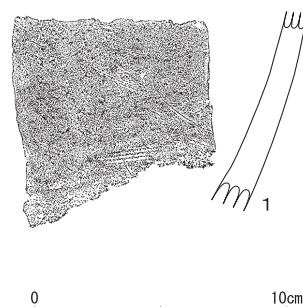
[覆 土] 最大で3層に分層したが、黒褐色土が主体である。

[遺 物] 本遺構に伴うものとして、86号ピットから壺胴部1点が出土している。

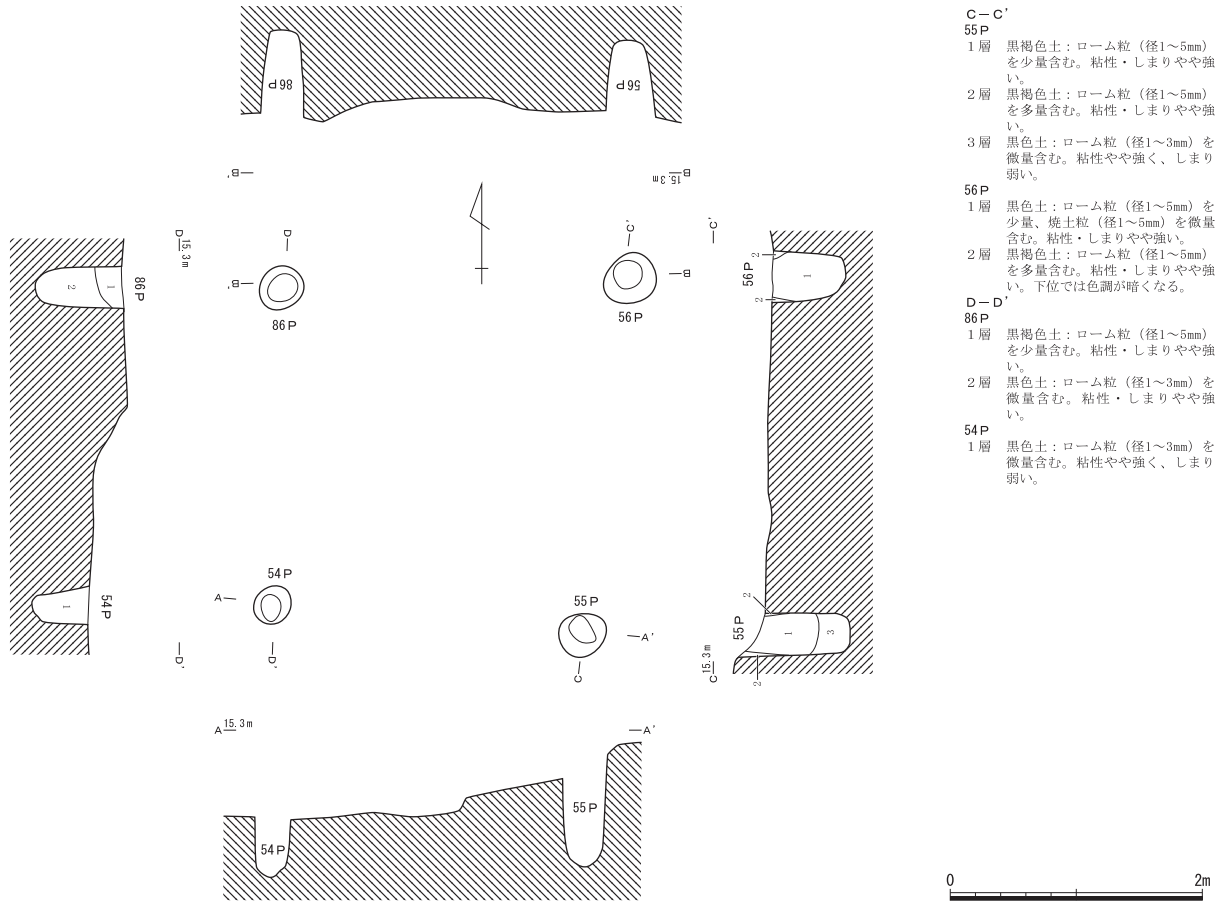
[時 期] 出土遺物と覆土の様子から、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

遺 物 (第56図、第19表、図版14-3)

1は壺の胴部である。ヘラミガキされているが、消し切れていないハケメ調整が所々で見られる。



第 56 図 86 号ピット出土遺物 (1/3)



C-C'
 55 P
 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 3層 黒色土：ローム粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
 56 P
 1層 黒色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、焼土粒（径1～5mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。下位では色調が暗くなる。
 D-D'
 86 P
 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 2層 黒色土：ローム粒（径1～3mm）を微量含む。粘性・しまりやや強い。
 54 P
 1層 黒色土：ローム粒（径1～3mm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。

第57図 54～56・86号ピット (1/60)

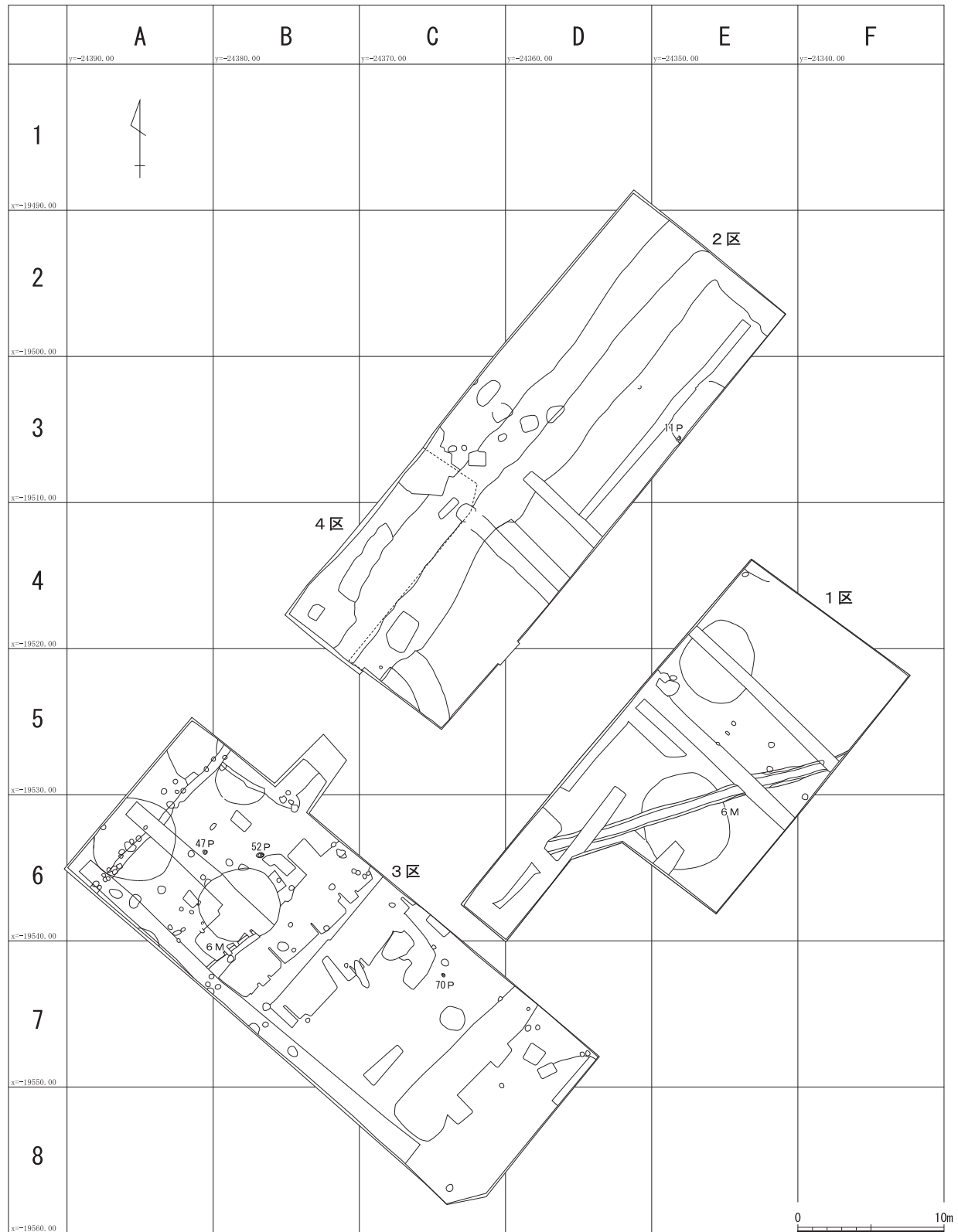
遺物番号	器種	遺存部位	口径器高底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
1	壺	胴部破片	—	下層	外面ハケメ・ヘラミガキ/内面ヘラナデ	細粗砂粒多量/小石微量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色

第19表 86号ピット出土遺物一覧

遺構番号	グリッド	調査区	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物 (数字は点数)	切り合い 旧→新	備考
1 P	E-5	1	楕円形	46	31	21	壺 1	—	
6 P	E-5	1	円形	41	38	77	—	—	不明/9 Pと関連?
9 P	F-5	1	円形	43	41	76	—	→6 M	不明/6 Pと関連?
15 P	C-3	2	楕円形	63	43	52	甕 1・高坏 1	—	
21 P	A-6	3	円形	36	[27]	[22]	—	588 Y→	焼土粒含む
35 P	A-6	3	楕円形	55	44	57	—	→52 M	
40 P	A・B-6	3	楕円形	54	[26]	23	甕 1	—	
48 P	A-6	3	円形	33	32	46	—	—	柱痕?
54 P	B-6	3	円形	32	28	[46]	—	—	柱穴? / 54～56・86 Pは掘立柱建物跡?
55 P	B-6	3	円形	38	35	95	—	—	柱穴? / 54～56・86 Pは掘立柱建物跡?
56 P	B-6	3	円形	43	38	[61]	—	—	柱穴? / 54～56・86 Pは掘立柱建物跡?
80 P	A-6	3	楕円形	36	26	68	—	—	柱穴?
86 P	B-6	3	円形	37	33	68	縄文土器 2・壺 1	—	柱穴? / 54～56・86 Pは掘立柱建物跡?
93 P	A-6	3	楕円形	33	26	43	—	—	漸移層除去後確認/柱穴?

第20表 弥生時代後期～古墳時代前期ピット一覧

第4節 古墳時代後期～奈良・平安時代



第58図 古墳時代後期～奈良・平安時代遺構分布図 (1/400)

(1) 概要

古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構として、溝跡1条・ピット4本を調査した。遺物は、土師器55点・須恵器52点が出土している。このうち遺構内から出土したものは7点で（6号溝跡・11号ピット）、その他は、表土や攪乱、当該期以外の遺構から出土したものである。

(2) 溝跡

6号溝跡

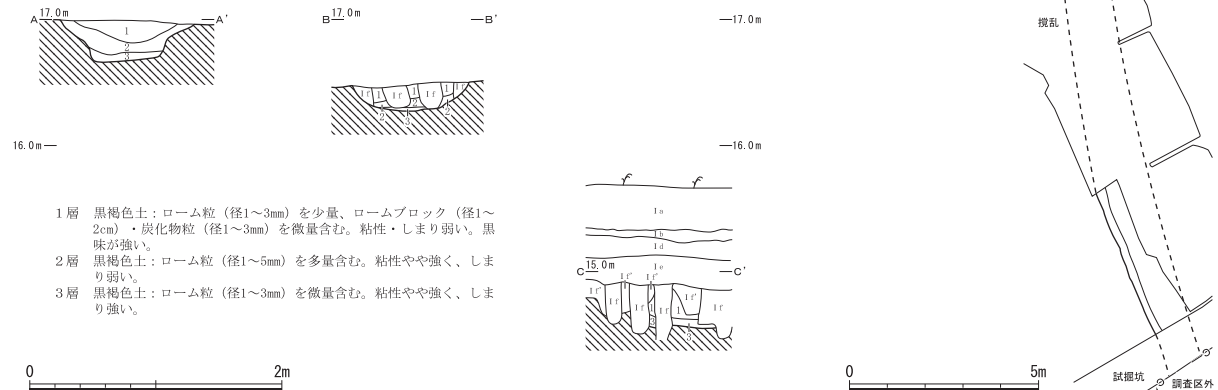
遺構（第59図、図版8-4・5）

位置（A～F-5～7）グリッド。

検出状況 1区の東側に接する区画整理事業第8IV地点（平成6年度）で調査された溝跡の延長部分である。1区南側から3区北側を、東西方向に延びている。攪乱の影響が大きく、特に3区では大半が削平されており、確認できたのは西端部分のみである。東西両端は調査区外へ至る。

構造 断面形：逆台形。一部では中位に稜をもつ。底面はほぼ平坦である。規模：調査区内での長さは47m。上幅93cm／下幅55cm。深さは最深部で30cm前後。東端底面の標高は16.7m、西端では14.6mで、東西両端で約2mの比高差がある。走行方位：N-71°-E。

覆土 黒褐色土を主体とし、3層に分層した。全体的に黒味が強い。



第59図 6号溝跡（1/60・1/200）

第3章 検出された遺構と遺物

[遺物] 本遺構に伴うものとして、土師器3点・須恵器1点がある。

[時期] 出土遺物と隣地調査の所見より、奈良・平安時代と考えられる。

遺物 (第21表、図版14-4)

いずれも小片のため、写真での報告とした。1～3は「落合型」の坏の細片で、3は本溝を切る攪乱から出土したものである。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	特徴・調整	胎土	色調
1	土師器坏	口縁部破片	1区北側中層	「落合型」/ヨコナデ/赤彩	細砂粒微量	内外面：淡赤褐色
2	土師器坏	口縁部破片	1区北側下層	「落合型」/ヨコナデ/赤彩	細砂粒微量	内外面：淡赤褐色
3	土師器坏	口縁部破片	1区南側攪乱	「落合型」/ヨコナデ/赤彩	細砂粒微量	内外面：淡赤褐色
4	土師器甕	胴部破片	1区北側下層	外面ヘラケズリ	細粗砂粒微量	内外面：明赤褐色
5	須恵器坏	口縁部破片	1区中央下層	ヨコナデ	細砂粒微量	内外面：明灰褐色

第21表 6号溝跡出土遺物一覧

(3) ピット

ピットについては詳細が不明なものが多いが、出土遺物や覆土の様子から、4本(第58図、第23表)を当該期のものとした。このうち、遺物が出土した11号ピットを図示する。

11号ピット

遺構 (第60図、図版8-6)

[位置] (E-3) グリッド。

[検出状況] 2区北側東壁際で検出された。583号住居跡を切る。

[構造] 平面形：円形。断面形：壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模：長軸35cm/短軸現況27cm/深さ38cm。

[覆土] 黒味の強い黒褐色土が主体で、3層に分層した。柱痕跡がみられる。

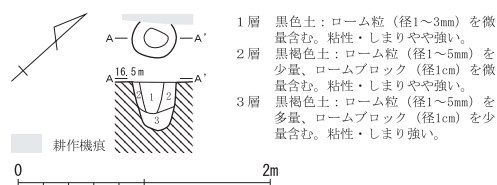
[遺物] 本遺構に伴うものとして、土師器の甕3点が出土している。

[時期] 出土遺物と覆土の様子から、古墳時代後期～奈良・平安時代と考えられる。

遺物 (第22表、図版14-5)

土師器3点のうち、2点を写真で示す。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	調整	胎土	色調
1	土師器甕	胴部破片	上層	外面ヘラケズリ	細砂粒少量	内外面：明褐色
2	土師器甕	胴部破片	上層	外面ヘラケズリ	細砂粒少量	内外面：暗褐色



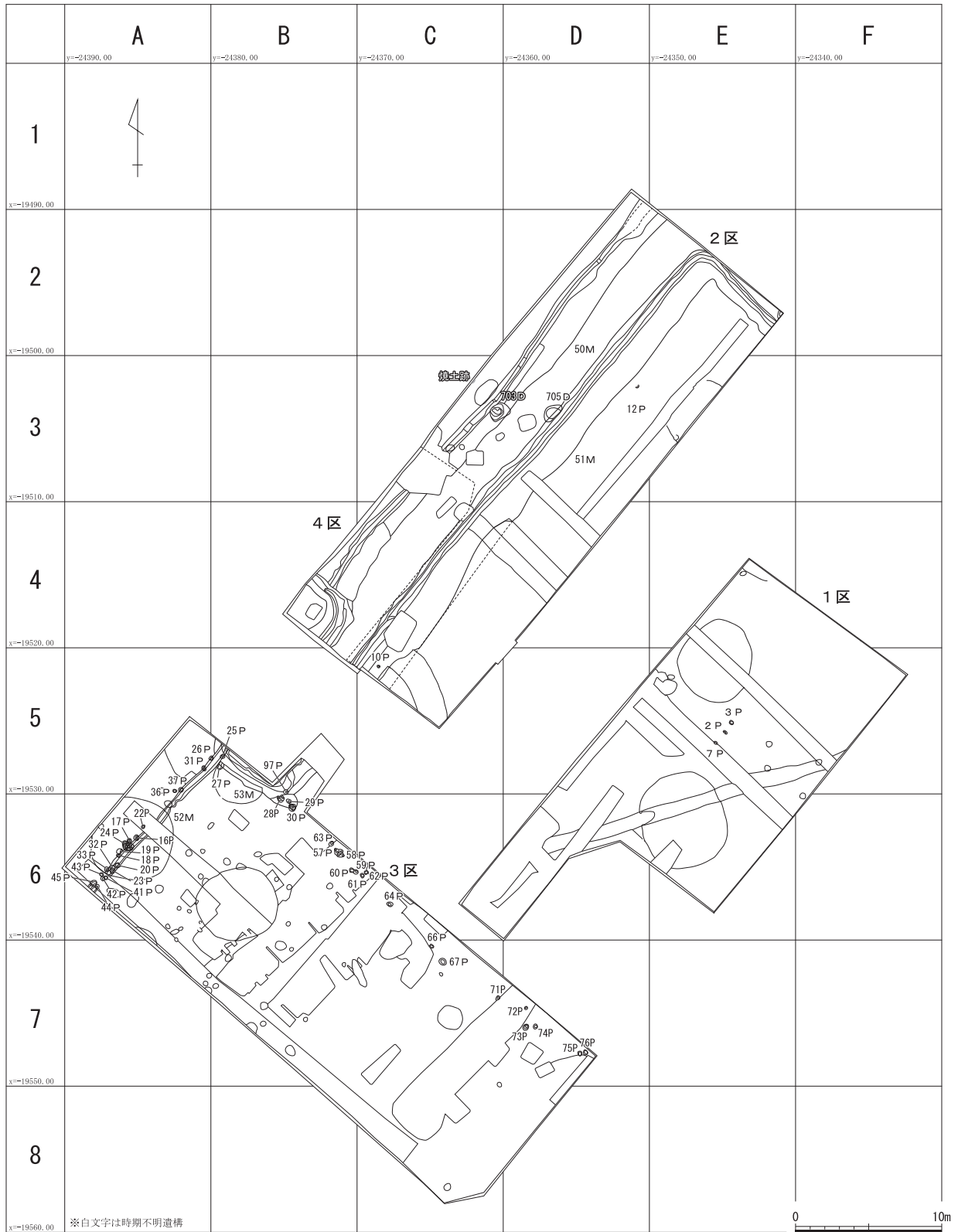
第22表 11号ピット出土遺物一覧

第60図 11号ピット(1/60)

遺構番号	グリッド	調査区	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物 (数字は点数)	切り合い 旧→新	備考
11 P	E-3	2	円形	35	[27]	38	土師器甕 3	583 Y→	柱痕あり
47 P	A-6	3	円形	31	29	14	-	-	
52 P	B-6	3	楕円形	54	34	34	-	-	
70 P	C-7	3	楕円形	28	20	25	-	-	上面に焼土粒やや多量

第23表 古墳時代後期～奈良・平安時代ピット一覧

第5節 中世以降



第61図 中世以降・時期不明遺構分布図 (1/400)

(1) 概要

中世以降の遺構として、溝跡4条・土坑1基・ピット46本を調査した。このうち、溝跡(50・51・53号溝跡)は一連のものと思われる。遺物は、磁器5点・陶器19点・炆器1点・土器1点・瓦1点・金属製品2点(銭貨)・石製品1点が出土している。このうち当該期の遺構内から出土したものは3点(50・51号溝跡)で、そのほかは、表土や攪乱、当該期以外の遺構から出土したものである。明確に中世といえるものは出土していない。

(2) 溝跡

50号溝跡

遺構 (第62図、図版8-7・9-1・9-2)

[位置] (B~E-1~4) グリッド。

[検出状況] 2・4区の西端を南北方向に延びている。南北両端は調査区外へ至る。706号土坑を切っている。

[構造] 断面形：底面から中位までほぼ垂直に立ち上がり、上位は外側に向かって広がるいわゆる箱葉研形。規模：調査区内での長さは約37m。上幅不明/下幅約30cm。確認面からの深さは最深部で70cm前後。北端底面の標高は15.4m、南端では14.3mで、約1mの比高差がある。南端では直角に折れる一段低い溝(底面標高14.0m)によって切られるような状態である。走行方位：N-40°-E。

[覆土] 黒褐色土を主体とし、各地点で7層ほどに分けられるが、中位に大粒のロームブロックが多量に含まれる層が東壁から流れ込むように堆積しており、この層を挟んで上層がやや明るめの黒褐色土、下層がローム粒の少ない黒褐色土の三層に大別できる。

[遺物] 縄文土器・弥生土器の他、須恵器3点と陶器2点が出土している。

[時期] 形状からは、館の周囲に巡らされた溝とも考えられるが、覆土からは中世のものはみられず、近世遺物が出土している。現段階では中近以降としておきたい。

遺物 (第24表、図版14-6)

須恵器と陶器を写真で示す。4・5の陶器は、18世紀後半以降の瀬戸美濃系徳利である。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	調整	胎土	色調
1	須恵器蓋	口縁部破片	—	ヨコナデ	細砂粒微量	内外面：灰色
2	須恵器壺裏	口縁部破片	—	ヨコナデ	細砂粒微量	内外面：灰色
3	須恵器裏	胴部破片	—	外面タタキ	細砂粒微量	内外面：灰色

遺物番号	種別	器種	遺存部位	出土位置	特徴	推定産地	時期
4	陶器	徳利	体部破片	—	鉄釉	瀬戸美濃	18世紀後半
5	陶器	徳利	底部破片	北側中層	鉄釉・底部ふき取り	瀬戸美濃	18世紀後半

第24表 50号溝跡出土遺物一覧

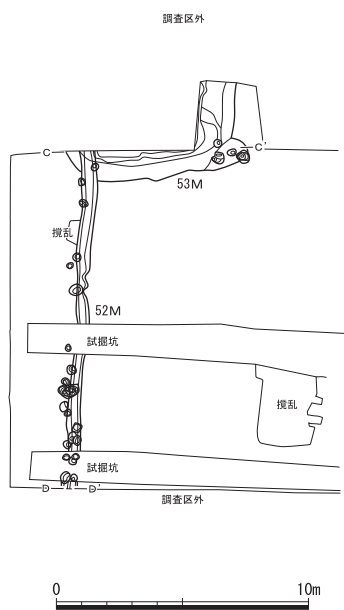
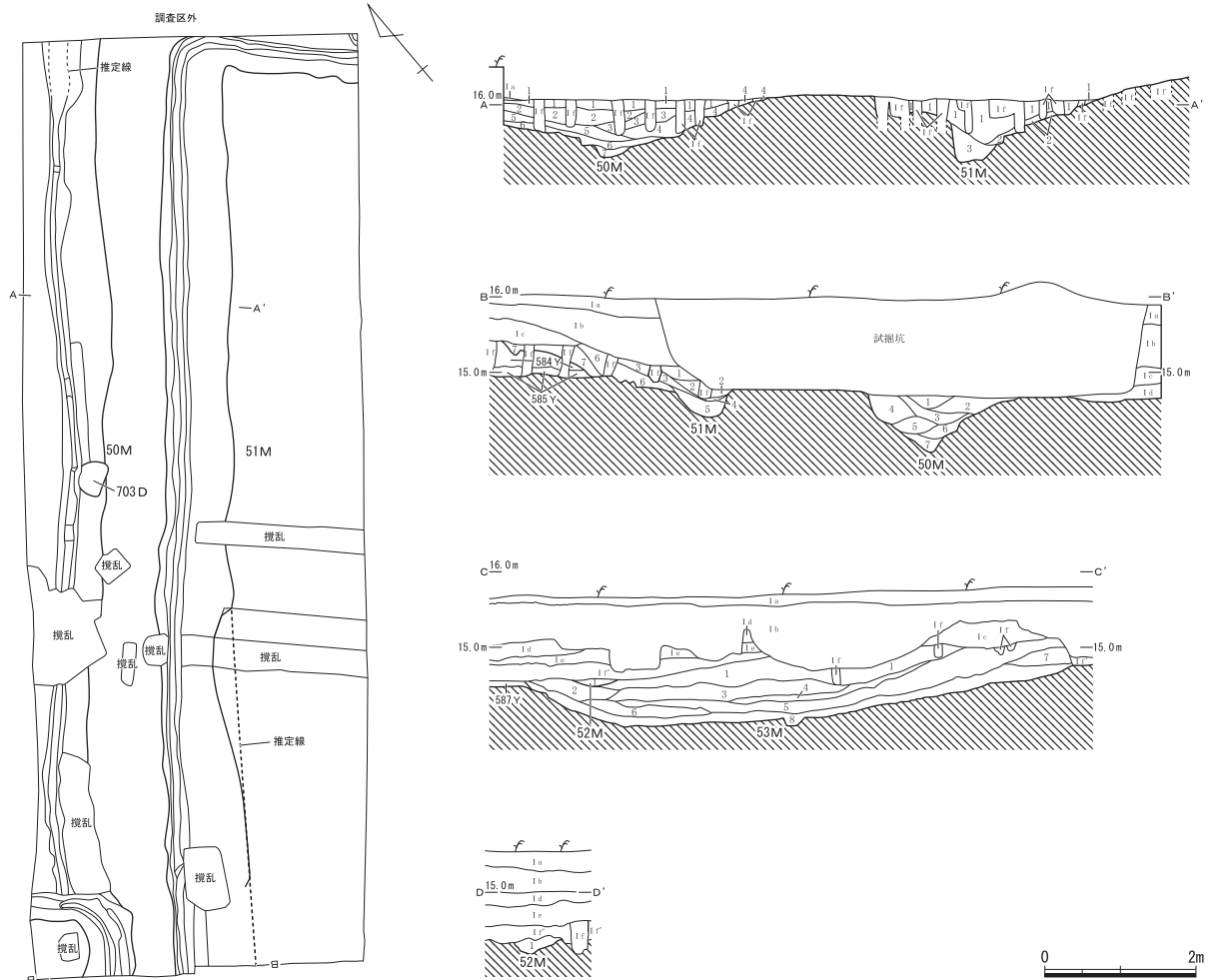
51号溝跡

遺構 (第62図、図版8-7~9-1・9-3・9-4)

[位置] (B~E-2~5) グリッド。

[検出状況] 2・4区を、50号溝跡の東側に並行して走っている。北端では東に向かってほぼ直角に屈曲しており、端部はそのまま調査区外へ至る。南端も調査区外へ延びている。584号住居跡を切り、705号土坑と切り合う。

[構造] 断面形：50号溝跡と同様の箱葉研形。西壁上位はやや傾斜が強い。規模：調査区内での長さは約37m。上幅約2.5m/下幅約30cm。確認面からの深さは最深部で1m前後。北端底面の標高は



- A-A' (50M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまり弱い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまり弱い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまり弱い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～10cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。51Mの1層に似る。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量含む。粘性・しまり弱い。
- A-A' (51M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～3mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。50Mの4層に似る。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を微量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- B-B' (50M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
- B-B' (51M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～5cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～5cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 3層 暗褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 暗褐色土：ローム粒（径1～3mm）を多量含む。粘性弱く、しまり強い。砂質土。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を多量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
- C-C' (52M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまり弱い。やわらかく、ポソポソしている。
- C-C' (53M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1cm）を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 2層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまりやや強い。
 - 4層 土に多い黄褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～3cm）を少量含む。粘性弱く、しまり強い。砂質土。
 - 5層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
 - 6層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～5cm）を少量含む。粘性・しまり弱い。
 - 7層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）・ロームブロック（径1～3cm）を多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
 - 8層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を多量、ロームブロック（径1～5cm）を少量含む。粘性やや強く、しまり弱い。
- D-D' (52M)**
- 1層 黒褐色土：ローム粒（径1～5mm）を少量、ロームブロック（径1cm）を微量含む。粘性・しまり弱い。やわらかく、ポソポソしている。

第62図 50～53号溝跡 (1/300・1/100)

第3章 検出された遺構と遺物

15.3m、南端では 14.4m で、約 1 m の比高差がある。また、屈曲した東端底面の標高は 15.8m で、屈曲部から東に向かって徐々に高くなっている。走行方位：N - 40° - E。

[覆 土] 黒褐色土を主体とし、多いところで 7 層ほどに分けられるが、大きくみると 3 層に大別できる。上層はロームブロックが多量に含まれ、中層は暗褐色を呈する砂質土が堆積しており、下層にはまたロームブロックを多く含む土が堆積している。

[遺 物] 縄文土器・弥生土器の他、須恵器 1 点と銭貨 1 点が出土している。

[時 期] 50 号溝跡との関連するものと思われるため、中世以降と考えられる。

遺 物 (第 63 図、第 25 表、図版 15 - 1)

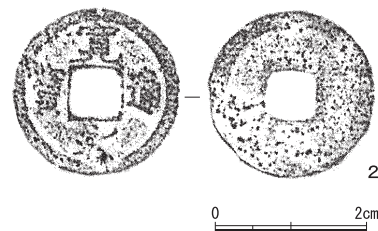
1 は須恵器環の破片である。小片のため写真のみ掲載する。

2 は寛永通宝(新寛永)である。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	調整	胎土	色調
1	須恵器環	口縁部破片	—	ヨコナデ	細砂粒微量	内外面：暗灰色

遺物番号	種別	材質	出土位置	外径	孔径	最大厚	重量	備考
2	銭貨	銅	上層	2.2	0.7	0.1	1.8	新寛永

第 25 表 51 号溝跡出土遺物一覧



第 63 図 51 号溝跡出土遺物 (1/1)

52 号溝跡

遺 構 (第 62 図、図版 9 - 5)

[位 置] (A・B - 5・6) グリッド。

[検出状況] 3 区の西側を南北方向に延びており、両端は調査区外へ至る。53 号溝跡・586 ~ 588 号住居跡を切っている。

[構 造] 断面形：皿状。規模：調査区内での長さは約 37m。上幅約 2.5m / 下幅約 30cm。確認面からの深さは最深部で 10cm 前後。北端底面の標高は 14.5m、南端では 14.3m で、南へ向かって若干低くなっている。走行方位：N - 43° - E。

[覆 土] やや明るめの黒褐色土で、軟質である。

[遺 物] 縄文土器・弥生土器の他、土師器 1 点・須恵器 1 点が出土している。

[時 期] 中世以降。

[備 考] 位置や走行方位から、50 号溝跡との関連が考えられるが、詳細は不明である。また、本遺構に沿って、無数のピットが点在しており、これらは本遺構と関連がある可能性が高い。

遺 物 (第 26 表、図版 15 - 2)

土師器と須恵器を、写真で掲載した。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	調整	胎土	色調
1	土師器甕	胴部破片	中央	外面ヘラケズリ	細砂粒少量	内外面：赤褐色
2	須恵器甕	胴部破片	南側	外面タタキ	細砂粒微量	内外面：灰色

第 26 表 52 号溝跡出土遺物一覧

53 号溝跡

遺 構 (第 62 図、図版 9 - 6)

[位 置] (B - 5) グリッド。

[検出状況] 3 区北西隅に位置する。北側は調査区外へ至る。52 号溝跡に切られ、586・587 号住居跡を切っている。

[構造] 断面形：皿状。規模：6.4 × 3.6mの範囲で確認。確認面からの深さは約50cm。おそらく底面は調査区外にあるものと考えられ、緩く立ち上がる壁の上位を確認したと思われる。走行方位：N - 53° - W。

[覆土] 黒褐色土を主体として8層に分層した。中位には明るい色調の砂質土が堆積しており、全体的に、51号溝跡と類似している。

[遺物] 縄文土器・弥生土器の他、時期不明の土器片が数点出土している。

[時期] 中世以降。

[備考] 覆土の様子は51号溝跡と類似しており、同遺構と50号溝跡をつなぐような位置関係である。

(2) 土坑

705号土坑

遺構 (第64図、図版9-7)

[位置] (D-3) グリッド。

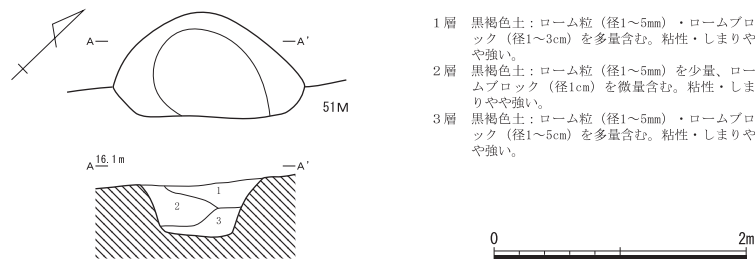
[検出状況] 2区中央で検出された。51号溝跡と切り合うが、新旧は確認できなかった。

[構造] 平面形：楕円形と推定される。断面形：壁面はやや強い傾斜をもって立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸152cm/短軸現況83cm/深さ41cm。長軸方位：N - 43° - E。

[覆土] 黒褐色土を主体とし、3層に分けられる。ロームブロックを多く含む。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から、中世以降とした。



第64図 705号土坑 (1/60)

(3) ピット

前時代までに報告したピット以外のは46本あり（第61図、第28表）、主に覆土の様子から中世以降と判断した。これらの大半が52号溝跡と53号溝跡と切り合う位置、または、特に3区北側にみられるような溝跡と直行する方位に並んで検出されており、溝跡との関連性が指摘できそうである。

ピットから出土した遺物は少ないが（第28表参照、表中の壺・甕は弥生時代後期～古墳時代前期相）、24号ピット（図版9-8）から石製品（砥石・砥沢産）と礫（緑泥片岩）が出土しているので、写真で報告する（第27表、図版15-3）。

遺物番号	種別	材質	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量
1	砥石	凝灰岩	上層	12.2	3.3	2.8	166.2
2	礫	緑泥片岩	中層	10.5	7.9	1.0	217.1

第27表 24号ピット出土遺物一覧

第3章 検出された遺構と遺物

遺構番号	グリッド	調査区	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物 (数字は点数)	切り合い 旧→新	備考
2 P	E-5	1	(楕円形)	[32]	[14]	13	—	—	灰褐色土
3 P	E-5	1	楕円形	30	25	25	—	—	灰褐色土
7 P	E-5	1	(楕円形)	[30]	[19]	13	—	—	灰褐色土 (2 P 似)
10 P	C-5	2	円形	21	19	10	—	? 584 Y・585 Y・51 M	切り合い新旧不明/ロームブロック多量
12 P	D-3	2	円形	25	[14]	9	—	—	黒褐色土
16 P	A-6	3	円形	36	36	[75]	—	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/深いため下部未完掘(30cmほどで地山あたる)/52 M関連?
17 P	A-6	3	円形	31	27	[37]	—	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
18 P	A-6	3	楕円形	30	23	48	—	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
19 P	A-6	3	円形	38	36	74	—	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
20 P	A-6	3	隅丸方形	35	31	[23]	—	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
22 P	A-6	3	楕円形	28	22	[44]	—	588 Y→	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
23 P	A-6	3	楕円形	39	31	85	甕1・礫3	588 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
24 P	A-6	3	不整楕円形	82	58	83	壺1・礫3 (内緑泥片岩1)	588 Y・32 P→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
25 P	B-5	3	楕円形	35	26	[30]	—	→53 M→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?
26 P	A・B-5	3	不整楕円形	30	26	43	—	587 Y→/→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
27 P	B-5	3					—	586 Y→/→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?
28 P	B-6	3	不整形	47	45	[54]	—	→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?
29 P	B-6	3	楕円形	35	25	[24]	—	→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?
30 P	B-6	3	不整形	52	52	77	—	→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?
31 P	A-5	3	楕円形	36	29	43	—	587 Y→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
32 P	A-6	3	楕円形	47	30	[54]	—	588 Y・33 P→/→24 P→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
33 P	A-6	3	円形	31	30	[29]	壺2・甕2	588 Y→/→32 P→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
36 P	A-5	3	楕円形	27	22	33	—	—	中世以降?
37 P	A-5	3	円形	33	32	25	—	→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
41 P	A-6	3	円形	29	24	22	—	42 P→/→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
42 P	A-6	3	楕円形	30	[22]	43	—	→41 P→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
43 P	A-6	3	楕円形	29	24	26	—	→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
44 P	A-6	3	円形	29	26	45	—	→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
45 P	A-6	3	楕円形	48	38	51	—	→52 M	黒褐色土・ロームブロック多量/52 M関連?
57 P	B-6	3	不整形	57	51	[62]	—	58 P→	
58 P	B-6	3	不整形	42	[23]	[51]	—	→57 P	
59 P	B-6	3	円形	32	30	[43]	—	60 P→	
60 P	B-6	3	(楕円形)	31	[27]	[8]	—	→59 P	
61 P	C-6	3	不整楕円形	32	24	[44]	—	—	
62 P	C-6	3	円形	28	23	[24]	—	—	
63 P	B-6	3	楕円形	38	29	56	—	—	
64 P	C-6	3	楕円形	42	31	[52]	—	—	
66 P	C-7	3	不整形	29	26	12	—	—	
67 P	C-7	3	楕円形	53	44	12	—	—	
71 P	C-7	3	楕円形	33	24	41	—	—	
72 P	D-7	3	楕円形	23	20	[9]	—	—	
73 P	D-7	3	楕円形	45	37	66	—	—	
74 P	D-7	3	楕円形	35	29	28	甕1	—	
75 P	D-7	3	楕円形	32	28	17	—	83 Y→	
76 P	D-7	3	楕円形	36	30	10	—	—	
97 P	B-5	3		31	31	[41]	—	→53 M	黒褐色土・ロームブロック多量/53 M関連?

第28表 中世以降ピット一覧

第6節 時期不明の遺構

遺物が出土せず、覆土からも時期の特定が困難なものとして、焼土跡1基・土坑1基をあげておく(第61図参照)。

(1) 焼土跡

焼土跡

遺 構 (図版10-1)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 2区中央西壁際で検出された。50号溝跡に切られており、被熱赤化範囲のみを確認した。

規模は、現況長軸 51cm・短軸現況 12cmである。被熱は深さ約 5 cmほどまで及ぶ。

[遺物] なし。

[備考] 溝跡に切られていることから中世以前と考えられる。住居跡などの可能性もあるが、調査区壁断面にも掘り込みや覆土の痕跡は確認できず、周囲にはその他の施設も確認できなかった。詳細は不明であるが、単独の遺構として位置の記録を残した（第 61 図）。

(2) 土 坑

703 号土坑

遺 構（第 65 図、図版 10 - 2）

[位 置]（C - 3）グリッド。

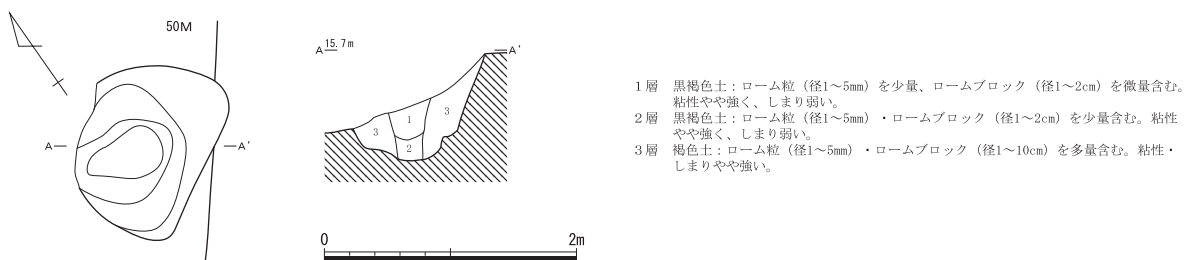
[検出状況] 2 区中央で検出された。50 号溝跡と切り合うが、新旧は確認できなかった。

[構 造] 平面形：不整形。断面形：壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面にはピット状の掘り込みを有する。規模：長軸 138cm/短軸現況 99cm/深さ 85cm。長軸方位：N - 45° - E。

[覆 土] 3 層に分けられ、柱痕跡状の堆積を示している。

[遺 物] なし。

[備考] 覆土に柱痕跡状の土層が認められたため、対応する遺構がないか周辺を精査したが、何も確認できなかったため、単独の遺構として扱った。



第 65 図 703 号土坑 (1/60)

第 7 節 遺構外出土遺物

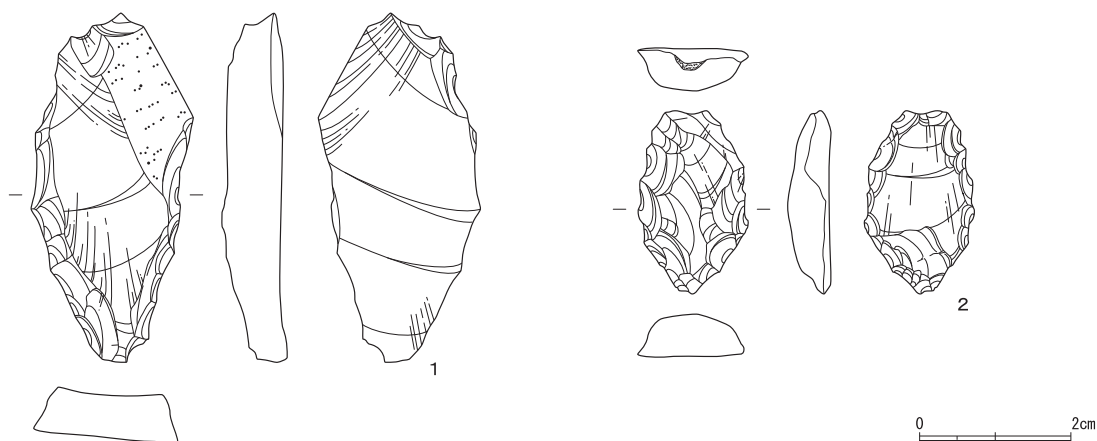
(1) 概要

ここでは、表土や攪乱、包含層、そして、遺構内出土ではあるが、明らかに他の時期の混入品と考えられる遺物を対象としている。なお、奈良・平安時代と中世以降の遺物については微細な破片が多く、図化するのが困難なため、写真掲載のみとした。

(2) 旧石器時代

遺構外から出土した旧石器時代の遺物は、以下の 2 点である（第 66 図、第 29 表、図版 15 - 4）。

1 はナイフ形石器、2 は楔形石器で、両者とも黒曜石である。



第 66 図 遺構外出土遺物 旧石器時代 (2/3)

遺物番号	種別	石材	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴
1	ナイフ形石器	黒曜石	A-7 攪乱	[4.6]	2.1	0.6	6.8	二側縁加工
2	楔形石器	黒曜石	A-6 漸移層	2.4	1.4	0.6	2.3	

第 29 表 遺構外出土遺物一覧 (旧石器時代)

(3) 縄文時代

遺構外から出土した縄文時代の遺物は、土器 225 点 (前期前半 37 点・諸磯式 2 点・阿玉台式 23 点・勝坂式 16 点・加曾利 E 式 21 点・中期型式不明 83 点・時期不明 43 点)、石器 17 点 (石鏃 2・打製石斧 5・剥片 10 点) である。これらのうち、土器 32 点・石器 4 点を図示した (第 67 図、第 30 表、図版 15-5・16-1)。

3・4 は前期前半に比定される。3 の口縁部は縄文が施され、4 の胴部片は羽状縄文がみられる。いずれも胎土に繊維を含んでいる。

5・6 は前期諸磯式である。5 は半截竹管状工具による押引文の区画内に縄文が施され、6 には半截竹管状工具による平行沈線文がみられる。

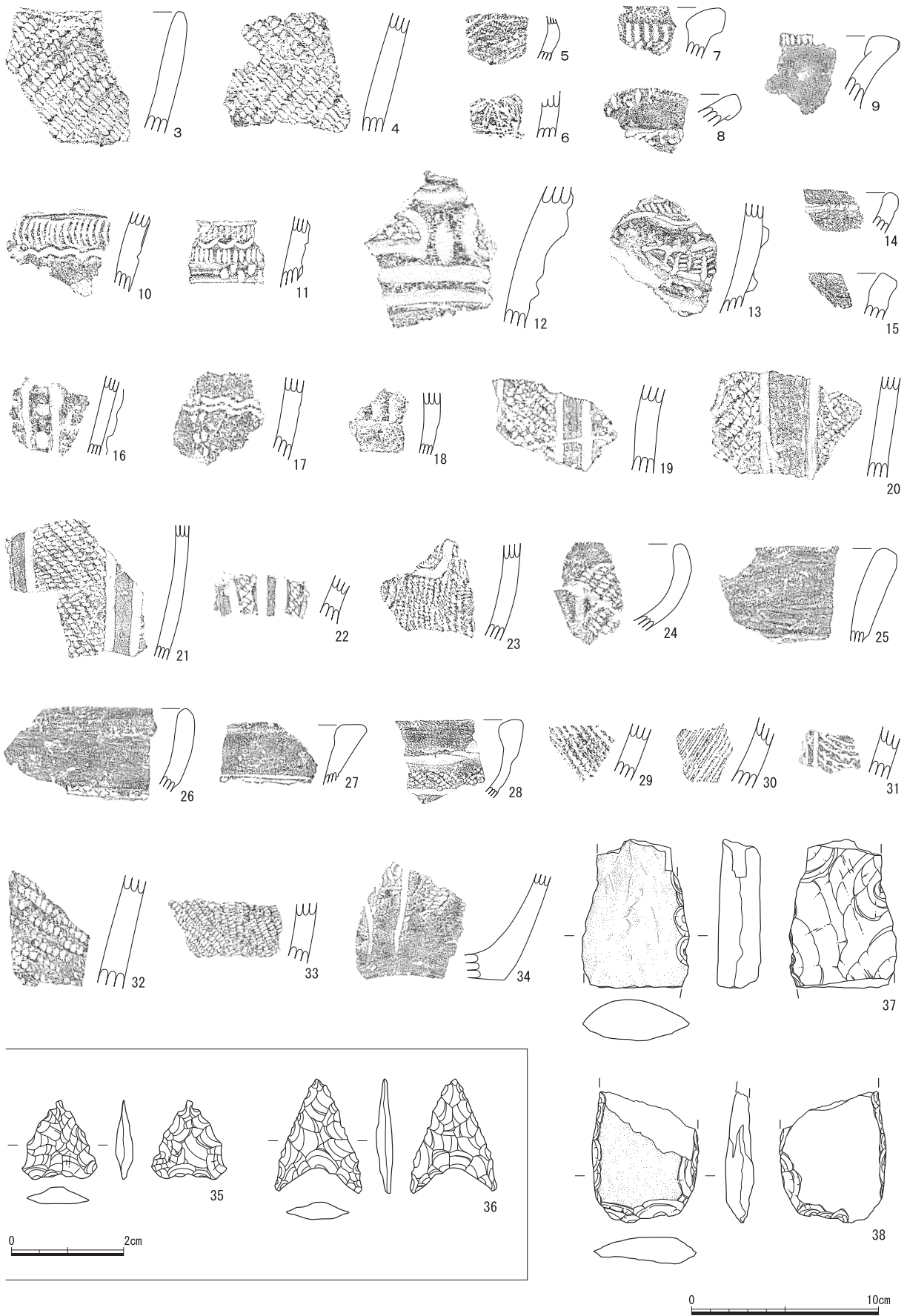
7～13 は中期勝坂式に比定される。7～9 は口縁部である。7・8 には角押文がみられ、9 の口唇部にはキザミが施されている。10～13 は、胴部である。10 は、角押文と波状沈線文が横位に施されている。11 は、交互刺突によって刻まれた隆帯が横位に付され、その上位には角押文と半截竹管状工具による爪形文が施されている。12・13 は、隆帯による区画がみられる。

14～18 は中期阿玉台式である。胎土には金雲母が含まれている。14・15 は口縁部で、16～18 は胴部である。16 には垂下する隆帯、17 には垂下する半截竹管状工具による押し引きがみられ、16・18 は輪積痕がヒダ状に残されている。

19～23 は中期加曾利 E 式に比定される。地文には縄文が施され、19～22 の縦位沈線区画内の縄文は擦り消されている。

24～34 は中期に属するものである。24～28 は口縁部で、29～33 は胴部である。34 は底部で、縄文の地文に 2 本の沈線文が垂下している。

35～38 は石器である。35 は黒曜石、36 はチャート製の石鏃である。37・38 は、打製石斧である。



第67図 遺構外出土遺物 縄文時代 (1/1・1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調	時期・型式
3	深鉢	口縁部破片	A-6表土	縄文 LR	細砂粒微量／繊維少量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	前期前半
4	深鉢	胴部破片	588 Y	羽状縄文 RL-LR	細砂粒微量／繊維少量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	前期前半
5	深鉢	胴部破片	589 Y	押引文区画内縄文 RL	雲母多量／細粗砂粒微量	良好	外面：赤褐色／内面：灰褐色	前期諸磯式
6	深鉢	胴部破片	584 Y	平行沈線文	細砂粒少量／小石少量	良好	外面：暗赤褐色／内面：暗赤褐色	前期諸磯式
7	深鉢	口縁部破片	589 Y	角押文	細粗砂粒多量	良好	外面：明赤褐色／内面：明赤褐色	中期勝坂式
8	深鉢	口縁部破片	582 Y	波状口縁？／角押文	細砂粒少量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期勝坂式
9	深鉢	口縁部破片	588 Y	口唇部にキザミ	細砂粒少量	良好	外面：暗赤褐色／内面：暗赤褐色	中期勝坂式
10	深鉢	胴部破片	589 Y	角押文／波状沈線文	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期勝坂式
11	深鉢	胴部破片	A-7攪乱	隆帯上交互キザミ／角押文／爪形文	細砂粒微量	良好	外面：暗灰褐色／内面：暗灰褐色	中期勝坂式
12	深鉢	胴部破片	D-2表土	隆帯脇沈線文による区画内縄文 RL	細砂粒少量	良好	外面：暗褐色／内面：暗褐色	中期勝坂式
13	深鉢	胴部破片	D-2表土	隆帯区画内集合沈線文	細砂粒少量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	中期勝坂式
14	深鉢	口縁部破片	588 Y	押引文	細粗砂粒・雲母多量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期阿玉台式
15	深鉢	口縁部破片	589 Y		細粗砂粒・雲母多量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期阿玉台式
16	深鉢	胴部破片	581 Y	隆帯上交互キザミ／ヒダ状圧痕	雲母多量／細粗砂粒少量	良好	外面：明赤褐色／内面：暗褐色	中期阿玉台式
17	深鉢	胴部破片	試掘	押引文／波状沈線文	細粗砂粒・雲母多量	良好	外面：明赤褐色／内面：暗褐色	中期阿玉台式
18	深鉢	胴部破片	588 Y	ヒダ状圧痕	細粗砂粒・雲母多量	良好	外面：暗灰褐色／内面：明赤褐色	中期阿玉台式
19	深鉢	胴部破片	588 Y	縄文 LR・沈線間擦り消し	細砂粒微量	良好	外面：明赤褐色／内面：明灰褐色	中期加曾利 E 式
20	深鉢	胴部破片	E-6表土	縄文 RL・沈線間擦り消し	細砂粒少量	良好	外面：暗褐色／内面：暗灰褐色	中期加曾利 E 式
21	深鉢	胴部破片	E-6表土	複節縄文 LRL・沈線間擦り消し	細砂粒少量	良好	外面：明灰褐色／内面：黒褐色	中期加曾利 E 式
22	深鉢	胴部破片	583 Y	縄文 RL・沈線間擦り消し	細砂粒微量	良好	外面：赤褐色／内面：暗灰褐色	中期加曾利 E 式
23	深鉢	胴部破片	589 Y	複節縄文 LRL・沈線間擦り消し	細砂粒・赤色粒子・小石少量	良好	外面：赤褐色／内面：暗褐色	中期加曾利 E 式
24	深鉢	口縁部破片	583 Y	沈線区画内縄文 RL	細粗砂粒少量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期
25	深鉢	口縁部破片	581 Y		細粗砂粒多量	良好	外面：暗褐色／内面：褐色	中期
26	深鉢	口縁部破片	588 Y		細砂粒微量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	中期
27	浅鉢	口縁部破片	50 M		細粗砂粒・雲母微量	良好	外面：赤褐色／内面：赤褐色	中期
28	浅鉢	口縁部破片	D-6表土	横位沈線区画内縄文 RL	細粗砂粒少量	良好	外面：黒灰褐色／内面：黒灰褐色	中期（後期？）
29	深鉢	胴部破片	588 Y	捺糸文	細粗砂粒微量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	中期
30	深鉢	胴部破片	589 Y	条線文	細砂粒微量	良好	外面：明赤褐色／内面：明灰褐色	中期
31	深鉢	胴部破片	D-6表土	沈線文・肋骨文	細砂粒少量	良好	外面：暗灰褐色／内面：暗灰褐色	中期
32	深鉢	胴部破片	588 Y	縄文 RL	細砂粒少量	良好	外面：暗灰褐色／内面：明褐色	中期
33	深鉢	胴部破片	B-6表土	縄文 RL	細砂粒少量	良好	外面：明褐色／内面：暗灰褐色	中期
34	深鉢	底部破片	588 Y	縄文 RL／縦位沈線文	細砂粒少量	良好	外面：明褐色／内面：明褐色	中期

遺物番号	種別	石材	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量
35	石鏃	黒曜石	588 Y	1.4	1.4	0.3	0.4
36	石鏃	チャート	589 Y	2.1	1.6	0.3	0.7
37	打製石斧	砂岩	C-5攪乱	[8.0]	5.7	2.2	143.0
38	打製石斧	砂岩	583 Y攪乱	[7.0]	5.7	1.4	66.2

第30表 遺構外出土遺物一覧（縄文時代）

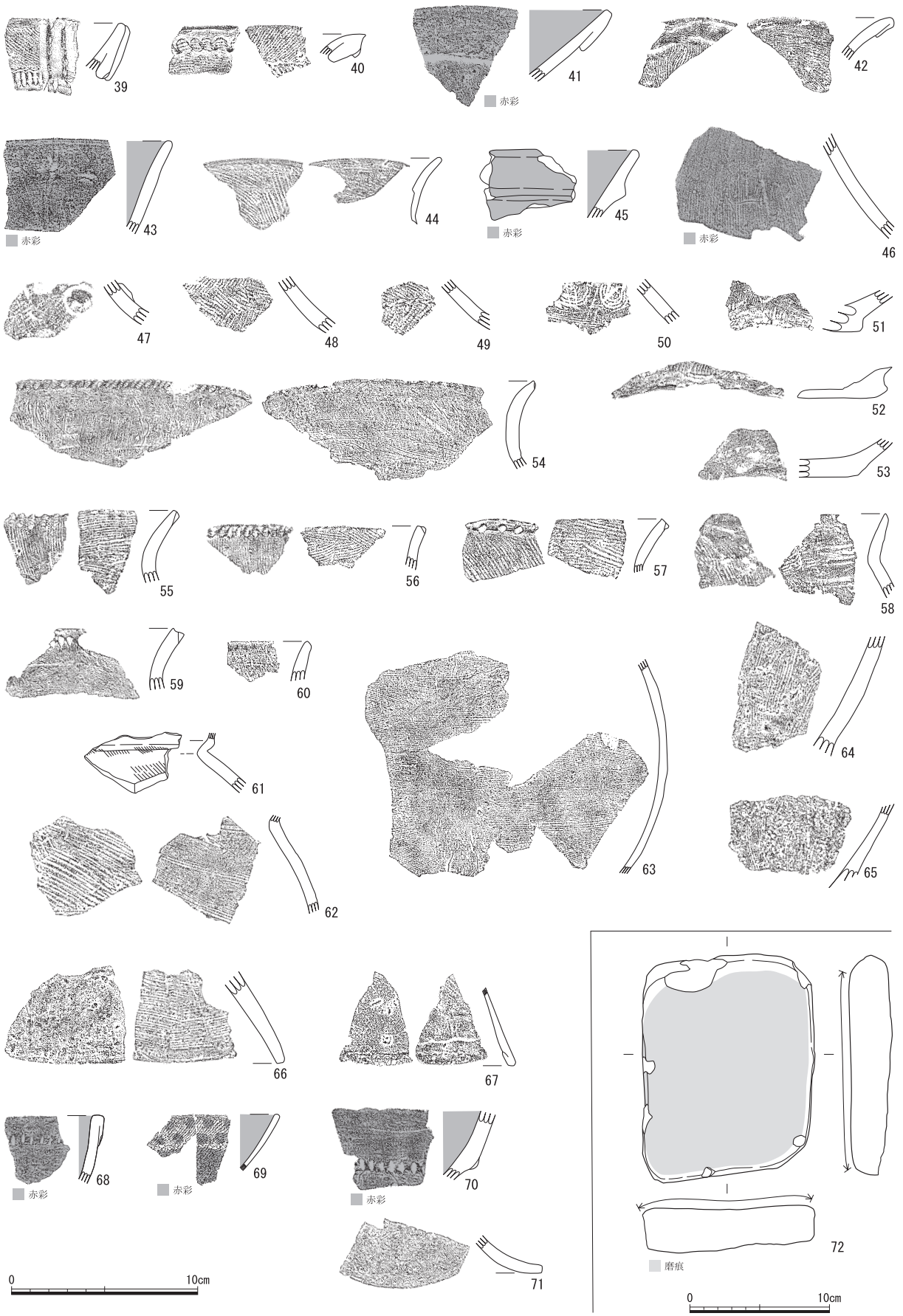
（4）弥生時代後期～古墳時代前期

遺構外から出土した弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は、土器 494 点（壺 291 点・甕 164 点・高坏または鉢 39 点）、石器 1 点（石皿）である。これらのうち、土器 33 点・石器 1 点を図示した（第 68 図、第 31 表、図版 16-2）。

39～45 は壺の口縁部である。39～41 は幅広複合口縁部で、39 の複合部には縄文が施文され、縄文帯の下端部には Z 字状結節文が施される。さらに複合部の下端部はへら状工具により刻まれ、2 本の棒状浮文が付されている。40 の口唇部は鋭角である。複合部上端にはハケ状工具による刻みが施され、内面には縄文と Z 字状結節文がみられる。41 の複合部は無文で、へらミガキされている。42 は幅狭複合口縁、43・44 は単口縁である。45 は二重口縁を呈し、接合部の外面は鏝状に突出しているが、内面は直線的に整形されている。46～50 は壺の胴上部である。46 は赤彩が施されている。47 は縄文帯上に円形浮文が付されている。48 は羽状縄文が施文され、49 は縄文間に S 字状結節文が施されている。50 は櫛描コンパス文と櫛描横線文がみられる東海西部系の土器である。51～53 は壺の底部である。

54～60 は甕の口縁部である。54～58 はハケ、59・60 はナデ調整である。61 は S 字甕の口縁～胴上部である。62～65 はハケ調整された甕の胴部である。66・67 は甕の脚部で、67 の裾部内面には折り返しがみられる。

68・69 は高坏または鉢の口縁部で、69 の縄文帯には円形朱文 2 列多数が付されている。70 は高坏



第 68 図 遺構外出土遺物 弥生時代後期～古墳時代前期 (1/3・1/4)

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
39	壺	口縁部破片	589 Y 攪乱	幅広複合口縁・複合部下端にキザミ／縄文 RL・Z 字状結節文／棒状浮文	細粗砂粒少量	良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色
40	壺	口縁部破片	584 Y 攪乱	幅広複合口縁・複合部上端にキザミ／外面ハケメ／内面縄文 RL・Z 字状結節文	細粗砂粒少量	良好	外面：暗褐色 内面：暗褐色
41	壺	口縁部破片	582 Y 攪乱	幅広複合口縁／内外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
42	壺	口縁部破片	試掘	幅狭複合口縁／内外面ハケメ・赤彩微量	細砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
43	壺	口縁部破片	B-6 表土	内外面ヘラミガキ・赤彩	細砂粒少量／小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
44	壺	口縁部破片	B-6 表土	外面ハケメ／内面ハケメ・ヘラミガキ	細粗砂粒微量	良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色
45	壺	口縁部破片	582 Y 攪乱	二重口縁／内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒少量／小石微量	良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色
46	壺	胴上部破片	584 Y 攪乱	外面ハケメ・ヘラミガキ・赤彩／内面ナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：明赤褐色 内面：灰褐色
47	壺	胴上部破片	A-7 漸移層	縄文 LR／円形浮文（径 1.2cm）	細粗砂粒少量	良好	外面：明灰褐色 内面：暗灰褐色
48	壺	胴上部破片	表採	羽状縄文 LR-RL-LR	細粗砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：灰褐色
49	壺	胴上部破片	B-6 表土	羽状縄文 RL-LR・S 字状結節文	粗砂粒多量	良好	外面：褐色 内面：暗灰褐色
50	壺	胴上部破片	50 M	櫛描コンパス文・櫛描横線文	細砂粒微量	良好	外面：明灰褐色 内面：明灰褐色
51	壺	底部破片	B-6 表土	外面ハケメ・ヘラミガキ／内面ヘラナデ	細粗砂粒・小石微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：灰褐色
52	壺	底部破片	B-6 表土	外面ハケメ	細粗砂粒微量	良好	外面：褐色 内面：褐色
53	壺	底部破片	E-5 表土	外面ヘラミガキ／内面ヘラナデ	細砂粒少量／雲母・小石微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
54	甕	口縁部破片	6 M	口唇部キザミ／内外面ハケメ	細粗砂粒微量	良好	外面：明灰褐色 内面：明灰褐色
55	甕	口縁部破片	D-3 表土	口唇部キザミ／内外面ハケメ	細砂粒微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
56	甕	口縁部破片	E-6 表土	口唇部キザミ／内外面ハケメ	細砂粒微量	良好	外面：暗灰褐色 内面：暗灰褐色
57	甕	口縁部破片	582 Y 攪乱	口唇部キザミ／内外面ハケメ	細砂粒微量	良好	外面：淡灰褐色 内面：淡灰褐色
58	甕	口縁部破片	6 M	内外面ハケメ	細粗砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
59	甕	口縁部破片	50 M	口唇部キザミ／内外面ナデ	細砂粒微量	良好	外面：黒褐色 内面：明灰褐色
60	甕	口縁部破片	A-6 表土	内外面ナデ	細粗砂粒少量	良好	外面：黒褐色 内面：黒褐色
61	甕	口縁～胴上部破片	A-7 攪乱	S 字襷／外面ハケメ／内面ナデ	細砂粒・雲母微量	良好	外面：明灰褐色 内面：明褐色
62	甕	胴上部破片	588 Y 攪乱	内外面ハケメ	細砂粒微量	良好	外面：暗褐色 内面：赤褐色
63	甕	胴部破片	50 M／D-3 表土	外面ハケメ／内面ヘラナデ	細砂粒微量	良好	外面：黒褐色 内面：暗褐色
64	甕	胴下部破片	6 M	外面ハケメ／内面ヘラナデ	細粗砂粒微量	良好	外面：淡赤褐色 内面：暗灰褐色
65	甕	胴下部破片	表採	外面ハケメ／内面ヘラナデ	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色 内面：褐色
66	甕	脚部破片	表採	外面ナデ／内面ハケメ	細粗砂粒微量	良好	外面：淡白褐色 内面：褐色
67	甕	脚部破片	52 M	裾部内面折り返し／内外面ナデ／S 字襷？	細砂粒少量／雲母微量	良好	外面：明灰褐色 内面：淡赤褐色
68	高坏・鉢	口縁部破片	588 Y 攪乱	幅狭複合口縁・下端部キザミ／内外面ヘラミガキ・赤彩	細粗砂粒多量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
69	高坏・鉢	口縁部破片	584 Y 攪乱・試掘	縄文 RL・Z 字状結節文・円形朱文（径 6mm）／内外面ヘラミガキ・赤彩	細砂粒少量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
70	高坏	坏部破片	C-5 攪乱	屈曲部キザミ／内外面ヘラミガキ	細粗砂粒少量／小石微量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色
71	高坏	脚部破片	B-6 表土	外面ヘラミガキ／内面ヘラナデ	細砂粒微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色

遺物番号	種別	石材	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴
72	石皿	砂岩	589 Y 攪乱	16.4	12.4	3.1	1120.3	上面ほぼ全面に磨痕

第 31 表 遺構外出土遺物一覧（弥生時代後期～古墳時代前期）

の坏部、71 は高坏の脚部である。

72 は石皿である。上面は中央がややくぼみ、ほぼ全面滑らかな磨痕となっている。

(5) 古墳時代後期～奈良・平安時代

遺構外からは、土師器 49 点（甕 47 点・坏 2 点）・須恵器 51 点（坏 35 点・壺甕類 12 点・蓋 2 点・

皿2点)が出土している。
須恵器の坏3点と壺甕類
4点を写真で示す(第
32表、図版17-1)。

(6) 中世以降

遺構外からは、磁器5
点・陶器17点・炆器1
点・土器1点・銅銭1点・
石製品1点・瓦1点が出
土している。このうち銭
貨を図示し、その他は写
真で報告する(第69図、
第33表、図版17-2)。

時期としては17世紀
前半から明治までのもの
がみられ、明確に中世と
言えるものは検出されな
かった。

(7) 時期不明

この他、時期の特定
が困難なものとして、土
製品2点(土錘)・鉄滓
1点・焼成粘土塊2点が
ある。このうち、土錘1
点と鉄滓を写真で示す
(第70図、第34表、図
版17-3)。

遺物番号	器種	遺存部位	出土位置	特徴・調整	胎土	色調
73	須恵器坏	口縁部破片	表探	ヨコナデ	細砂粒・骨針少量	内外面:淡赤褐色
74	須恵器坏	底部破片	589 Y攪乱	底部回転糸切	細砂粒微量	内外面:灰褐色
75	須恵器坏	底部破片	表探	底部回転糸切	細砂粒・骨針少量	内外面:灰色
76	須恵器壺甕	口縁部破片	試掘		細粗砂粒・骨針微量	内外面:灰色
77	須恵器甕	胴部破片	試掘		細砂粒微量	内外面:暗灰色
78	須恵器甕	胴部破片	589 Y攪乱	外面タタキ	細粗砂粒微量	内外面:灰色
79	須恵器甕	胴部破片	表探	外面タタキ	細砂粒微量	内外面:灰色

第32表 遺構外出土遺物一覧(古墳時代後期~奈良・平安時代)

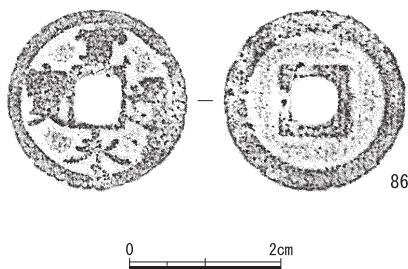
遺物番号	種別	器種	遺存部位	出土位置	特徴	推定産地	時期
80	陶器	—	口縁部破片	試掘	鉄釉	瀬戸美濃	17世紀前半
81	陶器	皿	口縁部破片	試掘	灰釉	瀬戸美濃	17世紀前半
82	陶器	皿	口縁~体部破片	B-6表土	灰釉	瀬戸美濃	17世紀前半
83	陶器	皿	底部破片	表探	灰釉	瀬戸美濃	17世紀前半
84	陶器	皿・鉢	底部破片	B-6表土	鉄釉	瀬戸美濃	17世紀前半
85	陶器	壺・瓶	胴部破片	B-6表土	鉄釉	—	17世紀前半
87	陶器	碗	口縁部破片	582 Y攪乱	灰釉/白泥	備前	17世紀末~18世紀初頭
88	陶器	碗	口縁部破片	6M攪乱	灰釉/白泥/刷毛目碗	備前	17世紀末~18世紀初頭
89	陶器	德利	胴部破片	A-6表土	灰釉/尾呂德利	瀬戸美濃	17世紀末~18世紀初頭
90	磁器	碗	底部破片	B-6表土	染付/透明釉/蛇ノ目剥ぎ碗	備前	18世紀前半
91	磁器	碗	体部破片	581 Y攪乱	染付/透明釉	備前	18世紀前半
92	陶器	碗	口縁~体部破片	B-6表土	染付/透明釉/菊花文/陶胎染付半筒碗	瀬戸美濃	18世紀後半
93	陶器	小坏	口縁部破片	582 Y攪乱	灰釉	京・信楽	18世紀後半
94	陶器	小坏	口縁部破片	588 Y攪乱	灰釉	京・信楽	18世紀後半
95	陶器	德利	胴部破片	表探	灰釉	瀬戸美濃	18世紀後半
96	陶器	德利	胴部破片	A-7攪乱	灰釉	瀬戸美濃	18世紀後半
97	陶器	香炉	口縁部破片	試掘	灰釉	瀬戸美濃	18世紀後半
98	陶器	灯明皿	底部破片	E-6表土	鉄釉	瀬戸美濃	18世紀後半
99	陶器	播鉢	体部破片	581 Y攪乱	鉄釉	瀬戸美濃	18世紀後半
100	磁器	碗	口縁部破片	A-7攪乱	染付/透明釉/丸文	瀬戸美濃	19世紀中葉
101	磁器	碗	体部破片	試掘	染付/透明釉	瀬戸美濃	19世紀中葉
102	土器	—	—	A-6攪乱	—	在地系	19世紀中葉
103	炆器	播鉢	体部破片	C-8表土	透明釉	堺	18世紀初頭~19世紀中葉
104	磁器	碗	体部破片	C-7表土	酸化コバルト/透明釉	瀬戸美濃	明治
105	瓦	—	—	705 D攪乱	—	在地系	—

遺物番号	種別	材質	出土位置	外径	孔径	最大厚	重量	備考
86	銭貨	銅	試掘	2.4	0.6	0.1	2.6	古寛永

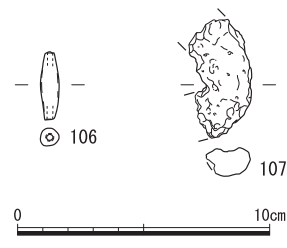
第33表 遺構外出土遺物一覧(中世以降)

遺物番号	種別	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴
106	土錘	A-7攪乱	2.7	0.8	0.7	1.2	孔径2mm
107	鉄滓	581 Y攪乱	4.7	2.5	1.0	16.2	暗灰褐色/径1mmほどの気泡多量/磁性強い
108	焼成粘土塊	705 D攪乱	3.5	2.5	1.8	6.8	スサ入り

第34表 遺構外出土遺物一覧(時期不明)



第69図 遺構外出土遺物 中世以降(1/1)



第70図 遺構外出土遺物 時期不明(1/3)

第4章 調査のまとめ

今回の調査では、旧石器時代から近世・近代に至るまでの遺構・遺物が検出された。本調査地は畑地であったため、耕作機によって、深くまで削平・掘削されているところが多く、遺構の多くはこの影響を大きく受けていたが、西原大塚遺跡に、また新たな資料を加えることができた。以下に、時代を追って各時期の調査成果についてまとめておきたい。

第1節 旧石器時代

本調査地では、石器集中地点1箇所が確認され、遺物は、石核・剥片・石器など9点が出土した。

これらは、すべて3区から出土したものである。3区中央北側に位置する15号石器集中地点では、Ⅳ層下位から石核・剥片・敲石の5点が出土した。敲石は縦長の礫を素材とし、上下両端には敲打痕が明確に残されている。また、トレンチ以外からではあるが、ナイフ形石器と楔形石器が出土している。

西原大塚遺跡では、これまでも各地点で石器集中地点や礫群などが確認されており、その大半はⅢ層～Ⅴ層上位から出土している。本調査地周辺では、南接する区画整理事業第11地点で石器集中が確認されている（4号石器集中地点）。6.0×5.4mの範囲に、ナイフ形石器3点・尖頭器1点・錐1点・剥片8点・碎片49点・礫（焼礫）4点が出土しており、出土層位はⅢ層～Ⅳ層で、Ⅳ層下位に集中している。今回も、同様の層位からの出土を確認できた。

第2節 縄文時代

土坑10基・ピット31本が検出され、縄文土器225点・石器17点が出土している。

土坑はほとんどが詳細不明であるが、3区中央で検出された715号土坑は、その形状から陥し穴と判断できる。本調査地は北東から南西に向かって下る地形である。陥し穴は、その傾斜変換の等高線に沿うように配置されている。遺物は、前期～中期後半のものが出土しており、大半が中期後半に比定される。

西原大塚遺跡では、草創期から晩期に至るまでの遺構・遺物が確認されているが、特に中期後半の集落跡が多く調査されている。

本調査地周辺をみると、前出の第11地点とその西側に接する第10Ⅱ地点で前期黒浜式期の住居跡が確認されている。本遺跡の中央付近にあたる北東側一帯では中期の環状集落が広がっており、住居跡が多数調査されている。本調査地付近では遺構の分布は希薄になるが、確認された遺物は、これらの集落と関連するものであろう。

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期

本調査地の主体となるのが弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物である。住居跡 13 軒・土坑 2 基・ピット 14 本を調査し、壺・甕・高坏・鉢などの土器 1,165 点と石器 6 点、装身具 3 点が出土した。

(1) 遺構について

住居跡は 13 軒調査した（第 71 図、第 35 表）。このうち、80 号住居跡と 83 号住居跡の 2 軒は、平成 6 年度に行われた区画整理事業に伴う発掘調査（平成元年～19 年）にて検出された住居跡の残部にあたる。

平面形状をみると、確認できるもののうち、円形を呈するものが 2 軒（581・586 号住居跡）、隅丸方形を呈するものが 3 軒（80・588・589 号住居跡）、隅丸長方形が 2 軒（83・582 号住居跡）である。

4 本支柱穴であるもの、または推測されるものは 5 軒（83・582・583・584・589 号住居跡）あり、このうち 3 軒（83・582・584 号住居跡）の主軸はほぼ同方向である。

炉は 9 軒（80・585・586・587 号住居跡以外）で確認されており、このうち 8 軒は地床炉で、1 軒は粘土板を用いた粘土床炉（582 号住居跡）であった。この住居跡では、炉は、地床炉と粘土床炉の 2 基が検出されており、粘土床炉では枕として礫が配置されていた。この他に土器片が利用されたものが 1 基ある（583 号住居跡）。

貯蔵穴は 5 軒（83・581・582・588・589 号住居跡）で確認されており、このうち 2 軒（582・588 号住居跡）では凸堤を伴う。また、3 軒（582・588・589 号住居跡）からはその近辺で「赤砂」が検出されている。

各住居跡の出土遺物をみると、弥生時代後期後半に比定されるものが多いようである。出土遺物から住居跡の位置付けをしてみると（80・579・580・583・585・587 号住居跡については遺物が少ないため除外）、やや古いものが 581・582・586・589 号住居跡で、次いで 584 号住居跡、588 号住居跡では後期末から古墳時代初頭のものがみられ、83 号住居跡は古墳時代前期に比定されている（内野 2009）。ただ、588 号住居跡については、焼土や炭化物が覆土中に多く、特に南西部で検出された焼土範囲については、床面との間に層が確認でき、ある期間をおいてからの堆積とも捉えられる。遺物の多くはこの焼土とともに出土していることから、遺物は住居廃絶後に一括廃棄されたものという可能性が高い。

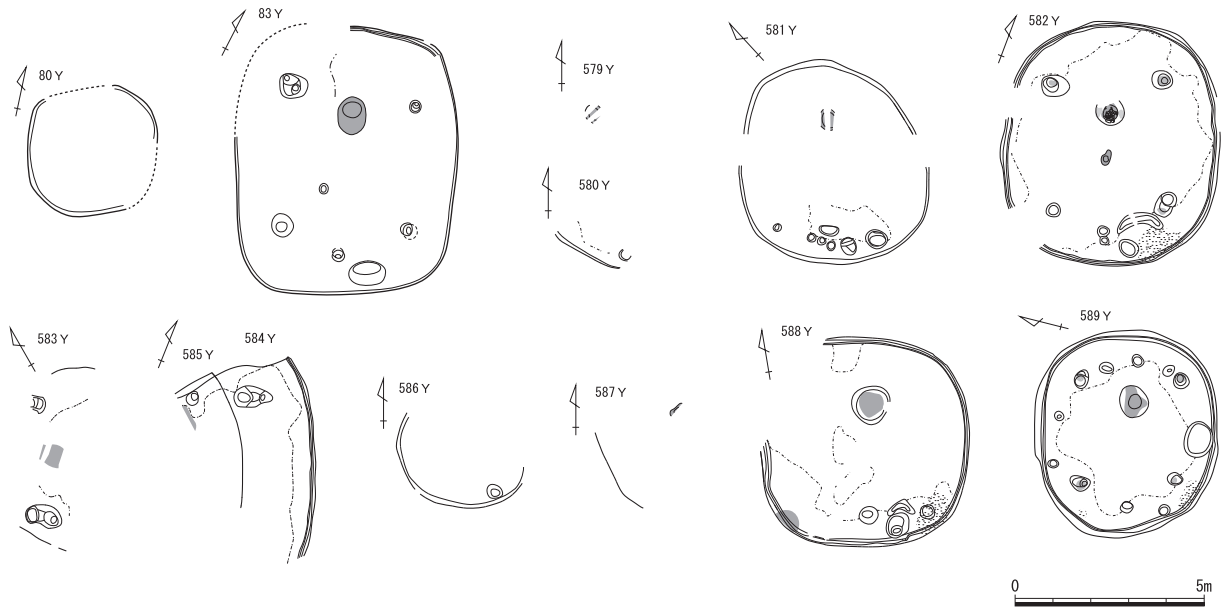
住居跡の他には土坑とピットがあるが、出土遺物も少なく、時期や性格などの詳細を判断することは困難であった。遺物がないものも多く、これらについては、覆土の様子を観察し、遺物が出土した遺構の覆土と比較して、該当時期のものとして報告している。

ピットについては、54～56・86 号ピットが何らかの施設となる可能性があるとして本文中で報告したが、この他にも、掘り込みが深く、柱痕跡のみられるものが確認されている。これらについては建物跡の可能性もあるが、確証が得られなかったため、単独のピットとして報告している。

(2) 遺物について

本調査地から出土した遺物の大半は当該期の遺物で、1,174 点を数える。このうち、土器の内訳は、壺 661 点・甕 417 点・高坏または鉢 87 点となっている。壺では、単口縁・幅狭複合口縁・幅広複合口縁がみられ、小型壺も数点確認された。また、櫛描文が施された東海西部系のものも確認できた（第

第4章 調査のまとめ



第71図 西原大塚遺跡第179地点検出住居跡(1/200)

住居番号	形状	周溝	ピット	炉	貯蔵穴	凸堤	入り口施設	赤砂	備考
80	隅丸方形	—	なし	—	—	—	—	—	
83	隅丸長方形	あり	4本支柱穴+1本	地床炉	あり	—	あり	—	古墳前期
579	—	—	—	(地床炉)	—	—	—	—	
580	—	—	1本	—	—	—	—	—	
581	円形	—	6本	地床炉	あり	—	あり	—	
582	隅丸長方形	あり	4本支柱穴	粘土床炉(石・粘土)・地床炉	あり	あり	あり	あり	銅釧出土
583	—	—	3本(支柱穴)	地床炉(土器片)	—	—	—	—	
584	—	あり	1本(支柱穴)	(地床炉)	—	—	—	—	
585	—	—	1本(支柱穴か)	—	—	—	—	—	
586	(円形)	—	1本	—	—	—	—	—	
587	—	—	—	(地床炉)	—	—	—	—	
588	隅丸方形	あり	4本	地床炉	あり	あり	あり	あり	小玉・炭化材出土
589	隅丸方形	あり	4本支柱穴+9本	地床炉	あり	—	あり	あり	ガラス玉出土

第35表 西原大塚遺跡第179地点住居跡一覧

51図-9・第68図-50)。甕ではいわゆるハケ甕・ナデ甕両方がみられ、点数的にみると、ハケ甕294点・ナデ甕114点となり、ハケ甕のほうが多いようである。また、少数ではあるが、S字甕が588号住居跡から出土している。

石器は、磨製石斧・磨石・敲石・石皿があげられる。磨製石斧は古い時期からみられるものであるが、二次的な使用痕が認められたため、今回は本時期の遺物として扱った。磨石には588号住居跡から出土した、立方体を呈するものがある。磨面は6面中4面にみられ、平坦で光沢があり、非常に滑らかである。使用対象に、興味もたれるところである。

また、装身具として、小玉1点・銅釧1点が出土している。589号住居跡から出土した玉は、炉の土を水洗選別して発見したもので、紺色透明を呈するガラス製のものである。銅釧は、582号住居跡の床面上から発見された。遺存状態は悪く半分以上は失われており、残された部分も3片の破片状態で出土した(保存処理時に2片が接合された)。破片は厚さ1mm程の薄い青銅製の板で、緩い弧状を呈しており、円環状になるものと考えられる。1片のみ片方の縁がわずかに残存しており、その断面形をみ

ると、端部は磨きこまれて丸みを帯び、薄く仕上げられているようである。その縁から少し離れた個所に、径1mm程の孔がみられる。現存する最大幅は9mm、直径は5cm以上5.5cm未満と推測される。

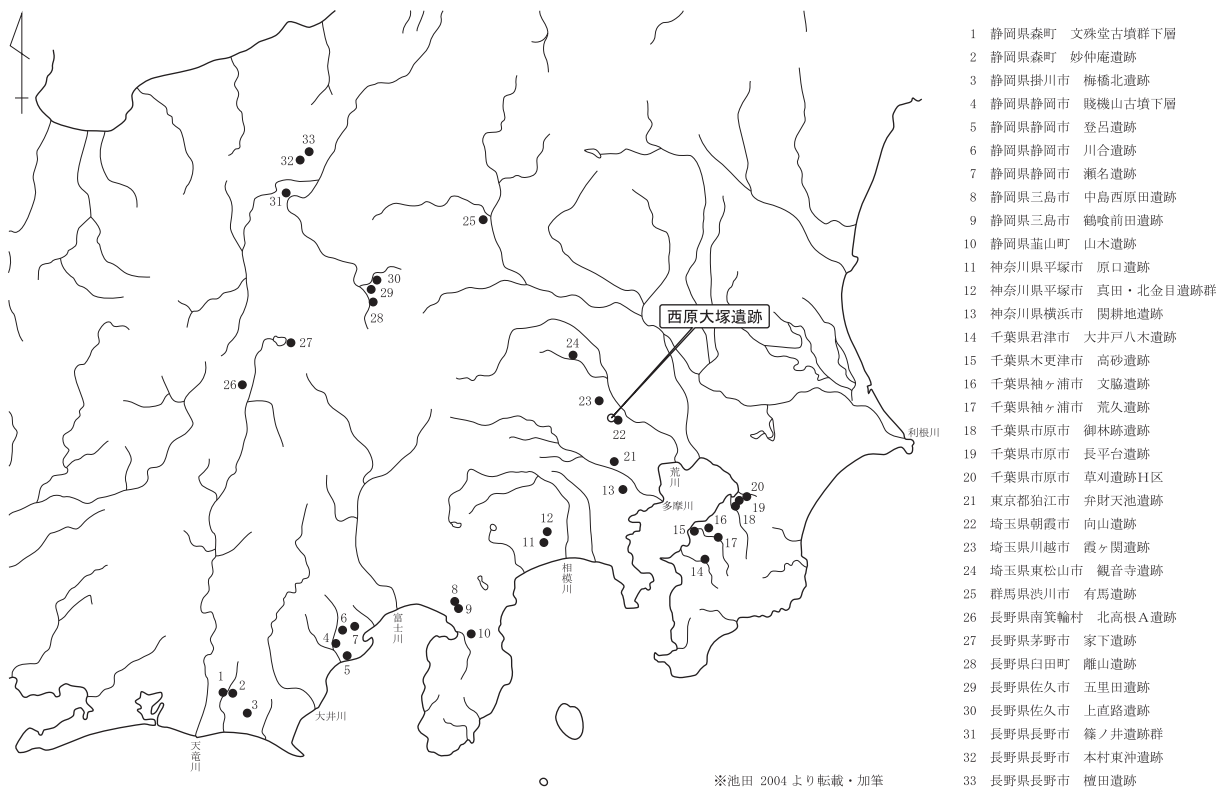
(3) 調査の成果

弥生時代後期～古墳時代前期における西原大塚遺跡は、これまで住居跡約600軒、方形周溝墓30基以上などが調査されている大規模集落である。今回の調査は、ほんの一部分ではあったが、新たな資料を加えることができた。

銅釧は志木市内では、今回が第1例目となる。本調査地出土の銅釧は、「帯状円環型銅釧」・「帯状銅釧」・「板状銅釧」などとも呼ばれている、青銅製の腕輪と推測される。これは、「概ね直系6cm前後の円形で、高さ1cmほど、厚さは約2mmで、断面形は扁平な長方形が多い。完形品は継ぎ目のない鑄造品」(池田2004)で、主に西日本に分布域をもつ「有鉤銅釧」や「楽浪系銅釧」とは区別されており、東日本に特徴的な青銅製品である。

第72図は、銅釧の完形品が出土した主な遺跡の分布図である。その分布域をみると、天竜川から房総半島までの太平洋岸地域から中部高地地域にかけて、粗密をみせながら散在する。志木市周辺では、埼玉県朝霞市向山遺跡・川越市霞ヶ関遺跡・東松山市観音寺遺跡、東京都狛江市弁財天池遺跡などから完形品が出土している。時期的には、弥生時代後期中葉・後半に比定される土器とともに出土する例が多く、弥生時代後期の範囲内で捉えることができる。出土位置としては、住居跡や方形周溝墓が挙げられる。住居跡出土のものは単品で検出され、方形周溝墓出土のものは、被葬者の腕に装着された状態で、複数個体が連なって出土することが多いようである。

今回出土した銅釧は、住居跡からの出土で、1点のみと思われる。確認された小さな孔は、補修孔か、



第72図 銅釧（完形品）出土遺跡分布図

または、加工して再利用をしていたのかもしれない。

また、少量ではあるが東海西部に系譜をもつ土器の出土と、「粘土床炉」の存在を挙げておきたい。西原大塚遺跡では、これまでも東海などの外来系の土器が出土しており、これらの土器の出土例は、本遺跡の所在する武蔵野台地北側縁辺の荒川下流域で多く確認されているものである。一方、粘土板を用いた「粘土床炉」は、当該期の特徴的な形態として荒川下流域に顕著にみられるものである。この分布域の類似から、東海系土器との関連性が指摘されている（仲野 1980・鈴木 1993・合田



※共和開発株式会社 2006 年より転載・加筆

第 73 図 粘土床炉分布図

2006)。本遺跡は、荒川下流域におけるこれらの密集地帯の西端にあたり（第73図）、今後もこれらの資料の増加が予想される。先述の銅釧とあわせ、当時の人々の交流を検討する上での重要な資料として注目していきたい。

第4節 古墳時代後期～奈良・平安時代

溝跡1条・ピット4本を調査した。遺物は土師器・須恵器など107点が出土している。

溝跡は、平成6年度に行われた区画整理事業に伴う発掘調査で確認されているものの延長部分である。本調査地の東側に接する第8Ⅳ地点を東西方向に走っており、本調査地内を横断している。本調査地内では1区から3区にかけて検出されているが、3区のものには攪乱の影響が大きく、溝跡として認識し難いところがあったが、覆土の様子と検出位置から1区の溝跡と同一遺構として記録した。3区の南壁に断面が確認できることから、西へ向かって伸びているようであるが、本調査地南西に接する既調査地では確認されていない。全容の解明は、今後の未調査地の発掘に委ねられる。

遺物は、土師器55点（甕51点・坏4点）と須恵器52点（坏36点・壺甕類12点・蓋2点・皿2点）が出土しているが、多くは当該期の遺構以外からの出土である。

第5節 中世以降

溝跡4条と土坑1基、ピット46本を調査した。遺物は近世以降のものを32点確認した。

溝跡は52号溝跡を除きほぼ同様の形状・覆土で、一連のもの可能性が高い。52号溝跡についても走行方位はほぼ同軸であり、土坑やピットについても、溝跡と関連するような位置関係にある。溝跡は、その形状から館関連の遺構を思わせ、中世にまで遡る可能性も考えられるが、出土遺物には中世のものは確認されていない。遺物は、中世以降のものとしては、18世紀後半以降の陶器2点（50号溝跡）と銭貨1点（51号溝跡）が出土している。

本調査地周辺の既調査地では、これらの溝跡と同様の遺構は確認されておらず、どのように広がってゆくのか、現況では想定できなかった。溝跡の配置状況は、現在の区画と軸がほぼ同じで、何らかの区画を担っていたとも考えられるが、本遺構の詳細については今のところ不明である。本調査地内の未調査部分も含め、今後の周辺の調査によって徐々に解明されてゆくことと思われる。

遺物は、陶器5点・磁器19点・炆器1点・土器1点など32点が出土している。中世のものは遺構外にもみられず、17世紀～明治期にかけてのものが確認されている。

[引用・参考文献]

- 池田 治 2003「帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について」『かながわの考古学』財団法人かながわ考古学財団
2004「東日本の弥生銅釧」『白門考古論叢』中央考古会・中央大学考古学研究会
- 尾形則敏・深井恵子 1999「第10章 西原大塚遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2001「第3章 西原大塚遺跡第43地点の調査」『志木市遺跡群11』志木市の文化財第30集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子 2003「第3章 西原大塚遺跡第54地点の調査」『志木市遺跡群13』志木市の文化財第35集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2004「第3章 西原大塚遺跡第65地点の調査」『志木市遺跡群14』志木市の文化財第36集 埼玉県志木市教育委員会
- 神山健吉 1988「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号
- 小田富士夫 1974「日本で生まれた青銅器」『古代史発掘』5 講談社
- 黒沢 浩 1992「1号方形周溝墓出土銅・鉄釧について」『弁財天池遺跡』狛江市教育委員会
- 合田芳正・白谷珠美編 2006『御殿前遺跡—西ヶ原二丁目45番10号地点—』共和開発株式会社
- 合田芳正 2006「粘土床炉」『御殿前遺跡—西ヶ原二丁目45番10号地点—』共和開発株式会社
- 合田芳正・本山直子編 2012『東京都目黒区 烏森遺跡』共和開発株式会社
- 小高幸男 1989「銅製指輪・腕輪について」『小浜遺跡群Ⅱマミヤク遺跡』君津都市考古学資料刊行会
- 埼玉県 1982『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2009『西原大塚遺跡』第1分冊～第3分冊 志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 鈴木敏弘 1993「終章 荒川下流域の弥生時代」『埼玉県和光市午王山遺跡』和光市埋蔵文化財調査報告書 第9集 和光市教育委員会
- 田村朋美 2012「3. 田端西台通遺跡出土ガラス小玉の自然科学的調査」『北区田端西台通遺跡』第1分冊 東京都埋蔵文化財センター調査報告第272集 東京都埋蔵文化財センター
- 徳留彰紀・尾形則敏・藤波啓容・松木綾子 2013『西原大塚遺跡第174①地点』志木市の文化財第55集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 仲野紀巳子 1980「弥生時代の遺構と遺物」『中里前原遺跡』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会
- 西相模考古学研究会 2002『考古学リーダー1 弥生時のヒトの移動～相模湾から考える～』
- 野澤誠一 2002「銅釧・鉄釧からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号 長野県立歴史館
- 浜田晋介 1992「弥生時代の石皿と磨石—南関東地域の事例から—」『考古論叢 神奈河』第1集 神奈川考古学会
- 林原利明 2001「神奈川県青銅製品(1)」『西相模考古』第10号
- 林原利明 2002「神奈川県青銅製品(2)」『西相模考古』第11号
- 原田 幹 1994「S字襷の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究Ⅴ』庄内式土器研究会
- 比田井克仁 1997「弥生時代後期における時間軸の検討—南武蔵地域の検討を通して—」『古代』第103号 早稲田大学考古学会
- 比田井克仁・合田芳正・関森八重美編 2009『東京都中野区 広町遺跡』共和開発株式会社

[付 編]

自 然 科 学 分 析

付編 西原大塚遺跡第 179 地点出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

管理者：金井慎司／担当者：高橋 敦／分析者：高橋 敦・斉藤紀行

はじめに

今回の分析調査では、埼玉県志木市西原大塚遺跡第 179 地点 558 号住居跡から出土した炭化材について、住居の建築部材等の木材利用に関する基礎資料を作成するために、樹種同定を実施する。

また、582 号住居跡から出土した青銅片について、蛍光 X 線分析を実施することにより、その金属成分比を明らかにする。

第 1 節 炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、出土遺物等より弥生時代とされている、588 号住居跡から出土した炭化材 5 点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を第 36 表に示す。炭化材は、広葉樹 2 分類群（クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節）とイネ科タケ亜科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus subgen. Eucarpinus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が主として放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高のものと集合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus*

遺構	番号	形状	種類
588 号住居跡	No.1	芯持丸木（直径 2cm）	クマシデ属イヌシデ節
	No.2	破片	イネ科タケ亜科
	No.3	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	No.4	削出丸木（直径 4cm）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	No.5	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

第 36 表 樹種同定結果

subgen. *Quercus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部はほぼ 1 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae subfam. Bambusoideae*)

原生木部の小径の道管の左右に 1 対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

弥生時代とされる 588 号住居跡から出土した炭化材は、住居内東側の床面上の比較的狭い範囲から出土している(第 44 図)。このうち、No.1 は直径 2cm の芯持丸木、No.4 は直径 4cm の削出丸木状を呈する。これらの炭化材には、イヌシデ節、クヌギ節、タケ亜科が認められた。

イヌシデ節にはアカシデ、イヌシデ、イワシデの 3 種があり、現在の関東平野ではアカシデやイヌシデが二次林等に生育しており、木材は重硬で強度が高い。クヌギ節は、クヌギとアベマキの 2 種があり、現在の関東平野ではクヌギが二次林や河畔林に生育している。その木材は、重硬で強度が高い。タケ亜科は、いわゆるタケ・ササ類であり、林床等に生育しており、木材は強度・耐水性・靱性がある。

今回同定試料とした炭化材は、住居跡内の出土状況から建築部材の可能性もある。同定の結果確認されたイヌシデ節やクヌギ節の材質から、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。また、これらの樹木は二次林等に普通に見られる種類であることから、当時遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。なお、イヌシデ節に同定された No.1 は、直径 2cm の芯持丸木であることから、垂木等の主要な部材とは考えにくく、横木など、より径の細い木材でも利用可能な部位に由来する可能性がある。また、クヌギ節に同定された No.4 は、直径 4cm の削出丸木状を呈する。これが建築部材であるとするれば、他の部材と組み合わせるために削り出されたホゾの部分の可能性もある。一方、木取りや径を考えると、何らかの木製品の柄の可能性もある。一方タケ亜科は、材質から屋根の萱材等の可能性が考えられる。

西原大塚遺跡では、これまでも第 45 地点で弥生時代末とされる住居跡出土炭化材について樹種同定が実施されており、クリを主体とする傾向が指摘されており、今回の結果とは異なる(伊東・山田 2012)。今回調査対象とした住居の詳細な時期は今のところ不明であるが、住居の時代時期や規模によって利用木材が異なっていた可能性もある。今後とも、継続した資料蓄積が望まれる。

第 2 節 青銅製品の蛍光 X 線分析

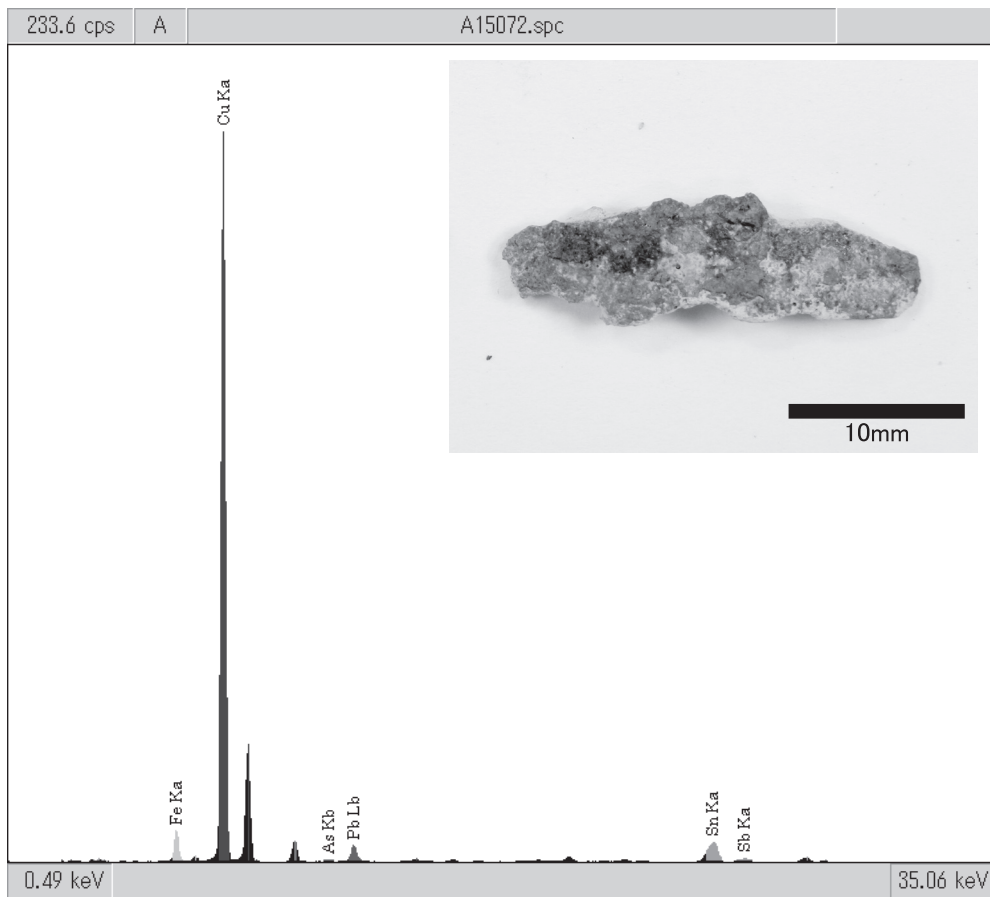
1. 試料

試料は、出土遺物等より弥生時代とされている、582 号住居跡から出土した青銅片(第 29 図-9)の 1 点である。

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	224
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	5
フィルタ	なし
マイラー	OFF

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	72.151	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	1808.903	7.87- 8.21
33	As	ヒ素	Kβ	5.864	11.53-11.92
50	Sn	スズ	Kα	98.879	24.93-25.46
51	Sb	アンチモン	Kα	11.817	26.00-26.54
82	Pb	鉛	Lβ	49.161	12.43-12.82

第74図 青銅片の蛍光X線分析結果

2. 分析方法

蛍光 X 線分析は、サンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される調査法である。表面分析法であるため、遺物表面の状況に大きく左右されるが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない点で優れており、遺物の構成元素を知るためには極めて有効な手法とである。

今回調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（SEA2120L）である。なお、本装置は、下面照射型の装置であり、X 線管球は Rh、コリメーターサイズは 10mm φ である。なお測定条件の詳細は、結果とともに、第 74 図に示す。

3. 結果および考察

蛍光 X 線スペクトルを第 74 図に示す。青銅片には、Fe（鉄）・Cu（銅）・As（砒素）・Sn（スズ）・Sb（アンチモン）・Pb（鉛）が認められる。腐食が著しく、緑青などの腐食生成物の上から測定を行っているため定量的評価は避けるが、スペクトルを見る限りでは銅を主体としスズと鉛を伴うことから、鉛入りの青銅（Cu-Sn-Pb）製とみられる。

[引用文献]

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181
- 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66-176
- 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201
- 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166
- 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216
- 伊東隆夫・山田 昌久 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 449p
- 島地 謙・伊東 隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）海青社 122p [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]

圖 版



1.1区全景



2.2区全景



1. 3区全景



2. 15号石器集中地点



3. 15号石器集中地点遺物出土状態



4. 702号土坑



5. 706号土坑



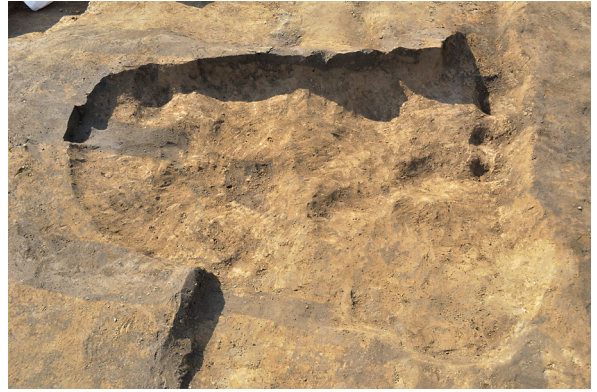
1. 707号土坑



2. 708号土坑



3. 709号土坑



4. 710号土坑



5. 711号土坑



6. 712号土坑



7. 714号土坑



8. 715号土坑



1. 8号ピット



2. 80号住居跡



3. 83号住居跡



4. 579号住居跡 炉



5. 580号住居跡



6. 581号住居跡



7. 581号住居跡 遺物出土状態



8. 582号住居跡



1. 582号住居跡 炉1



2. 582号住居跡 炉2



3. 582号住居跡 貯藏穴・赤砂



4. 582号住居跡 遺物出土状態



5. 583号住居跡



6. 583号住居跡 炉



7. 584号住居跡



8. 584号住居跡 遺物出土状態



1. 585号住居跡



2. 586号住居跡



3. 587号住居跡



4. 587号住居跡 炉



5. 588号住居跡



6. 588号住居跡 炉



7. 588号住居跡 貯蔵穴



8. 588号住居跡 赤砂と遺物出土状態



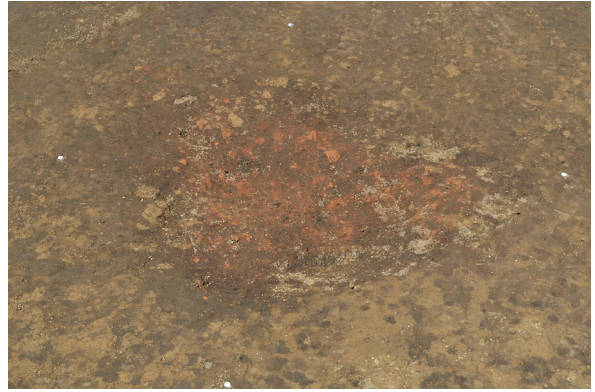
1. 588号住居跡 焼土と遺物出土状態



2. 588号住居跡 炭化材出土状態



3. 589号住居跡



4. 589号住居跡 炉



5. 589号住居跡 貯蔵穴



6. 589号住居跡 赤砂（南側）



7. 589号住居跡 赤砂（北側）



8. 589号住居跡 遺物出土状態



1. 704号土坑



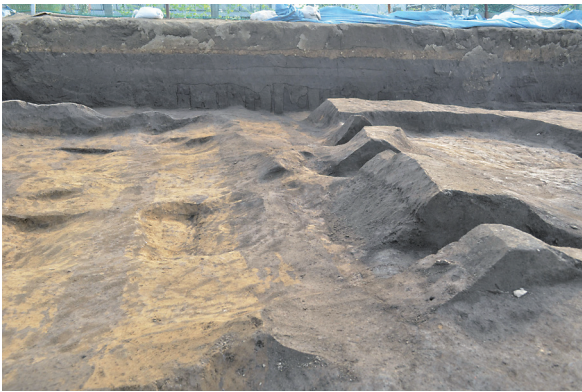
2. 713号土坑



3. 54～56・86号ピット



4. 6号溝跡（1区）



5. 6号溝跡（3区）



6. 11号ピット



7. 50・51号溝跡（2区）



8. 51号溝跡北端屈曲部（2区）



1. 50・51号溝跡 (4区)



2. 50号溝跡南端屈曲部 (4区)



3. 51号溝跡 工具痕 (2区)



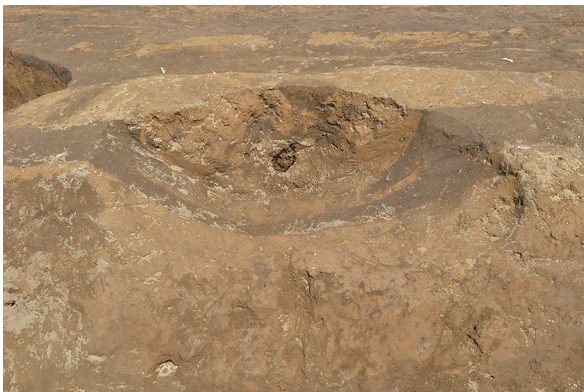
4. 51号溝跡 工具痕 (4区)



5. 52号溝跡



6. 53号溝跡



7. 705号土坑



8. 24号ピット



1. 焼土跡



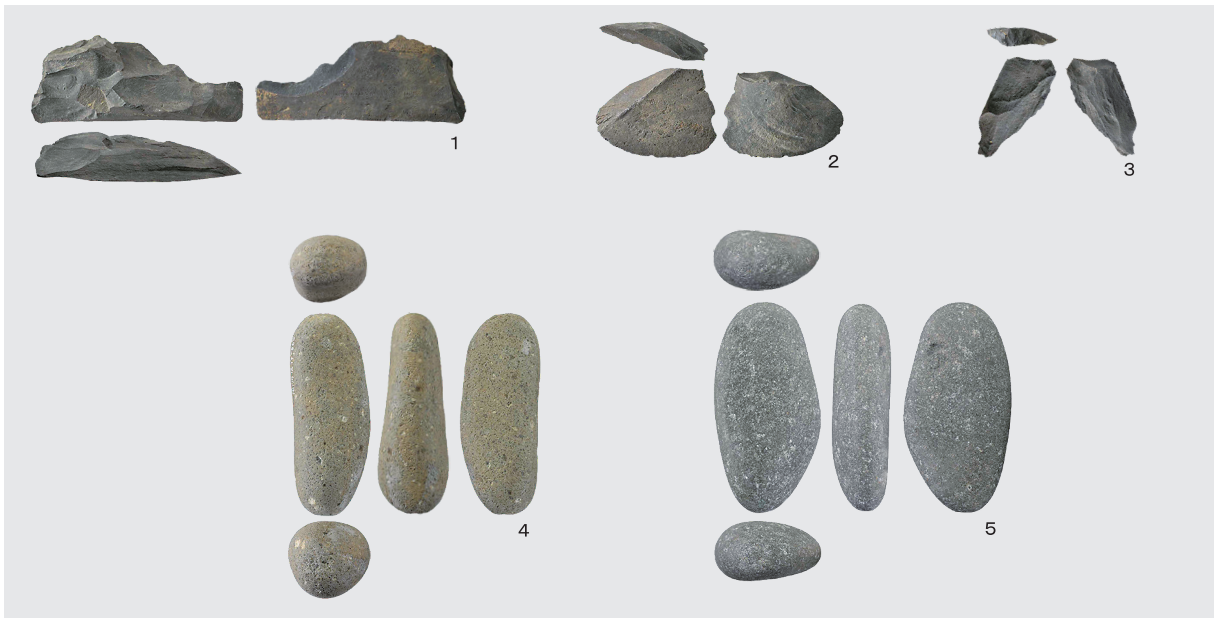
2. 703号土坑



3. 基本層序



4. 作業風景



5. 15号石器集中地点出土遺物



6. 8号ピット出土遺物



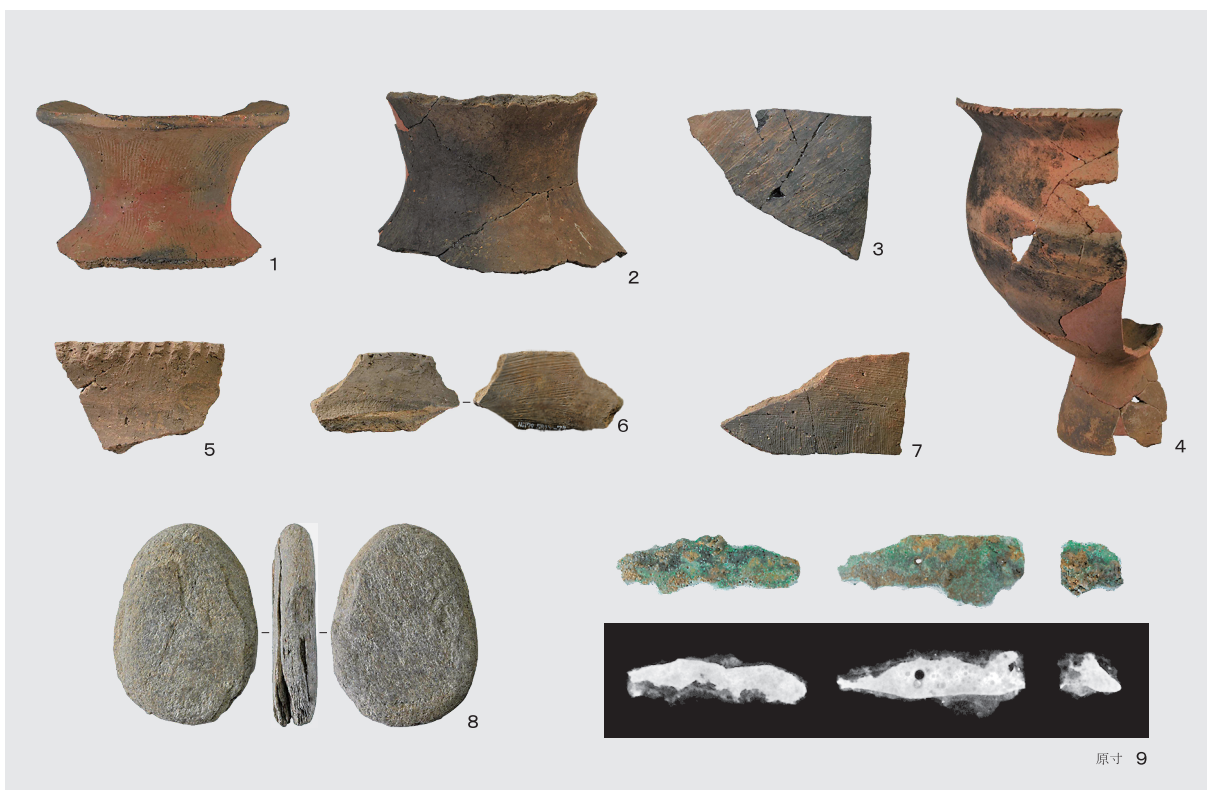
7. 80号住居跡出土遺物



8. 83号住居跡出土遺物



1. 581号住居跡出土遺物



2. 582号住居跡出土遺物



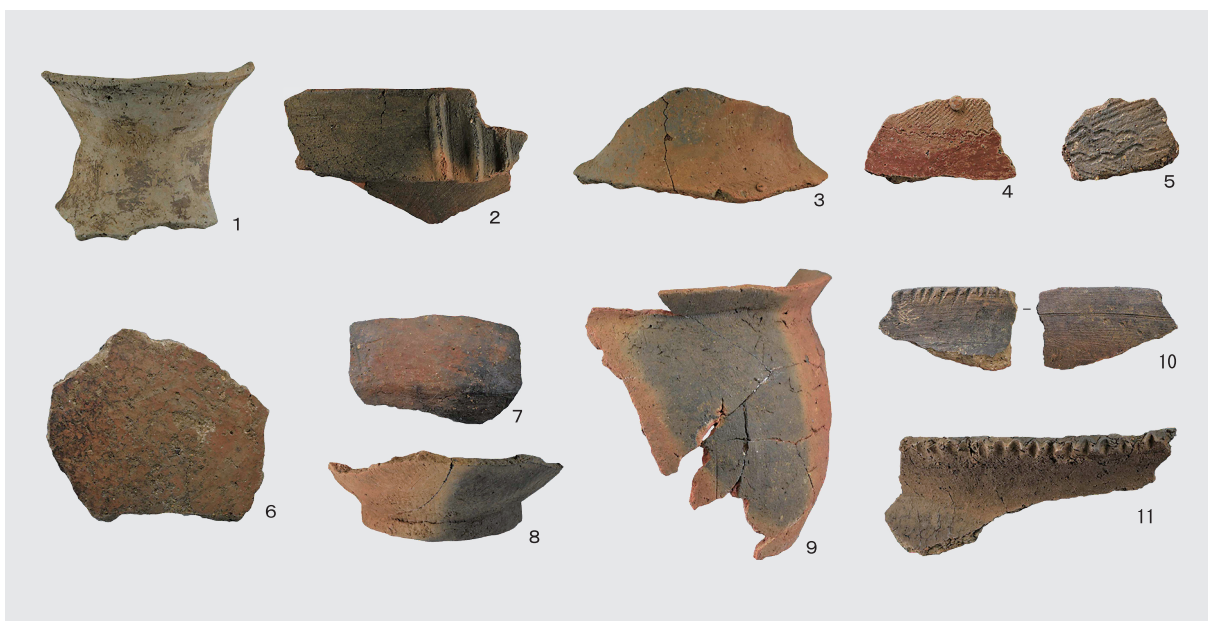
3. 583号住居跡出土遺物



1. 584 号住居跡出土遺物



2. 586 号住居跡出土遺物



3. 588 号住居跡出土遺物 (1)



1. 588号住居跡出土遺物(2)



2. 589号住居跡出土遺物(1)



1. 589号住居跡出土遺物(2)



2. 704号土坑出土遺物



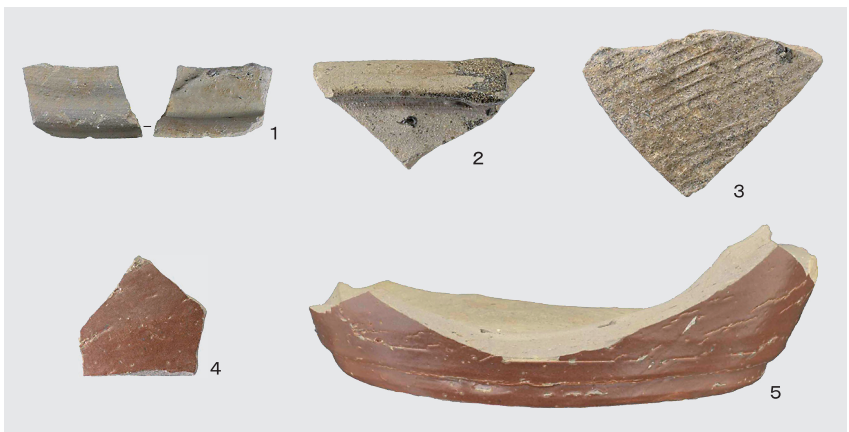
3. 86号ピット出土遺物



4. 6号溝跡出土遺物



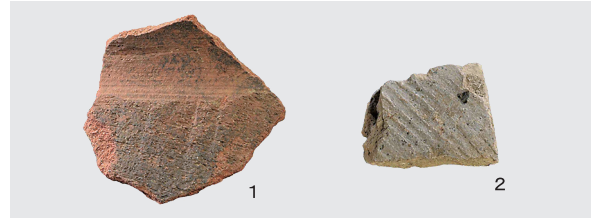
5. 11号ピット出土遺物



6. 50号溝跡出土遺物



1. 51号溝跡出土遺物



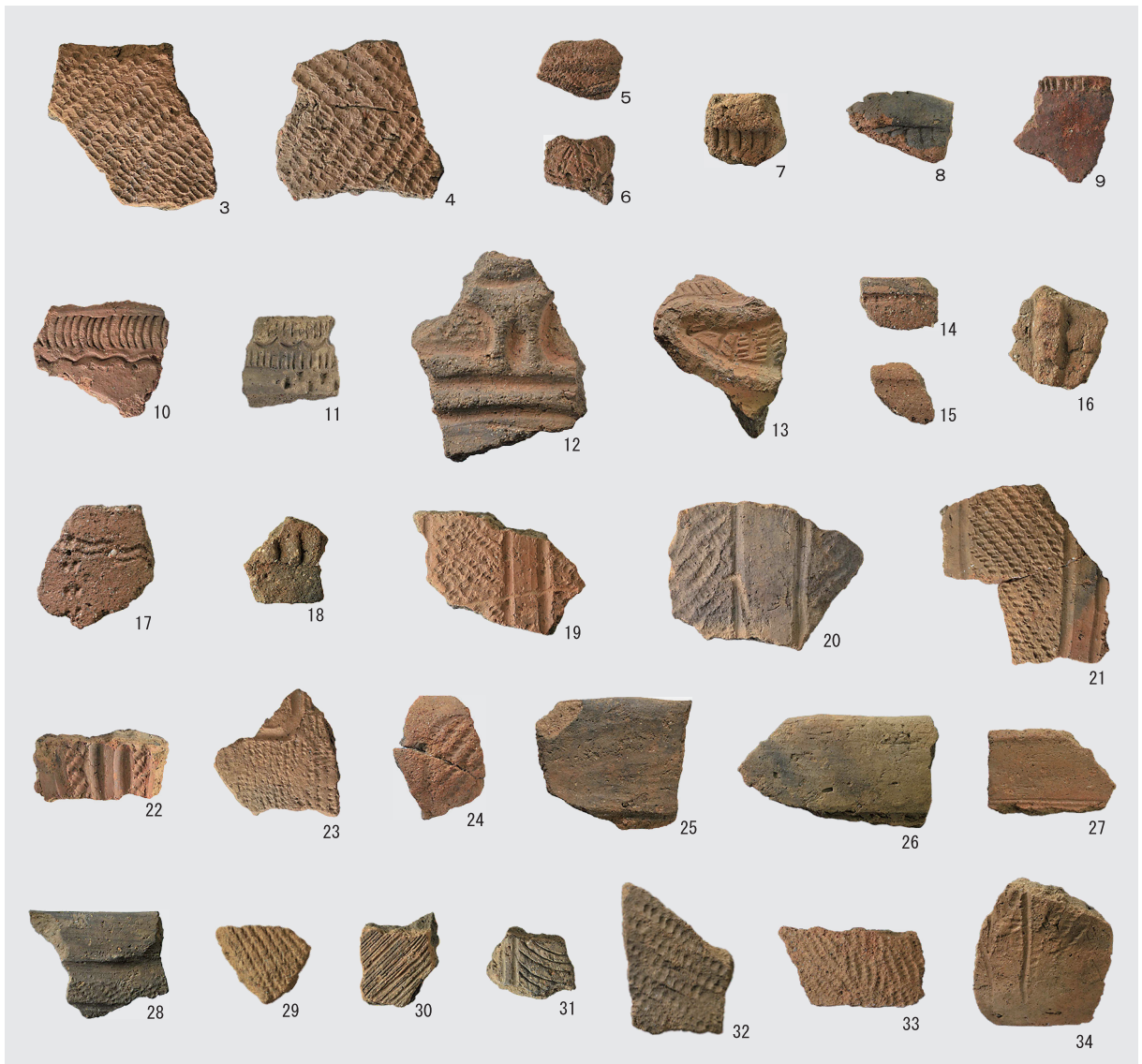
2. 52号溝跡出土遺物



3. 24号ピット出土遺物



4. 遺構外出土遺物 (旧石器時代)



5. 遺構外出土遺物 (縄文時代1)



1. 遺構外出土遺物（縄文時代2）



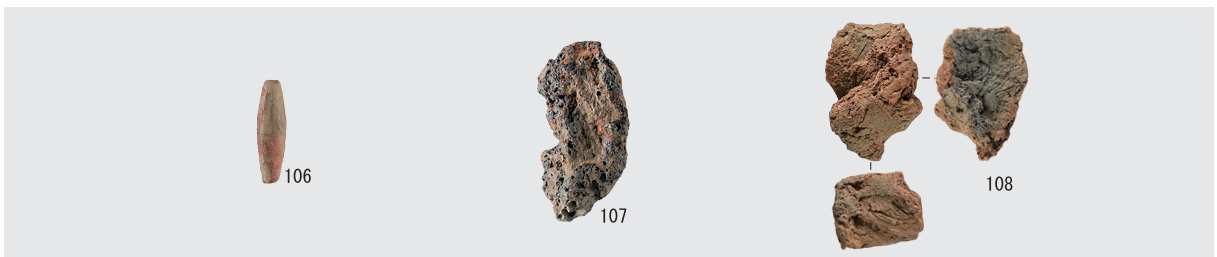
2. 遺構外出土遺物（弥生時代後期～古墳時代前期）



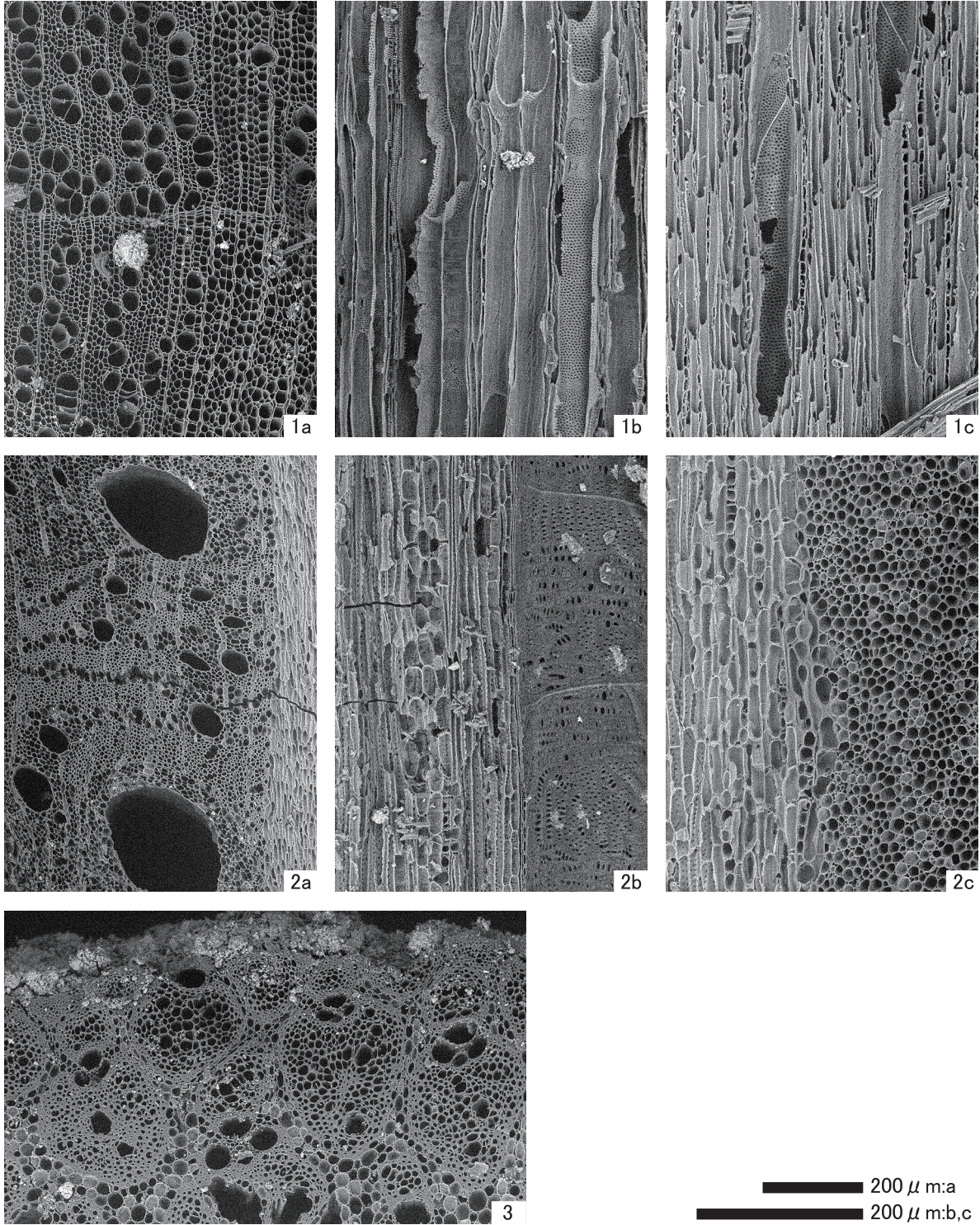
1. 遺構外出土遺物（古墳時代後期～奈良・平安時代）



2. 遺構外出土遺物（中世以降）



3. 遺構外出土遺物（時期不明）



1.クマシデ属イヌシデ節(588号住居跡;No.434)
2.コナラ属コナラ垂属クヌギ節(588号住居跡;No.447)
3.イネ科タケ垂科(588号住居跡;No.436)
a:木口,b:柁目,c:板目

588 号住居跡出土炭化材

報告書抄録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい 179 ちてん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第 179 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第 56 集					
編著者	尾形則敏 大久保聡 二瓶秀幸 本山直子							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒 353-0002 埼玉県志木市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	2014 年 3 月 15 日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
にしはらおおつか 西原大塚遺跡 (第 179 地点)	しき しいわいちょう 志木市幸町 3 丁目 7415 ~ 7417 番地	11228	09-007	35° 49° 25"	139° 33' 49"	20120618 ~ 20121005	1380 m ²	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
にしはらおおつか 西原大塚遺跡 (第 179 地点)	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代後期～古墳 時代前期 古墳時代後期～奈良・ 平安時代 中世以降	石器集中地点 1 箇所 土坑 10 基・ピット 31 本 住居跡 13 軒・土坑 2 基・ピット 14 本 溝跡 1 条・ピット 4 本 溝跡 4 条・土坑 1 基・ピット 46 本	石核・剥片・敲石 土器・石器 土器・石器・装身具 土師器・須恵器 磁器・陶器・銭貨	582 Y より銅釧・ 589 Y よりガラス玉 出土			
要約	<p>西原大塚遺跡は志木市の南西端にあたる幸町 3 丁目を中心に広がる市域最大規模の遺跡である。柳瀬川を北西に望む台地上に位置し、197 地点に及ぶ調査（平成 25 年 11 月現在）により旧石器時代から縄文、弥生、古墳、奈良・平安時代にかけての集落遺跡として知られている。</p> <p>今回の調査地点は、西原大塚遺跡の南西部に位置している。弥生時代後期～古墳時代前期の集落が主体であるが、旧石器時代・縄文時代・平安時代・中近世と、幅広い時期の遺構・遺物が確認されている。</p>							

志木市の文化財 第 56 集

西原大塚遺跡第 179 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号

発行日 平成 26 (2014) 年 3 月 15 日

印 刷 明誠企画株式会社